
Only one end is the best.

飛鳥

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Only one end is the best .

【Nコード】

N7971N

【作者名】

飛鳥

【あらすじ】

特筆するところのない傭兵カグラがなし崩しに巻き込まれた世界滅亡の危機。世界滅亡の危機って、なし崩しに巻き込まれるほど頻発するものだったけ？

ともあれ巻き込まれたものは仕方がない。仕方ないから、どうにかするよ。

ストーリー沿い予定のファンタシースターポータブル2の二次創作です。

Only one end is the best .

「おい、カグラ」

呼ばれて、一瞬の間を置いて振り向いた。

別に振り返ることに逡巡や葛藤があつたという訳ではない。ただ、疲れきった脳が声を認識することを拒絶しただけだ。おかしいな、心癒されるマイパートナーマシナリーの声とかならちゃんと意味が浸透するのに、どうしてオッサンの心癒されない声はブロックするんだろ。あ、結論出ちゃった。心癒されないからか。

髭に囲まれた顔面を持つ男の靴が、悠長なリズムで通路の床を鳴らす。心なし上機嫌な様子に顔を顰めた。

「お断りだ」

「何で名前呼んだだけで断るんだよ！良いから聞けって」

「聞いたが最後、寝室に戻ることもなくまた宇宙へ向けて出荷されんだろ！アンタ、私の今週の睡眠時間知ってるか！？」

7日間で1桁時間だよ。1日2時間寝れてないってことだよ。どうしてだと思ふ？私は使い捨ての実験動物じゃねんだよ？

殺意すら含ませた視線に、さすがのクラウチも思い切り顔を逸らして黙り込む。鬱陶しい前髪から髭にかけてを、さつき手に入れたばかりのS級大斧ノヴァクラッシュで全部刈り取ってやりたい。手元が狂って脳漿ぶち撒けさせたって構わん。

じわりと動いた右手を即座に警戒する態勢は評価する。一足先に取り出されたナックルが防御の形を成すのを、ここ数日間で研ぎ澄まされたハンターの本能を抑えてじつと見据えた。

隙がない。ないなら作るまでだが、さて、どうやって作ろうかな。プレイヤーに変わってこようかな。卑劣罠師の称号を欲しいままにしてきた私の畏地獄を果たしてオッサンごときが避け切れるかな？

「・・・で、ご用件は？」

「あー、いや、ガーディアンズがな、合同訓練どうだっつってな」
「お断りだ！」

何が悲しゅうて緊急性もない訓練なんぞに借り出されなきゃならんのか。クラウチさんよ、人の話聞いてたか？私の睡眠時間、上乘せしてアンタに貸し出してやろつか？目覚める補償はしないけど。

開いた右手に光の粒子が収束。髭面の引き攣った顔に向けて、武器の形成が完了する前に腕を大きく振り抜く。残念ながらバックステップの逃げ足に追い付くことはできなかったので、変わりに舌打ちを一つぶつけておいた。

「おま」

何だ。私は眠いんだ。疲れてるんだ。用件は簡潔に述べろ。

「ノヴァクラッシュって、アホか！一撃食らったらどうなると思ってんだ！？」

「世界が平和になる」

「・・・つまりお前をどうにかしないと俺には平和は来ねえってことだな？」

「何を図々しい。私の睡眠時間という正義をことごとく金に換える魔王には、私だけどうにかしたって平和なんぞ来ねエんだよ。世界を滅ぼす覚悟で来い」

「そうかそうか、平社員ごときがよく言った」

「アダルト画像開いてくうたらしてる上司なんぞ怖かねエよ」

武器をS級ドリルナックルにチェンジして構えなおす。狭い通路である。巨大な武器は不利なだけだし、私はそもそも一瞬の隙を見付けて突き込むスピードタイプだ。

殴り合い上等。カモン得意分野！

「カグラー、訓練の話聞いたー・・・って、な、何してんのよあんなたち!？」

「私が人として在るための尊厳を賭けた決闘」

「俺の平穩を守る誇り高き聖戦だ」

朗らかな笑顔で駆け込んだエミリアには悪いが、ここは下がついて欲しい。船内を挟らないように拳を伸ばすことで精一杯だから。告げると、物凄く頭が痛そうな顔をして蹲った。

大丈夫？

「ばつかじゃないのー!？」

大丈夫そうなので改めて拳を握る。

クラウチがフェイントに身体を揺らすのを平静に見送った。はは、前線傭兵舐めんよ。こちらら単発の動きだけで判断するほどアマじゃねんだよ。あと前から思ってたけど、クラウチにナックルって似合わないよね。銃でも撃ってるオッサン。

互いに臨界点まで高まった闘志を練り上げ、爆発させるべく同時に踏み込んだ——瞬間。直前で広げた視界の中に収まる冷たい笑みに、身体は正直にバックステップを刻んだ。

拳を空振りさせたクラウチがたたらを踏む。本来なら姿勢を崩してやるべきだが、更に大きく跳んで逃げ出し。

「船内で暴れるんじゃないわよ!」

「すいません、ママ!」

びばしと放出された雷に背筋を震わせて直立した。恐る恐る床に視線を這わせると、黒焦げたクラウチが無残にゴミと化している。おお、危なかった。あと一歩生存本能の自己主張が遅れていたら、見事なアフロヘアーを披露するところだった。

留まるかとも思ったが、彼女は急いでいるらしい。すらりとした長身で優雅に去っていくウルスラの後姿を敬礼したまま見送った。

角を曲がったのを見届けて、詰めていた息を吐く。

「もー、無駄な喧嘩しないでよね！オッサンとカグラが喧嘩したら、このフロア使えなくなっちゃうでしょ！」

「そこまで派手にやりあわないよ・・・」

そのために殴り合いに切り替えたわけだが、聞く耳は持たれなかった。じつとりと責める視線に耐え切れず顔を背ける。分が悪い。

「で、模擬戦の話、聞いた？」

折角背けた顔を引き戻されて、期待に輝く瞳が私を射抜く。

「パス」

「えー、どうして！ユートとあたしとカグラで、接中後の完璧トリオでしょ！？」

「変な戦隊組まないで頂きたい。あんね、私、お疲れなの」

ここ一週間でどれだけの大物を狩ってきたことだろう。Aランクをソロマラソンって、命は投げ捨てるものだとも思ってるんだろうか。良い武器も防具もたんまり稼げたが、そんなことより私は睡眠時間が欲しいのだ。赤箱なのか。それとも睡眠時間は虹箱なのか。それに、腰に下げた無骨なナイフも手入れしなければいけない。強靱な金属をナイフとして打ち伸ばしただけの代物なので、錆には弱いのである。基本的には武器はスロットに引っ込めてあるが、やっぱり常時携帯しておいた方が抜くのは早い。余計な飾りも機能も何もないが、傭兵業を始める前からの相棒である。未永く生きていて欲しいじゃないか。

「そりゃ疲れてるだろうけどさあ。相手はルミアとイーサンとカレンだよ？うちのトップが不在じゃ駄目でしょ！」

「へー、トップだったとは知らなかったなあ」

そりゃ私だってフハハーン騒動の収束に一役買っただけあって、

決して弱いつもりはない。ないが、トップか否かと言われれば否であるはずだ。

スピードタイプではあるが、ビーストハーフのユートには負ける。パワーでは無論男どもに勝てるはずもなく、女性平均よりはちよつと上、程度。全体評価ではハンターとしては実に平均的なステータスだ。ヒューマンだというのにスタミナもあんま特化してないし。おまけにキャストかつてくらい法撃力がどん底這つてゐるから、テクニクなんざ軒並み全滅である。レスタが消毒薬ぶっかける程度の回復力だよ。ていうか回復しないよ。

カグラが人に勝るもんつつたら、姑息な戦闘手段と動体視力、咄嗟の判断力という名の本能くらいなものである。

「近接ならトニオが良いんじゃない？戦歴長いし、お前ら問題児でも綺麗に纏めてくれるよ、きつと」

「何で！トップって言われるの不満なの！？」

「不満ていうかさあ」

「かつこいいじゃん！」

「お前、私にツノとか付けんのマジ止めるよ！？」

突如掲げられた主張に、マガシの有様をふいに思い出してぞつとした。思わず額を押さえて後退る。こいつ油断すると人間でも改造してきそう。

おい止める。手伸ばしてくるな。私はこれ以上人口密度と面倒濃度が濃密になる前に自室に退散して惰眠を貪りたいんだ——心からそう思うんだけど、裏切りはいつも私に対して真摯である。裏切りにだけは裏切られたことがない。裏切りとは、私の生涯の相棒と言ひ換えても良い。

「カグラ、参加しないのか！？」

裏切られた！とでも続きそうな声に嫌々振り向く。ほら相棒がやってきた。

視線の先でユートが非難の目を向けてくるのを、思い切り嫌な顔で迎撃してやる。まあ、効く相手でもないんだけどね。

「・・・たつた今から私はクラウチに改名して、クラウチはカグラに改名するよ」

「俺を巻き込むんじゃねエよ」

「誰のせいだろうな」

「なー、カグラ・・・クラウチ！一緒に出よう！」

ほんとこの子はめげない子だな。よしよしと頭を撫でて、そっと指を横に向けた。

「クラウチはあっちだよ」

「今お前が改名したつつたんじゃねえか？」

「やつぱり、私が髭モツサモサ面のオッサンと同じ名前つてのは悪寒が走るから撤回する」

ついでに、クラウチがカグラと呼びかけられるのを考えても虫唾が走る。

何はともあれ、私の答えは誰が何と言おうとNOなのだ。いい加減開放されても良かろうと、話の収束を待たずに歩みを進める。

後ろから一步遅れて着いて来る3人に視線を向けるのは止めた。

目が合ったが最後、今度こそ捕獲されるに違いないのだ。私は雑食。彼らは肉食。血の滴る牙は怖い。

「ねー、良いじゃんケチー。これ終わったら、気が済むまで寝れば良いじゃん、ねー！」

「4日前にそう言われて、それから2回も出撃命令出てんのは何でだろうな」

「新しい必殺技考えたんだ！カグラじゃないと当たったら駄目だから、一緒に出よう！」

「ふざけんなクソガキ。私だって当たったら駄目だろ。認識を根

本から訂正しろ」

「おいカグラ、」

「テメエどうせ何か報酬出んだろ」

「出る」

抜いたナイフは髭の一部を掠めて落とした。悲鳴を上げて通路の壁に張り付いた姿に、ナイフを仕舞い直して大剣を出現させる。

「自分で出るッ！」

「年齢制限あんだよ！」

誰だそんないらん設定すんの！

「21歳までだつて」

「・・・それ、カレンやイーサンが出ただけだろ。決めたのルミアか。それとも出たくないマヤさんか」

あるいはカグラを引っ張り出したい4人共かもしれない。ちくしように、悪意を感じる。

21歳以下で近接戦闘に特化している人間を脳内で検索したが、目ぼしいのが見付からない。22歳ならいるのに。制限22歳なら押し付けるのに。シズルはリトルウィング社員じゃないしなあ。

ブツブツと呟きながら、大剣を担いで歩を再開。出しつ放しなのは当然クラウチの口が気に入らん言葉を発した瞬間に成敗するためである。頭頂部から股間まで見事半分に両断してやるから、良く考えてから発言するように。

自室へはロビーを通過する必要がある。閉ざされた扉を開けるべく操作パネルに手を伸ばす。

「とにかくだな——」

扉は、勝手に開いた。私がどうにかする前に。

口を噤んで、パネルに向けていた目をそのまま固定した。見たくない。扉を開けた人物の存在感到、非常に覚えがある。

「お、カグラ、久しぶりだな」

「何だ、渋っていると聞いたが、やる気じゃないか」

「今日は大剣ですか、負けませんよ！」

「あ、私、船に忘れモンしてきたような気がする」

返した踵は、襟首を掴まれて無駄にされた。ふざけんなクラウチ。
「だから、しねえって！」

拒絶は完全に無効化される。こいつらは絶対、聴覚異常のバッドステータスを患ってるに違いない。もしくは高級耳栓のスキルを生れつき・・・あ、いや、これは違う世界だ。何でもない。

クラウチの手からイーサンに襟首がバトンタッチされて、後ろ向きに連行される。当然こいつに敵うわけもなく、暴れた先から諷められて無駄に終わった。英雄サマに先制取られて勝てるわきゃねエ
だろ！

「勝ったほうに賞金出るからな、全力出せよー！」

わかった。もういい、わかった。最後の力を振り絞ってこの心底
どうでも良い模擬戦とやらに付き合ってやるから、コレだけは言わ
せる。できれば叶えろ。

クラウチ死ね！

O n l y o n e e n d i s t h e b e s t . (後書き)

ファンタシースターはこれしかプレイしてないので設定にミスが多いかと思いますが、お気付きの場合、お知らせ下さると非常にありがたいです。

ところでジャンルはもしかしてSFでしょうか。ファンタジーだよね。

0 - 0 私 の 足 跡

カグラは両親を探すために傭兵になった。

両親が行方知れずだ、というと、聞いた人全てが痛ましそうな顔をする。それこそ誤解なのだが、いくら訂正しても慈愛の微笑みが返ってくるだけなので、いつしか訂正を止めた。いつの間にか悲劇の人みたいな扱いをされていたのは居たたまれなかったものの、こちらから話題を振らない限り、被害は温かな視線だけである。わざわざデッドゾーンに足を踏み入れる馬鹿はそうそういないものだ。

目撃情報を集めるときには心に鎧を被ることにした。同情は、覚悟が足りないといと心臓に致命傷を与えるのである。できるだけ感情を込めないよう心がけた。それがより一層、悲しみを押し殺しているとか辛い誤解を生んだのだが、後悔は後にしか立たない。諦めた。

そもそも何故両親を探し始めたかといえば、国の国民管理局に睨まれたためである。

ヒューマンのカグラが所属していたコロニー『チキウウ』内の二ホンというエリアは、決まり事にやたら厳しい区域だった。罰則が厳しいということではなく、しっかり届けを提出しろということだ。届け出さえすれば、大抵のことは許可される。

だというのに、カグラが8歳の頃に宇宙一周がしたいとかアホな目標を立てて旅立っていった両親は、まさかの無申請出国をやらかしたらしい。管理局職員がまだ帰らないのかと何度も訪ねてくる生活。鬱陶しいことこの上なかった。始めは同情露わにやってきていたのに、段々苛立ちしか見えなくなってくるのである。最後は恫喝しか寄越さなくなった。あれは最悪だった。思い出したくもない。

我慢を止めたのは、12歳の頃。幼子が4年間も針の筵に耐えた

のだ。我ながら素晴らしい堪忍袋だったと思う。

区域内の傭兵ギルドが若輩極まりないカグラを認可したのは、扉を潜ってすぐだった。普通であれば、アメちゃん1つ与えて追い返すところである。

カグラの養育環境は、一般人にはオススメできないものだった。ハンターとフォースの夫婦喧嘩は地獄の一言である。何もしないで傍観していると、武器やら法撃やらが突き刺さるのだ。子はかすがいとはよく言ったもので、カグラが父親の後ろ頭を張り倒して気絶させるまで喧嘩は続く。腕も鍛えられようというものだ。

無骨なナイフ一本と適当な旅支度を担いでギルドの戸を開けたカグラを迎えたのは、音速で飛来した一振りの日本刀だった。当エリアの特産武器である。ぎょっとしながら振り抜いたナイフで刀を弾き、飛んできた方向へ反射的に荷物を全力で投球。荷物は見事、ギルド内で暴れまわっていた馬鹿者の顔面に直撃して、ノックアウトに追い込んだ。

かくして実力不足で追い返されることもなく、ギルド入りは達成された。

あつけないもんだと思ったものだが、まあ、ギルド入りというのは宇宙に進出するための足掛かりに過ぎない。一般市民がコロニーから出るとなれば、リゾートへの旅行くらいのものである。それでは、あの両親は搜索し得ないのだ。

もう一度言う。両親はハンターとフォースである。母親がハンターで、父親がフォースである。それらが、普通に、他所様のコロニーにお邪魔するだけで満足するだろうか。否。宇宙一周したいとほざいたんだから、彼らは間違いなく惑星も踏破する。奴らにはそれができるだけの实力がある。

なればこそ、カグラは旅行者であってはいけなかったのだ。傭兵でなければ、宇宙を自由に動けない。

ハンターを選んだのは、一番には母の強さを見てのことだった。父も強くはあったが、接近戦闘の鬼と渡り合っては、後衛たるフォースは勝ちを譲るしかない。かつ、そもそもカグラにテクニクの才能はなかったので選択肢から全く除外されていたということもある。フォースだけはなかった。ちなみにレンジャーは射撃が得意ではないためアウト。ブレイバーの才能はあったと思うのだが、しかしカグラは大剣だとか大斧だとか大槍だとかに憧れていたのである。これはもうハンターにならざるを得ない。

16を数えた頃にカグラはギルドを抜けてフリーの身に落ち着いていた。抜けた理由は前述の通りである。特定ギルドに所属しては、自由な身ではられない。

ギルドからは脱退を存分に惜しまれた。4年お世話になった身としては後ろ髪も引かれたが、目的が変わってしまったのも癪だったので素直に立ち去った。

脱退宣言と共にガーディアンズから就職のお誘いが掛かったということは、そこそこの実力者として認められていたのだろう。16歳でこれなら、という先行投資かもしれない。傭兵ギルドと同様、自由行動が際限なく許される場所でもないので、無論、丁重にお断りさせて頂いた。

それから5年。カグラは未だに両親を探し続けている。

家も引き払ったし管理局から追跡されているわけでもないのを見付けたところで何もないのだが、ここまできれば後は意地だった。9年間も宇宙を渡り歩いているのだ。ここで止めては私が廃る。

「レリクス・・・レリクスね。物珍しさに来てる可能性もあるかもなあ」

今度こそ、という思いを胸にするのは、息をするのと同じ行為に

なっていた。同時に、過剰な期待をしないようブレーキを設置しておくのは瞬きと同じレベルの行為である。両親がここにいなくても、傭兵業に苔が増えるだけだ。支障はない。必要な階段を登ることは、何も忌避すべきことではない。

さて、調査を募る一枚の紙。この紙一枚が、まさかこうも自分の道を捻じ曲げるとは思わなかったわけだが。

1 - 1 彼女と出会い、

遠くで閉まった重厚な扉を、柱の影からこっそりと見守る。先刻よりは鳴動も落ち着いたようだが、土埃は相変わらずパラパラと舞い落ちてきた。黒髪に降り掛かった石粒を掻き耨るようにして振り落とす。

活動を開始したかもしれないレリクスから逃げ遅れて閉じ込められた。同業者に知られたら爆笑を頂くこと間違いなしの事態であるが、今回の場合はわざとであるから笑われたって言い訳が立つ。多少イラッとして拳を顔面に打ち込む程度の仕置きはするけども、力グラの方には全く問題はない。

だって、考えてもみて欲しい。

レリクスとは、公式見解に寄れば数千年前から1万2千年前に謎の滅亡を遂げたとされるグラールの旧文明が遺した遺構である。既に大半が朽ち果てているはずの旧文明の遺物だ。

レア物だよ？ 赤箱程度にはレアだよ。そんな場所に、我が両親が興味を惹かれないもんだろうか。否。否である。間違いなく2人の垂涎の的になる遺跡である。

まあ、レリクス情報握ってたら話なので、あの人たちの情報網に期待するしかないんだけど。どうだろうなあ。情報戦では散々勝利を譲って貰った過去があるので、考え直してみると期待しない方が良いのかもしれない。

危険ではあるが、虎穴にいらすんば何とやらという言葉もあることだし、まあ、何とかするでしょう。

「ちよつと、誰か、誰かいらないの！？開けて！開けてよおッ！」
聞こえてきた声に、あれ、と視線を巡らせた。まだ誰かいるとは思わなかった。というか、わざとじゃなく取り残される人間がいる

とは思ってなかった。

お口をしつかりとチャックした扉を必死に叩く少女に目を見張る。確か、髭面のオッサンと言い争いをしていた子供だった。あのオッサン、保護対象置いて避難しやがったのか。だとしたら日の目を見た暁には、太陽光の下で息をしていることを入念に後悔させてやる必要がある。脳内で10通行程の拷問方法を選出して、ピックアップした1つを心に留めた。

ところでこの子、結構近くまで寄っても気付かないんだけど、ドの付く素人さんなんだね。足音も別に殺してないんだ。

「ねえ、誰かいらないの！？誰か——」

「はい」

「ひぎゃあああああああああああああああ！」

誰か、というから返事をしたのに、その反応は酷いと思う。全力で声帯に圧力を掛けた声に鼓膜をやられて、一瞬意識が遠退いた。何という超音波兵器。

引き攣った顔でこちらを見返す赤い瞳には、恐怖心がありありと浮かび上がっていた。可愛い服に包まれた小柄な肢体を縮めて壁に張り付いている。

ここまで怯えられていると、申し訳ない声の掛け方をしたなとさすがに反省しようというものだ。震える金色の髪が綺麗だなあとか、思っただけで口に出してはいけない。

「だ、誰！何！？まさかSEEDとかッ！？だだだ、駄目！食べさせておいしくにや」

噛んだ。

「同じく脱出しなかっただけの一般ヒューマンだよ。噛み付いたりしないから、まあ落ち着いて」

「ううう・・・」

今のは別にカグラのせいではないと思うので、涙を湛えて睨み上

げる視線には屈しないことにした。よしよしと頭を撫でて、髪にくっ付いた砂をついでに払ってやる。

「私は傭兵のカグラってんだ。ちよつと事情があつて残ったんだけど・・・置いてかれちゃったの？」

探るように見詰める瞳を見返すことに迷いはない。痛い腹なんかどこにもないよ。

暫しの沈黙。顰めっ面と溜息を置いて、少女は漸く警戒を解いたのか肩を落とす。

「カグラ・・・ね。私はエミリア。エミリア・パーシバル・・・オッサンはそもそも扉のあっち側にいたから」

別に置いてかれたわけじゃないもん、と。震えて消えた語尾に思うところがあつたので、語る言葉に突っ込むのは止めた。落ちた瞳が暗く翳る。次の瞬間には、呆れたようにカグラを見据えたので、思うにこの子は強い子なんだろう。心が強いのは良いことである。

「ていうか、脱出しなかったってことは、脱出できたってこと？こんな危険なトコで、ばつかじゃないの!？」

「でも人がいて良かったと思ってるでしょ？」

間髪入れずに切り返すと、言葉に詰まって顔を背けた。

ははは、ツンデレさんめ。多分茶々を入れなければ「でも・・・あんたがいてくれて・・・な、何でもない!」みたいなセリフが聞けたに違いない。しまった、惜しいことをした。様式美を無駄にするなぞ勿体無いお化けに憑き殺される事態である。寝物語に幼心に刻まれた恐怖感は易々とは払拭できるもんじゃない。おどろおどろしく語られた怨霊を思い浮かべて背筋に悪寒が走った。純粹に怖い。唐突に頭を振るカグラに寄せられた訝しげな視線に気付き、何でもないよと手を振って。

「で、どうするの」

「え」

向けた水に、エミリアは口を開けた。

え、って、だから、どうするの？

「どうするって・・・どうするって？」

「私、奥に進むけど」

「え、ええええええええええ！？」

再び扉に張り付いて、オブジェのごとく一体化する。その状態で首振ったら後頭部が装飾にゴリゴリ擦れて痛くはないかと心配になるんだけど、そういう瑣末は彼女の頭にないらしい。良かったね、痛覚が鈍感なようで。

「無理、無理無理無理！危ないって！止めた方が良かったってッ！」

「ったって、最初からそのつもりだったんだし。じゃあ、エミリアここで待つてる？」

「絶対無理」

意外と冷静である。泣き出しそうな顔から一転無表情に、力強く言い切った様には感動すら覚えた。

実際にはここで待機していた方が生存率は高いはずである。救援は、結局先程閉ざされた扉から吐き出されるのだ。しかしそれもあくまで、救援が到着するまで無事に過ごせばの話。エミリアに前提を保持できる戦闘能力があるかという事実とは全く別の話だ。

奥で蠢く無数の生命体。レリクスは確実に起動している。人に敵意を持つよう誘導された『敵』がこの広場まで辿り着くのも時間の問題だろう。エミリアが戦えるのであればここで孤軍奮闘するのが賢い選択だろうが、生憎、動作や目線の配り方から推測するに、エミリアに実戦経験はない。一人で残れば待つのは良くて死。最悪の場合、性質の悪いに精神異常攻撃食らって、救援部隊に成敗されるなんてシナリオも。

「ちよっと、何か嫌なこと考えてるでしょ！？」

「うん」

となれば、本当ならカグラが留まってガードしてやるのがベストなのだが。

「私もやることあるしなあ・・・」

「そこを捻じ曲げてさあ、助けてよ！」

「奥行くの邪魔されないように残ったんだよ」

そういうことなので、自分が留まるのは論外だ。人命か信念かと問われれば無論人命を選択するカグラだが、千載一遇のチャンスを無駄にするほど諦め良くはない。

「入り口から扉までみつしり罨張つといてあげるから、何とかできないう？」

手持ちの罨を全部置いていくとなると少々戦力が痛いものの、少女の一命のためである。それくらいはすっぱり我慢しようと思い提案した。が。

「できない。起動のタイミングなんてわかんない」

「ええー」

やはり即座に否定された。

上に乗ったらボンツと起動させるだけだよ。早めだったり遅めだったりしなきゃいけないこともあるけど、それはまあケースバイケースだよな。

しかし、頑として出来ないと言い張られるとなると困った。死ぬと分かっているのみすみす見なかったことにするなど、出来ようはずもない。命に換えられるものなど、この世に存在しないのである。

仕方ないし、諦めるかと渋々と、本当に渋々と自分に言い聞かせ始めた、その矢先。

「・・・ね、じゃあ、あたしも着いてって、良い？」

おずおずと、掛けられた声に瞠目した。言葉の意味を飲み込むのに数秒掛かる。飲み込むも何も言葉のままその通りの意味だったの

だが、あんまりにも予想外だったのだ。

「危ないよ？」

「だって、一人でいる方が危ないし」

そりゃそうだろうが、だからと言って危険度がぐつと下がるかと言えはそうではない。奥には何があるか分からないのだ。それなりに危険に慣れたカグラ一人でも対処しきれるかどうか未知数だというのに、エミリアまで背負って無事でいられるものだろうか。

カグラは良い。覚悟の上の決行だ。だが、エミリアは。

「危険だしさあ、仕方ないしこっちは諦めて、私ここに残っても良いよ？」

「でも」

エミリアには、信念に基づく覚悟なんてないのだ。ただ逃げ遅れて、助かりたいというだけの話である。そんな子供を危険地帯に引き連れて行くのは躊躇われた。守りきれなくて無残に、なんて未来は想像したくもない。

ならばカグラが諦めれば良い。そもそも、迷う方がどうかしている。でも、もしかしたらと思うのだ。両親がいるかもしれない。そう思うと、無暗矢鱈と気が逸った。

でも、とエミリアは顔を俯けて、言葉を落とす。

「カグラがそのために残ったんなら、あたしのせいで台無しにすんの、嫌じゃん・・・」

ああ、諦めよう、と思った。往生際悪く右往左往していた心が潔く納得を示す。何一つ、躊躇いなど残りはしなかった。

「・・・わかった。いいよ。止めよう。こっちは問題ない」

「でも！」

「良いんだよ」

微笑み一つ落として、否定の続きは止めさせた。本当に、良いん

だ。清々しくさえもある。

他人を思いやれる人間ほど愛しいものは世界にない。彼女がそういう人間だというのなら、カグラはそれを守り通すべきなのだ。自分の中にはそういう信念が根を張って鎮座している。それこそ、子供を放って放浪している両親なぞ塵と消えるほどどうでも良いことである。

戸惑うエミリアの頭に手を置いて、そうなれば、と脳を稼動した。効率良く罠を仕掛けて、カグラは中距離から起動と攻撃に専念するべきだろう。エミリアは恐らくフォースだろうと当たりを付けて、後方支援の伝達情報を纏める。とにかく扉が開くまで持てば良い。それならいっそ、奥に続く通路をカグラが陣取ってしまえば良いかとも考えた。それも良いかもしれない。通路のあっち側から一列に罠仕掛けたら、差し当たって全弾命中は確実だし。ただそうになると、罠に最大多数を誘導して一度の撃破は難しくなるか。時間引き延ばすんならやっぱり広場に仕掛けた方が――。

「つと、何だ？」

「な、なに、何？揺れてる！？」

ふらつく小さな身体を支えて、再度鳴動を開始した周囲に目を向ける。

――揺れが妙に大きい。先程より、ずっと。

不味いか、と舌打ちを一つ。戸惑うエミリアの腕を引っ張って、奥へ続く回廊に駆け出した。

「す、進むの？」

「崩れるかもな」

短く吐き出すカグラの言葉に引き攣る短い悲鳴が返される。しかしすぐに覚束ない足元に力を込めて、彼女は自分の力で走り出した。本当に強い子だ。

落下してくる瓦礫を避けて、エミリアの頭上に迫った岩盤を武器で弾き、カゲラはひたすらに思う。
頼むから、浸水だけはしてくれなよ。

1 - 2 歩みを進めたその矢先、

鎌を振り上げる原生生物の懷に潜り込み、伸び上がりざま掌底打ちを食らわせる。顎を仰け反らせたところでのど元に向けて右手を薙いだ。

一瞬遅れて出現した大剣の重みを無視して振り切る。頭部が鞠のようにポンと飛んだ。黒い煙にも似た血液を飛び散らせてバランスを崩す鯨の化け物。細身の身体を蹴り付けて、その後ろから飛び掛ろうとしていた小物にぶち当てる。

切っ先を後ろに置いてきた武器を、腹筋を酷使して半円を描くように地に叩き付けると、事切れたエビルシャークの身体ごと左右に両断される小さな生物。一拍置いて落ちてきた鯨の巨大な頭が、床で跳ねて転がった。

エミリアが慌てた様子で杖を振り被るのが見えて、急いて落ちた頭を固いブーツで蹴り飛ばす。少女の視線の先で、ずんぐりむつくりとした得体の知れない生物が身を痙攣させて崩れ落ちた。ああ、勿体無い。あそこに張った罨はもう少し先で有効活用できる予定だったのに。

内心で嘆きながら大剣を帰還。光の粒子が消え去る前に腰のナイフを抜き取り、飛来したタヴァラスの急所を刺し貫いた。悲鳴を上げて大地に伏す姿を目撃することなく、罨の隅に偶々引っ掛かって沈黙していたバジラに向かいナイフを投擲する。

意思を失った筋肉が弛緩。ガランと重たい抗議の声を上げて床に落ちたナイフに走り寄る。故郷で言う、鉈のような形をした長年の相棒。全長にして50cmを誇る大振りのそれは包丁職人の近所のじいさんに鍛え上げて貰った一品だが、そんじょそらの武器とは勝負にもならない切れ味、強度である。あの人は武器製造に鞍を乗り換えるべきだと思うんだ。

「・・・すつー。さすが傭兵、て感じ。ていうか、傭兵って皆こんなに凄いの？」

「上下はあるけど、大体こんなもんじゃない？」

「あたしは無理だあー」

経験の差だと思うけど。

「カグラは傭兵、いつからやってんの？」

「12歳からかなあ」

「12！？完璧に子供じゃん！」

「フリーになったのは16からだけどね。最初から一人でやってこうと思うほど無謀じゃなかったし」

漏れる溜め息は呆れか感心か。手を止めてこちらを見返すエミリアの頭を軽く小突いて前を向かせる。やたら湧いて出てくる敵意は、まだ数体残っているのだ。

「だからそんなに強いんだあ・・・」

「経験豊富なだけだよ」

右足で大地を蹴り、左足を軸にして踵から敵に叩き付ける。詰まった距離を取り直してナイフを収納。変わりに出現させた大槍の重量が両手を支配した。

「ていうか、今いくつなの、カグラ」

「21」

「うつわ、英雄さんと一緒じゃん。さすがあ」

「あのね、世界にどんだけ21歳が蔓延ってると思ってんの。寿命を100年と考えると凄く適当に大まかに言えば、100人に1人は21歳・・・あれ、こう考えると何か少数だな。100人に1人の逸材？」

エミリアに補助テクニック発動の指示を飛ばし、大きく踏み込む。

「まあ、エミリアはテクニックの才能あるし発想も悪くないから、

経験値積みめば私より強くなれると思うよ」

嬉しい誤算だったのは、エミリアの才能が思った以上に高かったことだ。てつきり足枷になるかと思っていたが、意外や意外。テクニク系統の威力は、フォースの中でも既に中堅ランクに位置するだろう。

惜しむべきは使いどころを知らないせいでチャンス逃しまくるところだが、それは仕方がないことである。むしろ初心者でここまで反応できれば上出来。後方支援には十分な実力である。

「ほんとに！？よおっし、俄然やる気出てきたッ！」

振り翳した杖に炎が宿る。カグラが槍の柄で張り倒した原生生物を包む、フォイエの火球。慌てて後退した次の瞬間には爆発して、ちよつとした戦慄を覚えた。

「やる気は良いけど、状況は見ような！」

「ごつめーん！」

余熱でウェルダンとか絶対嫌だからな。その軽い謝罪の中に決して誠意は探し出して貰えないことを肝に命じとけ、エミリア。

ともあれ。

「一先ず終わった、かな。エミリア、お疲れ様」

「えへへ、カグラも、おつかれー」

ガランとした広場に気配はない。しばしの休憩とばかりコンテナに腰を下ろしたカグラの隣に、エミリアは充実した顔で座り込んだ。

さて、あとのくらい奥があるものか。

崩壊の危機が去った後、比較的頑丈だと思われるエリアで待機しようとして提案したカグラを否定したのは、エミリアの何となく興奮したような顔だった。あれだけ危険だ危険だと騒いでいたのに、いざ一歩踏み出してみると冒険に心が躍り始めたらしい。

カグラの初めての冒険もそんなもんだった気がする。初実践に緊張していたし、恐れも抱いていたけれど、好奇心には勝てなかった。気が逸って先輩傭兵に迷惑をかけまくったのは良い思い出である。カワクネに包囲されたあちらは悪夢だっただろうけど、可愛い後輩を育て上げるための些細な犠牲であるとして綺麗に昇華していて欲しいものだ。でないと、再会したときにまた脳天をカードでぶすつとやられるハメになる。

かくして、エミリアのゴリ押しによってカグラは奥に進むことになった。願ったり叶ったりのはずなんだが、この釈然としない感は何だろう。振り回される立場ってこんな心地なのか。

「——ってな感じでさあ、嫌だって言ってるのに、オッサンてばあたしを無理矢理働かせようとすんのよ」

酷いよね！と高らかに声を上げて主張するが、生憎カグラは同意しかねる。

「いや、それは働こうよ。働かざるもの食うべらかずだよ。働け」

「何、そのちよつと良い言葉。だって、だってさあ」

そういえばことわざって文化圏違うと通じ難いんだっけ。

途端に拗ねたエミリアに、でかい虫型生物を切り捨てながら、まあ、と付け足した。

「最初が未開のレリクスってのは酷いと思うけどね」

「でっしょ！？あたしだって普通の仕事ならこんなに渋らなかつたっての！」

我が意を得たりと意気込んで前方に炎撃を放つ彼女に苦笑した。渋らなかつたってのは嘘だろう。何を宛がっても文句を垂れたに違いない。

ただ、やはりレリクスは短慮だったのは確かである。こればかりは髭のオッサンことクラウチとやらに申請する必要があるだろう。拷問の件も、嫌がらせランクにまで下がったとはいえなくなったわけではないんだぜ。

そうそう、意外と言えば、エミリアの知識がやたら豊富なのに驚かされた。レリクスに対する見解やら詳細やら、カグラの知っていることから知らないことまで訥々と口にし出したときには思わず手放して誉めちぎってしまったが、本人はオツムの回転の良さをあまり他言したくないらしい。

そういうこともあるだろう。慌てた様子でこれくらいは常識だと言いつけるから、じゃあ私は常識人じゃないんだねと軽く返しておいた。悪いことをした子供のような顔は見ものだったと思う。

実際きちゃんと常識人かと言われたら首を傾げるしかないので開き直ってしまえば良いのに、謝ろうかどうかどうしようかウロウロ迷ってるんだ、この子。何てからかい甲斐のある子だろう。少女よ、このまま純真であれ。悪い大人に染まったら駄目だよ。

そんな軽い雑談を連ねながら進むうち、他より少し開けた場所に出た。

レリクスにはこういう場所がいくつかある。生活空間だったのか何なのか。古くから学者たちが拳つて研究を重ねても答えの出ないレリクス。時折転がる遺産の数々は、現代の人間にすら早すぎるほどの力を持つオーパーツである。あまり性質のよろしくない物体もあるので、エミリアが好奇心で身を滅ぼさないことを祈るばかりだ。

床から伸びたいくつもの柵のポールのような棒。しかし柵にしては横棒がないし、高さにはばらつきがあり過ぎる。隣で足を止めたエミリアも違和を感じているらしく、顔を顰めて振り返った。

「うわ、何か嫌な感じの場所・・・カグラ、GO！」
「イエッサー」

調子出てきたなあ、この子。

ポールが伸びる場所に視線を向けて、なけなしの法力を目に集める。途端に視界に浮かび上がるレーザー光。試しに余っていたモノメイトを投げてみると、光に触れた瞬間、粉微塵に爆発した。なるほど、中々にえげつないトラップらしい。

縦横無尽に張り巡らされた不可視の光を避けて進む。跨いだり潜ったりできるものは良いとして、槍を使って棒高跳びしないと越えられないのって、侵入者警戒にしたってやり過ぎだと思っんだ。警備員が飛んでくるんじゃないやなくて即死だし。あ、セコムって二ホンの警備会社の固有名詞ね。

辿り着いた先で端末を適当に弄って感知光を解除する。詳しい操作方法がわかんなくても解除できてしまうつてのは問題じゃないかといつも考えるのだが、こちらにとっては好都合なので突っ込まないことにしている。

さっすがー！と遠くで叫んだエミリアが駆けってくるのを、微笑ましい気持ちで見守った。

想像よりもずっと簡単に進める道中に、自分は明らかに油断していたのだと思う。気を引き締めているつもりではあったのだが、それでも足りなかったのだ。遠足気分の子供を連れる自分の立場を把握できていなかったのかもしれない。

何度でも経験していた失敗を、こんな形でまた味わうなど、思ってもみなかった。

後悔は、いつも後ろからしか歩み寄らない。

1 - 3 私と別れて動き出す。(前書き)

残酷な描写タグを付けました。

原生生物戦の辺りで迷ってたんですが、今回はちょっとアウト。

グロというわけではないと思うんですが、死人注意ということをお願いします。

1 - 3 私と別れて動き出す。

原生生物を殺し続ける状況が様変わりしたのは、エミリアに疲れが滲み始めた頃だった。

「何、これ」

一段と開けた空間で巨大な機械が鎮座していた。直立する、カグラの3倍はあるつかという人型兵器。その他には何もなく、ただただ今までと同じようにいくつもの柱が視界を邪魔している。入ってきた扉以外に道はない。つまりここが終点だった。

もはや親友となった僅かな落胆を溜息で追いつ返した。案の定、というべきである。両親の影も形もない。

一通り景色を取り入れた視界を正面に戻し、酷く精巧に作られた兵器に近付こうとするエミリアを押し留める。

「凄い・・・こんな複雑に作られた大型自律兵器、初めて見る」

「複雑じゃなからうとそんな頻繁に見るもんじゃないしねえ」

シルエットは優美とも言える。曲線と直線が芸術的に組み合わせられたボディは、しかし観賞用では決してない。

肩に組み込まれた円盤は一見力強さのアピールに見えなくもないが、その実、金属によるフォトンの循環障害を防止する目的であろう。大きく開いた間接部の空間には、起動時にはフォトンエネルギーの反応光が忙しく瞬くはずである。空いた空間は、肩、肘、腰、股関節。全て、稼動節を大きくすることで一層の力を発揮できる場所だ。装甲で覆えば確かに頑強にはなるが、その分動きは制限される。

防御を捨てて力を優先している。ということとは。

「紛う方なき攻撃タイプだな」

手に握られた巨大な斧に顔を顰めた。フルパワーで殴られたら一撃でお陀仏だろう。

「あ、名前が書いてある。えーっと・・・」

なおも近寄ろうとするエミリアの襟首は、安全のために捕獲しておくことにした。変に刺激して動き出したら洒落にならない。やや不満そうにカグラを見上げたエミリアの目が、すぐに兵器の台座に戻される。

「ええと・・・ス、ヴァ、ル、ティ、」

念のためにバックパックから雷撃系のトラップユニットを取り出して――。

「ア？――つて、ちょ、ちよつと、ちよつと嘘でしょ！？」

悲鳴にも似た叫びに、長年鍛え上げた身体は即座の反応を見せた。罌を投げ捨て、エミリアを引き倒す。同じく倒れる勢いでしゃがみ込んだカグラの頭上の空気を。

「！？」

迷惑極まりない重量を誇る何かが両断して過ぎた。風圧に疎みそうになる身体を叱咤して、お荷物を放り投げながら距離を取って起き上がる。ぎゃあ、と緊張感のない声が聞こえたが、今はそれどころではない。

銀鋼の人が直立していた。カグラたちをしつかりと睨み据えて。

「エミリアあああああああッ！」

「な、名前読んだだけじゃーんッ！」

それが鍵だったんだろう。視線を走らせると、カグラには何があるのか見当も付かないミミズが台座のプレートにのたくっていた。何でこんな得体の知れない言語読んじやっただ、エミリア。

武器スロットから適当に槍を引っ張り出して上段に構える。これ見よがしに武器をちらつかせるカグラに、兵器――スヴァルティアの視線が固定された。

よし、殺意に反応するガーディアンのは正しい！そのままエミリアに後ろ手で指示を出し、斧の届かない領域まで後退させる。

「ま、まさか、戦うの！？」

「逃げられないでしょ」

「でも！」

泣きそうな声が動かないことに舌打ちが零れそうになった。ギリギリで抑え込んで、ひらりと手を振る。エミリアが不安なのは当たり前のことだ。誰だって、そう、カグラだって、できることならこんな戦闘兵器と戦いたくはない。

思いを押し殺して、カグラは謳う。

「大丈夫」

存外柔らかな声が出た。息を呑む気配。少しだけ視線を送って、不安に満ちた顔にふと笑いが零れる。

「どうにか、するよ」

「・・・わかった。信じるからね、カグラ」

「おう」

足音が遠退いたことを確認して、方足を引き、柄を支える腕の筋肉を限界まで張り詰めさせた。

一撃目から止まったまま沈黙していたスヴァルティアが、そこでようやく目の色を変える。

「っだらあああああああああああ！」

動こうとした端、突き出した刃先で左股間接のエネルギー流動を

一瞬停止させた。振り上げかけた斧の先が、バランスを崩して床に石屑を生成する。

先制は渡さないし、生んだ隙を逃すつもりもない。

槍をスロットへ。残滓を纏ったまま身体を回し、渾身の力で袈裟懸けに振り下ろす。右股関節の外殻を擦りぬけた形成途中の光が間接の本体に触れるきわ、両手の先にソードが生まれた。切り落とすところまでは行かないものの、あからさまな破壊音を奏でてスヴァルティアの右膝が折れる。

しかしさすが戦闘型自律兵器なだけあってバランスの回復が早い。普通であればこのまま勝利に突き進めるほどの損害だというのに、刹那の後には崩れた右足の支障を切り捨てたようだった。

再び武器を消して両腕を眼前でクロスさせる。取り出したシールドが眩い光を纏うアックスと火花を散らすのを、衝撃による肩の激痛を無理矢理忘れて注視した。敵が前に進むだけのエネルギーを失ったことを確認して踏ん張る足の力を抜く。エミリアに近付けさせるわけにはいかない。

数歩たたらを踏んで腕を振り払った。邪魔な盾を更に消す。

「ちよつと、無茶しないでよ!？」

「無茶しないと勝てねエつつうの!」

掛けられたレスタに感謝した。外れかけた肩の痛みが、完治とは行かずとも緩和される。槍でも剣でも万全時に遜色なく振れるだろう。後衛がいるってのはこういうメリットがあるから嬉しい。

さて、相手のバランスに定評があるとはいえ右足を奪った功績はやはり大きい。少なくとも両足が無事である状態よりは格段に体勢を崩すのが容易であろう。

でか過ぎて上半身が狙えないという事実も勿論あったが、下半身ばかり狙ったのには明確な意義がある。カグラはいつも、体格の違

い過ぎる相手にはこういう戦い方をしていた。

「エミリア、合図したら顔面にディーガ！」

些か不安になる返事を信じてスヴァルティアに突っ込んだ。薙ぎ払われる質量に退くこともなく、更に加速してやり過ぐす。

「エミリア！」

「く、ら、ええええええええええええ！」

「ッ あああああああああああああああああああ！！」

滑った足が地を忘れる。仰け反る頭が視界を揺らす。ぶれた巨体が天地を見失つて引つ繰り返るのを、カグラは獰猛な笑みを浮かべて歓迎した。腰に瞬間触れて、端末を操作する。

— ! — ! —

だが、それで良い。こんなものでとどめを刺せる相手ではないことなど百も承知だ。あくまでもトラップは足止め。

ヒューマン舐めんな無機物が！

「トイトイツ！」

前方に突き出した腕の先で召喚陣が形成される。重なるいくつかの複雑な円形の意味をカグラは知らない。けれどこの召喚が何を成すのかは、ハンターとしての年月が魂まで刻み込んでいる。

「ミラージュブラスト——土壁ノ衝撃ッ——！」

ギシギシと甲殻を軋ませながら、スヴァルティアの巨体が動き出した。けれども遅い。

陣の光からゆっくりと顔を覗かせる、上下に重なった大小2つのキノコの化け物。愛嬌のある姿とは反対に、その性能は凶悪の一言に尽きる。狭い攻撃範囲。通常であればあっさりと回避を許す鈍重さ。それらの犠牲と引き換えに、他種に比較し圧倒的な攻撃力をするのがトイトイなのだ。

だから、カグラは敵をこけさせる。

脚部の破壊とトラップによる二重の足止めにより、狭い範囲も鈍重さもクリアした。トイトイがいくら鈍重な幻獣であろうとも、頭角を現した召喚獣を、今更避けられもしない現世が止められるものか。

転がして、固定して、圧倒的な立場から、踏み付ける！

「踏み、潰せええええええええええええええええッ！」

無造作に、獣というには意思の足りないキノコが短い腕で上部を外す。斧を掴み、力を込めるスヴァルティア。零れ落ちるように大地に触れた小さなキノコが、地面を大きく揺らし——。

「——ッ！」
「・・・っと、」

心臓を突き動かすほどの衝撃に、しばし視界が閉ざされた。巻き上がる土煙に咳を零す。後方からもゲホゲホと元気な音が響いてくるから、エミリアも無事だったようである。

探る視界に無残に潰れて倒れ伏した兵器が映り、深く息を吐き出した。やっぱりこんだけかいのと当たると緊張する。

「や・・・」

というか、正直危なかった。こかして踏み付ける戦法は個人的には必勝法だが、要は相手がこけなかったら負けるのだ。今回の功労者はエミリアである。顔面への一撃がなかったら、もっと梃子摺っていただろうことは間違いない。

「やった、やった！凄いい！カグラ、ほんとにどうにかしちゃったッ！」

飛び跳ねて感動を露にするエミリアには、自分が貢献したという意識はないのだろう。とにかくカグラが凄いいのだと捲くし立てる彼女に、自分のテクニクの腕が高いのだという自覚はないのだから、労いの言葉を掛けようと、またも痛めた肩を庇いながら振り返り。

「——エミリア！」

考えるより早く足が駆け出した。エミリアの小柄な肢体を突き飛ばし、腕に沿わせた大剣で、並外れた力を受け止める。

「・・・え？」

もう一体、とか！

ミシミシと悲鳴を上げる剣が音を上げるより早く、衝撃を殺すこともできずに受け止めた右腕が人体としての役割を終えた。脳髓を掻き散らすような痛みに、悲鳴を殺して歯を食いしばる。

残る左腕を剣の側面に押し当てて鐔を競り合った。このままでは当然押し負ける。打開策をひたすら脳内で模索するが、痛みで思考が纏まらない。

何とか、ああ、何とか。せめて、エミリアだけでも！

「カグラぁッ！！」

発狂を危ぶむ叫びと、唐突な痛みは同時だった。

背中に感じた灼熱に目の前が真っ赤に染まる。口から出たのは切り裂かれた臓腑から込み上げた血液か。のどを焼いて過ぎた鮮血が勢いを付けて大地に付着する。

「カグラ！カグラぁッ！」

空気を裂くような悲鳴が遠くで反響した。折れた膝が固い床にぶち当たったが、痛みは感じなかった。

何が、起こった？

自問に、呆然としたままの思考は答えを返さなかった。急激に翳む意識を繋ぎ止めようと酸素を取り入れるべく足掻いたが、身体の全てが言うことを聞きそうにない。赤く染まっていた視界はすぐに黒に侵食され出した。

ドン、と、背中から前面に掛けて再度の衝撃。

「……っは……」

閉ざされ掛ける視界を下に動かして絶望した。見なきゃ良かった。僅かな痛みすら知覚しなくなった二撃目は、切れた綱渡りの綱を見事に粉碎してくれた。

長大な刃が、胸を貫いて切っ先をカグラの体液で染め上げている。のどから腹に掛けて、遠慮もなく切り裂かれている。抜こうにも腕は動かない。痺れて、あるかどうかわからない。ああ、そういえば、右手の骨はどうせ粉々に砕けていた、ような。

スヴァルティアは、3体あつたらしかった。考えて然るべきだったのだ。いくら強力な兵器であつても、敵を確実に葬るためには1体では全く十分ではない。複数体の用意が当然だった。このざまは、限らない油断の結果だった。

現実のを視認して力を失った身体が、ゆっくりと前のめりに倒れ込む。引かれた刃が体内を滑る感覚は、吐き気を催すものだった。残念ながら、すでに吐くだけの余力もないが。

「・・・ッ！ あッ！ 」

何か、何かが響いている。誰かが泣いている。聴覚が働かない。もう血液が引いていく音しか聞こえない。それすら遅くなり、やがては止まるだろう——心臓の鼓動はもうないのだから。

「 」

エミリア、エミリアは、そうだ、あの子は。

「エミ、ア・・・逃げ・・・」

どこへ、と自分の中で声がする。どうやって、と睨む自分がいる。

来てはいけなかった。

進んではいけなかった。
立ち止まるべきだった。

エミリアの好奇心を収めて、救援を待つべきだった。

滝のように落ちてくるいくつもの後悔に、消えそうな自分が闇の中で瞠目した。目を閉じることも許さず、角膜に全ての後悔を焼き付ける。

もしも、もしも、次が許されるのならばと、ひたすらに、瞬きもせずに。

乖離する。

自分が自分と離れていく。

「カグラあああああああッ！」

エミリア、と落ちた吐息が虚空に消えた。

理解の及ばぬ現実は、（前書き）

ナンバリングのない話はインターバル扱いです。

理解の及ばぬ現実は、

——という夢を見たのさ。

と、納得できればそれに越したことはなかったのだが、生憎とカグラは痛みも絶望も、朦朧とした意識の中でさえ鮮明に記憶している。故に、事態が把握できなさ過ぎて呆然と口を開けた。

確かに自分は死んだはずだった。スヴァルティアの凶刃に完膚なきまでに切り裂かれた。それこそ命を取り留める一筋の希望を夢見ることすらアホらしくなるほどの完全なる死に体だったのだ。あれが夢だったというのなら、もう二度と睡眠なんて取らない。

混乱する頭がズキズキと痛みを訴える。疑問だらけでパンクしそう。バラ色ほっぺのなぜなに時代だって、ここまで問題提起に勤しんではいなかったと思う。

閉鎖的な部屋でカグラは身を起こした。固めのベッドがギシリと抗議の声を上げる。

白いシャツには血が付着していない。身体を見下ろすと、レリクスでの服装と全く同じものを着用していた。戦闘痕すら見えない布地は明らかにおかしい。確か、最奥に至る道中でも数度刃を受けていたはずである。ということは、服に関してはエミリアと出会ったあの時点まで、なかったことにされていた。

ついでに服の裾を捲り上げて胸から腹に掛けてボディチェック。
「・・・ないな」

治療痕もない。過去の幾筋もの傷はそのまま走っているが、背中から貫通した刃の線筋は綺麗になくなっている。レスタは決して万能ではないし、どれだけ高ランクの治療を施してもこうまで綺麗に直るものではないはずだ。

何、やっぱり夢なの？夢オチ？私、もう二度と寝ない。

ここがどこかを考えるほど脳の容量は足りていないが、とりあえず現状の安全度が、自分にとって死の瞬間より圧倒的に向上していることだけは理解した。だからといって混乱が収まるかと言えばそうではない。むしろ混乱するつつうの。

頭を抱えてベッドの縁に座り込む。頭の奥に違和感がある。何かこつ、電源消してすぐに起動させたパソコンみたいな動きの鈍さ。ふと、全身をやけに重く感じていることに気付いた。まあ、あんな最悪の状況が後味引いてるんだから、夢でも現実でも重く感じるのは仕方がないか。

やたらと重たい疲れに支配されて目を閉じた。部屋の橙色の明かりが目蓋を照らして透過する。急激に引き込まれる意識を慌てて繋ぎ止めた。このまま眠るのは、疲れているとはいえ今は勘弁願いたい。また死ぬのは御免である。

とはいえ、沈み掛けた意識はそう簡単には浮上しない。霞む思考が苦々しい思いで染まった。

眠りは小さな死である、とは誰の言葉だったか――。

『

』

ぱちん、と思考が晴れた。慌てて膝に力を込めて立ち上がる。

「あつらあー、おつきして・・・たのかしら？ダイジョウブ？」
「・・・だいじょうぶ」

途端に折れた膝に重心を崩されて、情け容赦ない勢いで転倒した。身体の調子も考えずにフルパワーで勢い付けるもんじゃないね。床に強打した顔面を引き剥がす気力がこつそり奪われた。

身体が重いつつつか、何、この他人がカスタマイズしたマシナリ
ーみたいな動かなさ。生まれたての赤子でも、もうちょっと「わあ
自分の身体だー」みたいな一体感あるだろう。魂が定着していない
んじゃないかと思うほどバランスが悪い。

「起きれル？」

「だい、じょうぶ」

のどもおかしい。声を出すのにどうしたら良いのか考えるなんぞ、
21歳になる成人のすることじゃないと思う。

あいうえおー、と無意味に見える発声練習を5度繰り返して、よ
うやくそれなりに舌が動く程度に慣れた。うむ、流れるようなマシ
ンガントークはまだ無理だろうが、幼児発音じゃなくなっただけ良
い。

「寝起きダカラ身体が付いてってないのカシラ。ホラア、ゆつく
リネ」

差し出された手に助けられつつ身を起こす。キャスト特有の温度
を感じさせない手は随分と力強かった。

いや、そんなことより！

「あの、エミリアって、わかる？金髪の、15、6歳くらいの女
の子なんだけど」

「エミリア？」

そう、エミリアです。

あれが夢であつたのならそれでも良い。もし夢だつたらどつか
ら夢だつたのかを神とかそれに値する存在とかに小一時間問い詰め
たい気分だが、それならそれで良いのだ。

エミリアが無事だったという条件であれば。

「チョット落ち込んでるけど、元気そうだったわヨ？」

「・・・マジか・・・」

折角立ち上がったのだが、へなへなと抜ける力を掻き集める気も起きなかった。

良かった。超安心した。あの状況で、自分が無傷で助かってエミリアがいなくなっていたら、立ち直れないところだった。生憎、カグラの心はそう強くないのだ。コンニャクみたいに柔軟性には富んでるが、露骨にぶつすり刺されれば穴が開く。

「何かあったノ？」

「何かあったんだと、思うんだけどね・・・」

興味深そうに覗き込む瞳に、力なく笑い返す。心和ませる黄緑色の豊かな髪がふんわりと滑った。

おねえさん、そんな前かがみに両手を膝に当ててると、ただでさえ男の心を躍らせる二つのお山が更に凄いことになるよ。女でも見てるのが居た堪れなくなるよ。

深く溜息を吐いたカグラをどう思っているのか、キャストの女性は一しばらく首を傾げてこちらを見詰め、やがてニッコリと笑顔を浮かべた。

「シャチヨサンが呼んでるネ。立てるカシラ・・・というか、歩ける？」

「大丈夫」

身体の間接を意識しながら力を込めれば、難がないとは言わないまでも、普通に立ち上がることは出来た。ぐっと伸びをして、確かめるように足を数度床に打ち付ける。

感覚は鈍いが、コンディションは良好。但し、元のように動けるまでには長めのリハビリが必要だろう。

「それじゃ、ワタシにしっかり付いて来てネ！」

「はぁーい」

ところでまだお互い自己紹介もしてないんだけど、まあ、その内機会がやってくるかな。

さて、その『シャチヨさん』とやらはうつかり名前だと思っていたんだけど、まさかの役職名だった。いや、正確には役職名で wasn't なかったんだけど。社長じゃないし。

「おう、元気そうじゃねエか」

ニヤニヤと、心なしか上機嫌に口の端を上げる男には見覚えがあった。頭部の8割が毛で構成されていると言っても過言ではなく、長つたらしいコートを身に纏う、毛のせいで視線の行く先が見えない胡散臭い男。

「どうも。エミリアから色々悪口は聞いてるよ」

「・・・あんなろ」

クラウチが、わかりやすく顔を引き攣らせるのを無視して周囲を見回す。

ここに来るまでの短い距離の中で、キャストの女性はカグラの疑問を晴らすように、少量の情報を与えてくれた。

ここはクラッド6の内部であること。更に言えば、軍事会社リトルウィングの施設の内部であるということ。

ああ、自己紹介もしたよ。彼女はチエルシーというらしい。キャストとは思えないほど感情表現豊かな彼女に似合った名前だと思う。足取りがどこことなく軍隊を思い出す刻み方だったことを忘れれば、の話であるが。

話を戻して、クラッド6といえば、多くの種族が疲れを癒すリゾ

ート型コロニーである。リトルウイングという名称は、一時期ニュースで話題になっていたはずだ。確か、服飾やリゾート事業などを手広く行っている大手総合商社、スカイクラッド社が母体の、民間軍事会社。

そこから先の説明はなかったけれど、何となく納得するものがある。って、少しだけ、ほんの少しだけスッキリした。

恐らく、カグラたちは救出——いや、搜索か。搜索部隊として結成されたリトルウイングに保護されたんだろう。保護の際がどんな状況だったのかは知らないが、チエルシーが『寝起き』と表現したということは、少なくとも自分は怪我を負っていなかったのだろう。

となれば、カグラの死についての解説を聞いても、多分答えは返らない。エミリアも元気だというし、会えたら聞いてみるか。

・・・と思ってエミリアを探したのだが、どうやらこのスペースには来ていないようである。

「ま、小娘への説教は置いて、だ。お前、何でここにいるか、分かるか？」

こちらにもエミリアの扱いについて言いたいことはあったが、それは後回しで良いだろう。

二ホン式に、お辞儀とまでは呼べない僅かな会釈をし、適当な笑みを顔面に装着する。

「搜索及び保護の手間、謝罪と感謝を表明するよ」

「お、噂通り、頭は回るな」

「噂？」

「ああ、いや、何でもねえよ」

やたら胡散臭い笑みが髭を飾るのを、カグラは営業スマイルを一

転させて不審さを隠そうともせずに胡乱に眺めた。

「・・・わざと情報与えないようにしとくって手段はどうかと思うね」

「悪いな」

チエルシーはカグラがなぜここにいるのかを知りたがっていることに気付いていたはずだ。にも関わらず、彼女がしたのは現在地点についての話だけ。

誰かが口止めてたんだろうとは薄々気付いていたので苦言だけ申し立てたのだが、クラウチは更に嬉しそうな顔をしただけだった。

「お前が現状把握してるってんなら、話は早い。ウチも慈善事業してるんじゃないんで、な」

前置きのつもりか本題のつもりか。カグラの両肩に両手を乗せて、似合わないにこやかな笑みを崩さないクラウチに、生まれてこの方離れたことがないカグラの兄弟が親しげに近付いて行くのが見えた。兄弟、すなわち、嫌な予感のことだが。

「レリクスに取り残された馬鹿がいるってんで急遽組まれたチームだったんだが、中々原生生物が強くてな。ウチにもそれなりに被害はあったわけだ」

「それについてはもう報酬貰ってるはずだろ。レリクスの調査チーム作った会社とか」

「本当なら、な」

含みのある言葉に髭面を見返すと、苦々しい顔をして吐き出す。

「奴ら、お前と、ウチの社員については『雇ってない』の一点張りだ」

「なかったことにしやがったってか!？」

当然、本来の傭兵業に身の保障など存在しない。時折、保険完備の一見優良に見える物件があったりしないでもないが、そういう依

頼は大概報酬が最低ラインを這っている。そして保険完備なくせに危険性がやたら低い。要は、保険があるよーという前提を作ること
で報酬額を抑えようとしている姑息な依頼である。

今回の依頼は、どちらでもない希少な例だった。

報酬はそれなりに高く、バックアップチームの編成を約束していたという破格の条件。依頼先が名の知れた大企業だったので、腕の立つ傭兵を集めるための好条件だと思っていたし、ネームバリューのためにも条件を違えることはないかとタカを括っていたのだが。

「私はともかく、エミリアは子供だぞ！？あああ、できることなら潰してやりたい・・・！」

しないけど。あの会社が潰れたら、全宇宙の人間が少なからず困るとわかってるから自重するけど。

「ま、そんなわけだな。リトルウィングは実入りなしで回収に乗り出したわけだ」

「ついでに拾ってくれたのは有難いけど」

気を取り直して笑顔を浮かべたクラウチに待ったを掛ける。

「丁重にお断りさせて頂く」

「まだ何も言っていないだろ」

「わからないでか」

言うまでもなく、お誘いである。リトルウィングに入社しろと。

恩を着せると見せかけて、実のところ間違えようもないほど明確な脅迫だ。

「いくらだ」

この脅迫は逃げるものか否か。預けてある残高を脳裏に据え置きつつ、詐欺師の笑顔を保つクラウチを睨み上げた。

「そうだな、大体・・・100万メセタってところか」

「ひゃく」

アホか、と大音声で叫びかけた声は、引き攣った肺腑に遮られる。ビクビクし過ぎて内臓が痙攣を起こしたらしい。

リトルウィングの評判はカグラだって聞いている。いわく、達成率も悪くないながら、依頼料が他よりうんと安いのだという。そりゃ景気の良い話だな、と一時チームを組んでいた仲間と笑いあった記憶があるから間違いはないというのに。

「100万メセタって、Sランク武器の一部が最高ランクまで鍛えられる金額だぞ!？」

「おいおい、武器より人命だろ」

傭兵に限っては、武器が人命を救うんだよ!

「払えないんなら、諦めてウチの一員になるんだな」

これは腰を据えて論破に掛かる必要があるそうである。そろそろ舌の調子も戻ってきたことだし、この詐欺師をどうにかして舌戦で二度と社会人として復帰できない程度に打ち負かさねば。

顔を引き締めたカグラに反応して、クラウチの表情筋も鋭く引き締まる。そういう顔をしていれば、なるほど、警備会社の責任者らしく見えなくも——いや、駄目だな。非常識なほどの毛の質量が、全てを台無しにしている。

とにかく、両親を探し出すために、カグラは組織に所属するわけにはいかないのだ。

腰のナイフに手を掛ける勢いで警戒網を纏い、口を開こうとした。

矢先。

「か、カグラー! 無事!? 無事だったの!? アンタ生きてたのおーッ!？」

響き渡った甲高い声に、完全に意気込みを持って行かれて消沈した。

ああ、ほんとに元氣そうで何よりだけど、エミリア。空気が読もうな。

私に無慈悲な選択を迫る。(前書き)

何か色々違う気がするんですが、あんまり展開にしっかり沿う気がないです。

あと、2周目はミカの話とか聞けないんですね…！
ちくしょう、展開チエックができないよう。

私に無慈悲な選択を迫る。

結論から言えば、交渉は形に入る前に打ち砕かれた。

理由は簡単である。金銭的な脅迫から、良心を抉る精神的攻撃に切り替え、エミリアを盾にした脅迫にシフトチェンジしやがったのだ。

エミリアは良かった良かったと泣いて縋って来るし、クラウチはカグラの無事を知るまでのエミリアがいかにも不安定だったかを無駄な演技力で切々と語るし、それに煽られたのかエミリアの泣き声は高まるし、周りの目は痛いし、エミリアを連れて来たらしいチエルシーはニコニコと見守っているし、拳句の果てに向けられたのは、「もうどこにも行かないよね」という実に心を攪る涙目のおねだり。クラウチが「残念だなあ、カグラはここにいるのは嫌だそうだ」と余計なことを言うと、エミリアの顔が絶望色に染まるのだ。

これに、どうやったら否を唱えられるってんだ！

死ねクラウチ。感謝の意なんか例え正当であっても述べるんじゃない。何はともあれ死ねクラウチ。

しかしまあ、要はエミリアの気が済むまで所属して、後はどうしても抜けたければ金を払ってやりや良いのだ。いらぬ武器防具の在庫を全てメセタに換えれば、ポン売りでも100万くらいは行くだろう。

折角、お気に入り存分に改良するために溜めていた愛しい在庫たちだが。

「あああああああああああ」

愛しい愛しい在庫の山を思い出して頭を抱えて蹲る。

なぜ、なぜ一息に売却しなかったのかがわかるか。売る店によって、買い取り価格が大幅に違うからだ。

その場その場の相場を見極めて、最も高く売り捌ける場所での在庫を手放す。クラッド6が1000メセタで買う商品が、モトウブの一区域だと3000まで跳ね上がるんだぞ！そんな地道で堅実な努力を続けてまで溜めてきた金の山を、何で足抜けのためなんぞに使わにやなんのか！クラウチ死ねッ！

ちくしょうと拳を握り締めながら、施設マップを空中に展開する。カグラはどこであろうと地図のチェックを欠かすことはない。なぜなら、方向音痴だからである。実は傭兵としては致命的な欠点なのだが、手持ちのシステムに自動マップ機能を組み込んでからは迷子になることはなくなった。素晴らしい機能だと思う。

自室だと指定されたポイントを確かめて通路を進むと、目的地にはあっさり辿り着いた。良かった。警備会社らしい入り組んだ構造じゃなくて。他所の警備会社ってのは侵入者対策のためかやたらと迷路みたいな作りしてるから、ああいうのだったら多分1回はウターンしてた。

照合パネルに軽く指を押し当てると、電子音と共に扉がスライドする。手袋越しでも感知するって凄いよね。

マイルームは期待していたよりずっと広いスペースを以ってカグラを迎え入れた。固有倉庫へのアクセスポイントやらドレッサールームやらベッドやら椅子やら机やら棚やら、中々色々と充実している。家具は買い足さなくても居住できそうだ。待遇は悪くないようにほっとする。

ところでベッドに変なインテリアがあるんだけど、これ蹴落としても良いのかな？

「エミリア、エミー。おい、起きろー」

しっかりと上掛けまでひっ被って、スヨスヨと健やかな寝息を立てる少女に近寄った。

こいつ、人のベッドに家主より先に寝るだとか。まさか相部屋じゃないよなと危ぶんだが、ベッドは一つしかないし、そういうわけではないらしい。良かった。この子と四六時中一緒とか、精神が持たない。

ベッドサイドに腰掛けて、顔に掛かった髪を横に流してやり、ゆっくりと束を梳く。こめかみで止めた手に伝わる体温と、かすかな脈の刻み。擦り傷一つないふくふくとした頬に、いつの間にか詰めていた息を吐き出した。

元気に動く姿を先程散々見ていたのに、頭は未だ生存を疑っていたらしい。自分の妙な慎重さに自嘲の笑みを零す。

濁流のような後悔を思い出す。もしも次が許されるなら、と呟いた自分の死に際を見詰め直す。

あり得ないことに、意味のわからないことに、自分には『次』が許された。

エミリアは、カグラを死んだものと断定していた。ということは、やはりカグラと同じく現状を把握はしていない。この疑問をぶつけて不安感を再燃させるのは酷というのもだろう。

疑問は残る。しかし考えたところでわからないものはわからない。それならば、もうあんな後悔はしないよう、考え、練り、この足を進めるべきだ。

目を閉じて、考える。この子の先を。どうすれば良いのか。自分はどうあるべきなのか。両親を探したい。けれど、離れればこの子は泣くし、何よりカグラは心配で堪らない。ならば、そう、カグラは——この子の成長を促す役目に回るべきか。

まるで姉のような思考だと苦笑する。何があってこんなに入れ込んでいるのかと自問したが、守ってやりたいと、考えてしまったものは仕方がない。撤回する気が起きない以上、カグラにできることなどただ一つ。どうにかすることだけである。

「もう二度と」

吐息に混せて、言葉を落とす。

「ヘマはしない」

ポン、と額を一度軽く叩いて腰を上げた。このまま寝顔を見ているのも悪趣味だし、部屋のカスタマイズでもするか。

足音を響かせないようにしながらベッドから離れた。とりあえず倉庫の中に良い家具でもなかったか漁ろうと、アクセスポイントに歩を進めて――。

『お待ち下さい』

花が風に揺れるような声に、ぎよっとして振り向いた。

先程までは確かにカグラとエミリアしかこの空間には存在しなかったはずだった。しかし振り向いた先には、エミリアと、もう1人、女性の姿。

素早く敵意がないことを確かめて、それでもいつでもナイフを引き抜けるよう柄に手を掛ける。

「誰だ」

膝下まで達する長い見事な金髪。^{フロント}見ない型の、ボディラインがバツチリ浮き出る扇情的ながらも神秘的な服。左右対称のバランスの取れた優しげな面立ちの中、じつとカグラを見据える金色の瞳。

――というか、何か透けてるんですけど。足の辺り、ないし。エミリアの中から出現してるように見えるし。

『ミカ、と。私は、この子に・・・訳合つて宿っている意識体です』

「訳つて？」

柔らかな、けれど緊張を孕む声に、間髪入れず質問を返す。戸惑うように揺れた視線が床に落ちた。

『・・・ごめんなさい』

「・・・まあ、いいけど」

悪意があるようには見えないが、実体験によればこの世の中、善人と見せかけて人に毒ガス吹き付けてくるような輩もいないとはい切れない。空いている距離を詰めるように一見無造作に歩み寄つて、エミリアの顔を窺う。顔色は悪くないし、今のところ害を及ぼしているようには見えない。

『エミリアに危害を加えるつもりなどありません』

こちらの危惧を読み取ったのか、毅然とした表情で言葉を紡ぐミカ。

『この子の意識がない間に、あなたに伝えたいことがありました。・・・信じて頂けないのは当然だと思いますが、どうか、私の話を聞いて下さいませんか？』

ふと、意識体だと言った彼女の胸元で握り締めた手が震えていることに気付く。表情から窺えるのは、緊張と、恐れ、不安、悲壮感。再びエミリアに――エミリアとミカの間に視線をやつて考える。結局、話を聞く以外にカグラにできることはないだろう。ミカの実体のない足元を掴んで引っこ抜くような芸当ができるわけではないのだから。

何度目になるかわからない溜息を吐いて。どっかりとサイドチェアに尻を落とす。

「わかった。できれば、手短に、簡潔にね」

『はい』

小さく頷いたカグラに、束の間ミカの硬い表情が緩んだ。美人さ
んだ。

兄弟こと嫌な予感の存在を感じないので、ある程度は気を抜いても良いだろうとナイフから手を離す。カグラは自分の勘には自信があった。なんせ、傭兵歴が長いだけあって、各種経験だけは豊富なのだ。勘とは即ち、経験から算出される答えへのショートカットである。変に疑うと、逆に答えを外す恐れが高い。これも経験である。

と、油断したところに。

『あなたは、レリクスで一度死んでいます』

強烈なアッパーカットを食らって意識が遠退いた。なるほど、簡潔だね。でもそういう衝撃的な事実は今うちよつとオブラートに包んで欲しかったなあ！

「死んでつて・・・生きてるんだけど」

『蘇生を行いました。肉体の損傷が・・・その、激しかったもので、あの・・・レプリカを作ることになりましたが・・・』

レプリカ、と口中で繰り返す。

『出会った当初のあなたの身体をトレースして、その通りの器を作り、魂を入れ替えたのです。あの身体は・・・もう、治癒では間に合わなかった・・・』

「そりゃ・・・ありがとう」

白い意識のまま、口は勝手に動いた。刹那きよとした顔を見せたミカが、続いて落ち込んだ顔になる。いいえ、と口惜しそうに零す。

『私がもっと早く動いていれば、あなたがあのような思いをすることはなかったはずなのです・・・ごめんなさい・・・』

はあ、と曖昧に首を傾げた。

カグラはやはり死んでいたらしい。ミカは、カグラを蘇生——
一概には信じられない事象だが、こうしてカグラがゴチャゴチャ考
えられているのが良い証拠である——してくれたらしい。その上、
残っていたスヴァルティアもどうにかしてエミリアも助けてくれた
らしい。

そもそもなぜカグラが死んだかと言えば、自分の考えのなさが招
いた結果である。ミカは何かしかの考えがあつてギリギリまで顔を
出せなかったのだらう。だとしたら、なぜミカが謝罪をする必要が
あるというのか。

「別にミカのせいじゃないでしょ。うん、ありがとう」

いわば命の恩人である。こんなあつさりした礼で終わらせて良い
ものか迷ったが、だからといって菓子折り差し出すのもおかしい話
だしなあ。良いことにしておこう。

一方のミカは、酷く狼狽した様子で視線を惑わせていた。そんな
とか、だって私は、とかいう意味を形成しない言葉を一頻り振りま
いて、カグラに手を伸ばそうとしたり、怯えたように引つ込めたり。
ほとんど解いていたとはいえ警戒していた自分があほらしくなっ
たので、サイドボードに肩肘を付いて姿勢をだらけさせた。自室と
いえばやはりリラックスルームであるべきである。

それで、と先を促した先のミカの言葉は、もう理解するのが嫌に
なるくらいのことだった。

ミカが、レリクスを創造した、今より遥かに優れた技術力を持つ
た『旧文明人』であること。旧文明人はSEEDによ污染されて死
滅・・・とまでは行かずとも、身体を捨てざるを得なくなったこと。
そこで自分達の身体のレプリカみたいなモンを作つて、ある程度文
明が発達したらその身体を乗っ取ろうと計画していたこと。

それでもつて、そのレプリカ的なものが、まさかのヒューマン種

だという。おいふざけんなって話ですよ。

「それ、ミ力的にはどうなの？」

『とんでもないことです！あなたたちには、意思があるというのに！』

直情的な意見をありがとう。

しかし、話によればそんな良心的な考えの旧文明人は少ないようである。

レリクスの起動には、身体乗っ取ろう計画が関わっているのではないかということなので、となればこの先、創造主とも言えるそいつらとぶつかる可能性はあるかもしれない。ミカもいることだし。何だかんだで、トラブルは惹かれあうものだ。

うわー、嫌だ。凄く嫌だ。スヴァルティアみたいな自律戦闘兵器を作っちゃえる連中と戦うって、物凄く嫌だ。

「・・・了解。気を付けるよ」

『・・・はい』

ミカの言いたいことはわかりつつも、あえてカグラは言葉を濁した。

つまり、旧文明人を止めてくれ、ということである。

勿論止められる状況なら止める。カグラだってヒューマンなのだ。乗っ取られるとあつては黙って受け渡すわけがない。しかし、積極的に元凶を探し回ってくれと言われて、はいわかりましたと答えられるほど豪胆ではないのも事実。

考えさせてね、と言外に込めたカグラの言葉に、ミカは申し訳なさそうな顔で頷いた。そんな顔されると引き受けないといけない気分になるから、普通にして欲しいんだけど。

『そろそろ、エミリアが起きるようです。どうか・・・私を助けて』

空気に溶けるように姿を消したミカの下で、エミリアがもぞもぞと身体を動かす。間抜けな呻き声が聞こえてきたかと思えば、ごろりと反転した。

ぱつちりと開いた目と、視線が合う。

「うひゃあ!？」

「おはよう、不法侵入者」

慌てた様子で身を起こしたエミリアに、もう一つ言いたいことがあるのに今気付いたんだが、まずは脳天に拳を落とす。潰れたような声を気にせず。

「土足で人のベッドに上がってんじゃないよ!」

敷布団にするぞデメエ!

番外：私の決意（前書き）

番外は他人視点。

第一弾は勿論エミリアですよ。

なお、なんか誤字脱字が非常に多くて困ってます。

気付いたら修正してるんですが、もし見付けられた方はご一報下さるとありがたいです。

（ちなみに（改）は十中八九誤字脱字訂正の跡です…）

番外：私の決意

戦う姿を見て、強い人だと認識した。

クラウチやチエルシーや、その他のリトルウィングの人の戦うところを見たことはない。エミリアは戦場に立ったことがないから当然だ。

でも、それでも、カグラはすごく強いんだ、っていうのはわかった。息をするように周りを把握して、一番必要なことをする。厄介そうな攻撃をする敵は先に倒して、エミリアが危なければすぐにフォローする。手品師みたいに次々、状況に応じて武器を取り替えて、具現化するまでのロスタイムまで攻撃の一部に組み込んで。

そっけいのは並大抵の人じゃできないんだってことくらい、自分にもわかる。

琥珀色の、飄々とした目が好きだなあと思う。

SEEDを見る目は物凄く厳しくて正直自分に向けられたら全く動けなくなってしまうと思うけど、反対に自分に向けられるときの目はやたらと優しい。呆れた目も、軽く睨む目も、怒る目も。勿論笑うときの目は言うまでもない。まるで自分がカグラにとって特別な存在みたいな錯覚に陥る。

多分、カグラが子供全般に優しいって話なんだろうけど。いや、自分は子供じゃないよ？子供じゃないけど、カグラは子供扱いするんだから仕方ない。

染めてるんじゃないかと思うくらい真っ黒い、ショートカットの髪も好きだ。

カグラには、櫛で梳くだけじゃ収まらなければドライヤーを掛けるって概念がないみたいで、いつもぴよぴよとどこかしら外に跳ねてる。その自由さがいかにもカグラらしくて、わざわざドライヤー

掛けてあげようって気にはならない。太めのコシがある髪なのに、
なんであんなにクセが付くんだろう。

張りのある声も好き。

女にしては低音の、落ち着きのある声。言葉にする内容が常に落ち着いてるかって言うと、案外声にそぐわない子供っぽいことを言ったりもするんだけど、キンキン耳を苛めるわけでもなく、低過ぎて聞こえ難いってこともない。

あの声で大丈夫って言われれば、ああ大丈夫なんだなーって思うし、どうにかするよって言われれば疑う気持ちもどつかへ失せる。そういう面では詐欺師みたいな卑怯な声だと思う。

エミリアって呼ばれると、心が暖かくなる声だ。

顔はぱつと見は男の人みたいで、よく見ても中性的。性別を断定できるほどの特長がない。

ただ、きりつとした眉とか、意思の強い目とかのせいで、どちらかと言えば男の人に間違えられてる。非常に申し訳ないけど、声を出してもどつちかわかり難い。一人称を聞いて、私ってキャラじゃないなあって考えて、やっと女の人だと気付けたのは本人には内緒にしている。もしかしたら気付いてるかもしれないけど。

ちなみに、リトルウィングに来て間違えられた数は、エミリアが知るだけで5回。そのたびに諦めたような顔をして、女の人には普通に訂正をして、男の人は問答無用で殴り倒してる。そのフェミニストっぷりが更にわかり難さに拍車を掛けてるって、気付かないもんかなあ。

スタイルも良い。良いって、こう、女の人としてって言うか、ええと、まあ、良いんだ。

全体的にすらつとしていて背が高め。傭兵だから鍛えられて、太ももとかには調度良いくらいの厚みがある。こないだ着替え見て

たら腹筋割れててビックリした。何で見てるんだって不審の視線貰ったけど、腕とかもしなやかでスツキリして、眼福だった。胸はなかった。

ただ、全身に大なり小なり傷の痕が走っていて、それだけ心が痛かった。表情を曇らせたエミリアにはすぐに気付いてカグラはさつさと服着ちやっただけど、とりあえず背中に大きな切り傷と、身体を中心に貫通する大きな傷がなかったのにだけホッとした。

——あれは、夢だったんだろう。そうに違いない。だって、そうじゃなきゃ、カグラはここにいない。カグラは、あのとき、エミリアの前で。

「エミリア」

「え、え？え、な、何！？」

突然考えていた人に名前を呼ばれて、馬鹿みたいに身を跳ねさせた。座っていた椅子が引っ繰り返って転げ落ちる。頭打った。痛い。

「何してんの？」

見りゃわかるでしょ、ビックリして落っこちたの！

特に心配そうな顔をするでもなく、カグラは扉に凭れ掛かったまま首を傾げる。そのまま扉が閉まれば良いと思うけど、残念ながら安全システムは働いているので、人を巻き込んで閉じることはない。腹立たしいし、今度メインシステム弄って、オッサンとカグラにだけ自動ドアが感知しないように改造してやろうか。ちらっとコンソールパネルに反れた視線にすぐに気付いて、カグラが嫌そうな顔をする。

「そんな悪い顔しているとクラウチになるよ。ほら、エミリア、立って」

それは嫌だと慌てて顔を矯正する。エミリアと比べてずっと力強い手に引かれ、足をふら付かせながら立ち上がる。

「何なの、いきなり」

「エミリア」

声が被って、2人して口を閉ざした。

どうぞどうぞとジエスチャーで先を譲り合い、先に折れて口を開いたのはカグラだった。

「エミリア、冒険に行こう」

一世代前のRPGのオープニングみたいな言葉に呆然としたエミリアは、あれよあれよという間にシップに連れていかれ、いつの間にかセツトされていた目的地の詳細も知らされないまま宇宙そらを飛んで——今、この状態に至る。

「ひっぎゃあああああああああああああ！？」

「ほらあ、エミリア、逃げないの。止まってちゃんと見なさい」

「む、無理だって、無理無理無理ッ！」

突進してくる岩の化け物からひたすら全力疾走で逃亡しながら、遠くで同じくコルトバをあしらうカグラに叫ぶ。質量メツチャメチャに違うはずなのに、何でそんなに簡単そうに受け流せるの。

追い付かれそうになったところで、ようやく助けの手が入る。とはいえ、銃を2、3発威嚇射撃して気を逸らす程度のもの。すぐに気を取り直してエミリアを睨み付けるから、身を震わせて逃走体制に入る。

「だから、ちゃんと動き見て当たれば大丈夫だって」

「そんないきなり言われてできるわけないでしょおお!? 帰
りたああーい! もお、帰ろうよおおおおおッ!」

「うーん、じゃあヒントだね」

泣き言に耳も貸さず大剣で目の前の獲物を一刀両断したカグラが、
暇そうに剣を担いで声を出す。

もつとボリユームを上げて喋って欲しい。こっちはザカザカ鳴る
足音と耳を切る風の音で、あんまり聴覚が良好じゃないんだから。

「そいつ、真っ直ぐしか走れないよ」

「そんだけ!？」

「十分です」

あとは本当にフォローしてくれる気はないらしい。一応これ以上
エミリアに向かう敵が増えないよう、周りの敵の意識を引き付けた
り数を減らしたりはしてくれてるけど、そんなことより助けて欲し
い。

「ええつと、まっすぐ、まっすぐ」

てことは、曲がれば良いのか!

ようやく思い当たって、右横に飛ぶように急転回。バランス崩し
て草むらを転がるハメになったけど、コルトバは唐突に視界から消
えたエミリアを追ってこれなかったようだった。大分行き過ぎたと
ころでキヨロキヨロと首を回している。

「や、やった!」

「あ、馬鹿。何で声上げちゃうの」

ガッツポーズで歓声を上げたエミリアに、カグラの呆れた声が届
く。え、何。だって、逃げられたんだから――。

「ぎゃああああああ! 来ないで、来ないでええええええええ
ッ!」

「逃げるのが目的じゃなくて、倒すのが目的でしょ。見失ってる

間に攻撃。隙を逃すとどうなるか、身を以って覚えようねー」

またもおっかけっこを開始した耳に聞こえた言葉に涙を呑んだ。
そついうことは先に言って欲しい！

でも、自分は先程学んだのだ。急に曲がれば目を眩ませられるつてのは、この鈍臭さなら何度でも通用するだろう。

再び、今度は体勢を崩さないようにステップを踏んで横に飛ぶと、そのままテクニクの施行を開始した。

ええと、コルトバは火属性だから、有効なのは。

「いっけえ、バーター！」

ロッドの先から走る青白い光が地面を張って直進する。周囲の草がパキパキ凍って線を残した。

カグラのストック在庫に眠っていた氷のテクニクは、見事にバツチリとコルトバに命中して悲鳴を上げさせた。もう一発、と振り上げたロッドを地に叩き付ける前に、揺らいた巨体が地面を揺らして寝転がる。しばらくじたばたしていたけれど、やがてゆっくりと動きが止まって。

「や、やった？倒した！？」

動かないことを確認して、今度こそ快哉を叫んだ。

やった、ざまあみろこの岩イノシシ！エミリアさまを追い掛け回すからこういうことになるんだ！

きやあきやあと飛跳ねるエミリアの後ろで、爆発音が鳴り響いて、びっくりして止まる。

「はいお疲れー。エミリアはもうちょっとしっかり敵を見ようか。動きが分かれば、もっと簡単に倒せるようになるよ」

武器をストックに戻したカグラが悠々と歩いて寄ってきた。あの、今のもしかしてトラップ？10体くらい集ってたのが一気に全滅したんだけど、どういう使い方したら一撃で終わるの。

「だってさ、1人で戦うのなんて初めてだったんだよ！？できるわけないじゃん！」

「度胸の問題かね。できなくはないよ」

「度胸じゃなくて、安全性の問題！」

「しつかり見極めれば安全性は上がるんだよ」

「いーい？」と手を横に伸ばして虚空を握ったカグラが一步離れる。足を踏ん張って、腕には重いものを支える準備のように筋肉の筋が浮かび上がっていた。

腕の先で、広い範囲に光の粒子が集まって大きな槍を形作った。柄はカグラの拳にしっかりと捕まれて馴染んでいる。武器は振るわれることなく、すぐに消えた。

「私は今、槍を出しました。じゃあ、次に出すのは何だ」

両の手を腰の横と胸の前に小さく構えて軽く握る。腰は落としたけど、槍を支えたときみたいに地面を踏み固める感じじゃなくて、すぐに移動できるように踵を浮かせているように見えた。

「・・・ナツクル？」

自信はないけど首を傾げて呟いたエミリアに、カグラは良く出来ましたと微笑み掛ける。

ふわりと拳を光が包んで、青白い炎みたいなものが揺らめくナツクルが装着された。やっぱりすぐに帰還させられる。

「何でナツクルだと思った？」

「え、だって、構えとか」

「ツインダガーの可能性は考えなかった？」

矢継ぎ早に問い掛けられて口ごもった。考えた。考えたけど。

「だって、カグラって、ナツクルは今までも使ってたけど、ツイ

ンダガーは使ったことなかったし・・・なんとなく、ナツクルかなって」

改めて口に出すと、理由にもならない理由だ。どっちかって言うのと勘みたいだな。途端に恥ずかしく思えて首を竦める。

「その見方で良いんだよ。まず、エミリアが構えを見たとき、重心とか、手の位置で判断したろ？そういう風に動きを見てればある程度先の行動は予測できるし、それに対する自分の動きもあらかじめシミュレートできる」

カグラは満足そうに笑ってエミリアの髪を掻き乱した。

「それで、固体には行動パターンってのがあってのがあるの。私がツインダガーよりナツクルが好き、みたいなさ。特に原生生物は単純だから攻撃の方法ってのはそこそこ決まってる。尻尾振ったら突進してくる。大きく口開いたら炎を吐く。みたいな。そういうのわかってたら、わかんないときより戦うのはずっと楽でしょ？100%じゃなくて良いから、高い可能性を考えて、低い可能性を念頭に置いて行動する。そのために、敵の観察は最重要。今後に備えてもね」

わかる？と言ったカグラに、少し考えて頷いた。できるかどうかは別として、理屈は良くわかる。できるかどうかは別として。

カグラは満足そうに一つ頷いて踵を返した。

「このままディ・ラガン行こうかと思ってたんだけど」

「止めて」

なんでもない口調に本気を感じて、鬼気迫る声で自重を促す。振り返った顔は少なからず残念そうだった。

「まあとりあえず、まず知って欲しかったのはそんだけだから、目標達成ってことで、帰ろうか」

素直に頷いて、頼もしい背中について行く。そんなに大きな背ではないのにやけに大きく見えるのは、あらゆる経験の差から来るエ

ミリアとの貫禄の違いだろうか。

襲い掛かって来る生物を皆薙ぎ倒してきたから、帰り道に敵はいない。しばらくは黙ってカグラの後ろを歩いていたんだけど、思うところがあつて小走りに隣に立った。

「ね、カグラさ、何で私に戦い方教えてくれたの？」

黙って見下ろす視線に含みを感じる。ちよつと目を逸らして、もう一度こちらを見た目には、特に引掛かる感情は乗っていないかつた。

何だろ。気のせいかな。

「・・・危険なときにさ」

赤く染まり始めた空を見ながら、ぼつりと呟くように零れる言葉。落とさないように慎重に拾つて続く言葉を待った。

「私だけじゃきつと、力が足りないから」

強いカグラが、まるで弱音みたいなことを吐いたのに目を瞠る。

「エミリアも手伝ってくれたら、きつとどうにかできると思うんだ」

益々丸くなったエミリアの目を、カグラが横目で見て苦笑した。頭を軽く撫でてシップに乗り込む背中をぼんやりと見守る。

あのカグラが。あの、自分を守ってくれる、エミリアよりずっと強くて、多分傭兵の中でも強い部類に入るだろうカグラが。

エミリアを必要としてくれる、とか。

「え、え、何それ、ちよつと」

ものすつごく、嬉しいんだけど。小躍りしたいくらいドキドキするんだけど。踊って良い？歌って良い？どうせカグラしかいないし、歓声上げても良いんじゃないかな。自分が、いつかの自分が、カグラに頼られてるんだよ。

「エミリアー、帰るよー」

「ッ！今行くーッ！」

駆け出すその傍らで、エミリアは思う。

カグラは、優しい人だ。エミリアは足を引っ張ることしかしていない。なのに、エミリアを見捨てることなくここにいてくれる。

本当はカグラにはしたいことがあるってわかってる。リトルウィングに所属する気なんか全然なくて、エミリアが駆け込んだときにはクラウチに交渉するところだったって気付いてた。気付いてて、泣いて、クラウチが煽ったのに乗って涙を強めた。

泣いたのが嘘だったわけじゃ決してないけど、でもきつと、自分のしたことは卑怯だった。泣き喚けば、カグラが断れなくのを知ってたんだから。

だから、恩返しをしよう、と思う。

自分のした卑怯なことが拭えるわけじゃないけど、それでも、できることをしようと思う。少しでも、カグラの期待に沿えば良い。少しでもカグラの助けになれば良い。

どこまでできるかわからないけど、このままウジウジしてるより、ずっとマシなはずだ。

まずは強くなろう。

そう決意して、カグラに笑いかける。よくわからなさそうな顔をして、それでも笑い返す顔に、何度も決意を繰り返した。

強くなろう。カグラを助けられるくらいまで。

2 - 1 疑問と搜索、

「それじゃ、行つくよー！」

「おー」

やたらめつたらテンションの高いエミリアの後ろで、呻きにも似た合いの手を入れる。

片手を天に突き上げた体勢で、少女はぴたりと動きを止めて。

「何。何でそんなテンション低いの」

「だってなあ」

振り返る不満面に、カグラも臆することなく口を尖らせた。

「今回の依頼内容、把握してる？」

「してるよ」

してて、そのテンションなのか。それは素晴らしい仕事欲である。

クラウドに押し付けられた依頼は、厄介といえば厄介だし、ある意味では難易度の高いものだった。

ある人間を探し出し、捕獲して、こちらの要望に応えさせるという。

搜索対象はワレリーつつたっけ。オッサンの名前とか無駄に覚えるのは精神に苦痛を伴うからできれば止めたいんだが、仕事となれば仕方がない。場所はある程度特定できている。モトウブの一角、クラウドッグ地方だ。あそこらは人が開拓していないせいか縄張り意識の強い原生生物が多いので、実に積極的に襲い掛かって来るだろうことは間違いない。

人に要望を応えさせるというのは難しい。殺すだの守るだのつてのはこちらが勝手に動けば良いが、言うこと聞かせるには意志を曲げさせる必要がある。何より、ない袖は振れない。

要望の中身は簡単である。貸したものを返せ、と。

つまりは、まあ。

「借金の取り立てにやる気満々で向かってもなあ」ということである。

「何言ってるの、カグラ。どんな仕事だって、誰かが困ってるから依頼するんじゃない！ばつちりこなして帰らないとッ！」

立派な心掛けだが、軸が妙な方向に飛んでってるのはいかなものだろう。

「困るのクラウチだろ？困れよ」

あの髭星人が個人的に貸した金が返ってこなくなつて、自分は一向に構わん。よつて。

「今回のテンションは、ひたすらこんなもんだと思え」

「ぶー」

ぶーたれない。

急降下したご機嫌を見ないフリして、着地したシップの扉を開ける。念のため外を警戒しながら地に降り立った。

少し開けたスペースにはカグラたちの船一台がぼつんと置いてあり、あとは一面、鬱蒼と生い茂るジャングルに埋め尽くされている

——はずだった。モトウブは全体的に緑の少ない惑星だが、文化保護地区であるここら一体、そういう景観が当たり前のはずだった。なんせここは保護地区という名の観光施設ではあるが、整備はされていない危険地帯である。ときたま学者たちが足を踏み入れることはあるものの、それならばこぢんまりとしたシップ一台か、大規模な研究であれば大型シップが着陸するだけだ。

それがまさか。

「うつわー、なにこの船の量」

開けたスペースを占領するかのような、船、船、船、船。色取り取り

のそれらはいっそ圧巻だった。所狭しと密集している辺りでは、撤退するときにぶつかり合いまくって墜落したりするんじゃないだろうか。

普通ではあり得ない光景に眉を顰めて辺りを見回した。人の気配はない。

「エミリア、ちょっと待っていてくれる？ 船から離れないようにね」
船があるってことは人もいたってことだ。身に馴染んだ嫌な予感に導かれるまま、森の入り口に駆け出した。

しゃがみ込んで見詰める雑草生い茂る地面には、無数の足跡が微かに刻まれていた。草の倒れ具合からするとそう古いものじゃない。精々今日か昨日くらいのもんだ。足跡の数からすれば、悠に20人は越えるだろう。

それだけの数の人間が、こんな僻地に一体何の用だ？

「カグラー！」

聞こえてきた声と複数の足音に立ち上がって振り向いた。

「エミリア。待ってるって——あれ、トニオじゃなか。久しぶり」

「うわ、マジでカグラじゃねえか！」

エミリアの後ろから付いてきた2人に内1人には非常に覚えがあった。ていうか、昔ちよつと一緒に行動したこともある奴である。小さな背丈と童顔から一見子供のようにも見える小ビースト種族。ビーストの中でも力は弱いものの小回りの利く種族なので接近戦に

は定評があり、トニオは中でも戦闘能力が高い実力者だ。

しかし確か、トニオはガーディアンズに所属してたはずだけど。

「知らないのは、お前の通信が繋がらないせいだろ・・・止めたんだよ。今はフリーの傭兵だ」

「だって前の端末オシヤカになっちゃったし。ああ。そういえばガーディアンズって制服が一新したんだっけ？」

「・・・・・・・・・・」

まあ似合わないよね、トニオには。やたらキツチリした型とか、それ動きにくいだけでメリツトないんじゃないかと思う凶器のような肩パットとか。

「お前だって人のこと言えないだろ！」

「私、ガーディアンズ入る気さらさないもん」

仮に入ったってあんな制服は御免ですよ。似合わん自覚もあるの
で、支給されたところで即座に汚すか破り捨ててポイするし。よくあんな制服で皆さん我慢できるなとTVに映るたびにいつも感心している。

「で、そちらさんは？」

「あー・・・その、だな」

褐色の皮膚でもはつきりとわかるほど顔を赤くして目を逸らすトニオにピンときた。

「恋人？奥さん？奥さんだったらおめでとう。初めまして、私、こいつの古い友人でカグラです。以後よしなにー」

につこり笑って差し出した手は、同じく笑顔で握られた。長い黒髪のツインテールがさらりと揺れる。

「ありがとう、最近結婚したんだ。で、あたいはリイナ・リマッてんだ、よろしく！」

トニオの柄の悪さを払拭するほど明るく友好的な人のようである。トニオのくせに良い人見つけたな。

ねえねえ、と裾を引かれて視線を落とす。

「どういう知り合い？」

非常に簡潔な疑問に少し過去を振り返る。どういふと言われれば。

「昔一緒に馬鹿やってた」

「・・・だな」

一瞬不満そうな顔をしたトニオだが、思い返して納得したらしい。頷き合う自分たちに呆れた視線が加えられたが、若いときなんて誰だってそんなもんだろ。子供の心を忘れないってのは大事だと思う。

まあそれはさて置き。

「どういう状況？」

「俺たちは文化保護地区の見回り依頼だよ。観光でもなさそうな船が大量に降り立ったのが不審だってな。いざ来てみたら・・・こうだろ。普段全く人の来ない区域にこんなだけ船があつて、人っ子1人いないってのは何が何だか」

こつちと似たようなもんか。

指を下に向けると、つられて視線を地面に落としたトニオの眉が寄った。じつと足跡を見詰めて唸る。

「大体20前後つてとこだよ。全部森に入る方向。大きさと歩幅からして9割は男だろうね。ただ、原生生物の住処に足を踏み入れるには気が負いが無いというか、足取りが無造作過ぎる感じ。それと、革靴みたいなので来てる奴もいるね。普通こんなとこ、ハイキングにしても革靴なんかで来るか？」

「お前、相変わらず搜索系得意だな・・・大体何で道にもなつてない草むらの足跡見付けられんだよ」

「嫌なこと企んでの隠し事は見つけやすいんだ」

「企み？」

同じく足跡を、しゃがみ込んでまじまじと観察していたリイナが顔を上げた。傍らで、こちらも座り込んで不可解そうに顔を歪めていたエミリアもカグラを見上げる。

「一応獣のとはいえ道らしい道があるんだから、普通の人間はそこ通るよ。そうじゃなければ見付かりたくない、後ろめたいことがあるんだろ」

具体的には知らんけどね。そういう人間の思考つてのは、同じ立場に立ってみればいくつか候補が上がるもんだ。自分が姑息な人間だから考えるまでもなく浮かび上がるよ。

何、その凄まじい勢いでドン引きした顔。ここは素晴らしい洞察力だと尊敬の視線を送るところでしょう？

ものを知らない奴らはひとまず置いて、密林に視線を伸ばす。鬱蒼とした森の奥でぎゃあぎゃああと騒ぐ獣たちの声。一筋縄ではないかなんかがありありとわかる禍々しさに、正直入り込みたくはないが足を進めた。

「トニオたちもどうせ奥入るんでしょ。一緒に行こうよ」
数秒遅れて、おう、と声がしたので、振り返ることもなく構わずに地面を踏み締めて歩く。

さて、これだけいて船に戻る奴がゼロつてのも、おかしい話だけど、どうなっているのかな。

2 - 2 誤解と迎撃、

「そんでさ、カグラ、何かアテあるの？」

「ない」

「何でないのに率先して進むんだよ！自信満々に道切り開いてんじゃねえよ！」

「足跡もバラバラしてるしねえ。仕方ない、この周辺っていうところカーシュ族の住処があるし、ひとまずそこへ向かおうか」
そういうことになった。

足跡に沿って密林を突き進んだは良いけど、足跡は道でも迷ったのかウロウロウロウロとあっちへこっちへ移動している。2手に別れ、更に2手に別れ。こっちは4人しかいない上、エミリアは1人で放り出せるほど実践経験積んではないのだ。自分に分裂しろって話なら断らざるを得ない。

よって、最初からその予定だったらしいリイナの提案で、原住民族のカーシュ族のもとへと足を向けた。村は場所を転々と移動するらしいが、そこ彼処に残されている直線が複雑怪奇に重ね合わさった文字が村へのヒントであるらしい。

こんな文字が読めるなんて、リイナは博識だなあ。

「誰かさんと違って」

「テメエ、こっち見んじゃねえよ」

お前も読めないだろと険を前面に押し出した口調で言われるが、カグラは他の言語で幾つか習得しているのだ。ヒポポタマスと水棲人のカヴァッツ語とか。公用語一択のトニオと一緒にしないで頂きたい。

「ちょっと、喧嘩しないでよ！わかんないなら見てたらその内覚えられるじゃん！」

「それで覚えられるなら苦労しねえよ・・・」

「私もそれはちよつと無理だなあ」

立て看板の裏にひっそりと刻まれた目印を解読するリイナが苦笑いした。ごめんね、バックコーラスが煩くて。

そんなこんなで自然溢れる中を進んでいるのだが、中々どうして原生生物が鬱陶しい。物凄い勢いで攻撃的だからである。ただでさえ厄介な生態の獣が多いのに、まるで嫌がらせのように怒りを漲らせた様子で特攻がましてくるから腹が立った。なんなの、あの毒撒き散らす花。

「エミリア、足元危ないよ」

後方から申し訳程度にハンドガンで支援する。慌てて退いたエミリアのロッドが業火を生み出して花弁を焼いた。マンドラゴラのような奇声と、イタチの最後っ屁のような毒の花粉。

少なからず吸い込んで咳を繰り返す少女に毒消しを差し出した。

「・・・あのさ、アンタ、戦ってる？」

向けられたジト目に、うん、と頷いて。

「応援つてのは立派な戦いだと思ってる」

「それはサボってるってんだよッ！何でお前1人ぐうたらしてんだ！？」

面倒くさいがな。

というのは冗談で、先行者の足取りを確認しているのである。

敵の全滅を待つて調査しても良いかと思っていたのだが、どうも切れる気配がない。メンバーの危険にはフォロー入れてるんだし、最近良いことなかったし、少しくらい大目に見て欲しいもんだと思う。

「で、どうなんだい？」

鋭い歯列を間一髪で避けたリイナが、跳ねるように退避してきた。

追って迫る敵を代わりに迎撃する。

どうだ、クロスカウンターは痛かるう。１メートルは吹っ飛んで動かなくなったずんぐりむっくりを横目に、これ以上の収穫はないなと先に進む。

「５人くらいに減ってるね。さっきのカーシュ族の目印から迷いがなくなってるってことは、目的地が間違っていないと見て良いと思う。あと」

「あと？」

言葉を切ってエミリアを下がらせ、脇道から襲撃を仕掛けてきた小物を一閃。黒い煙を噴出しながら身悶える身体を蹴り飛ばして脇に寄せる。

「１人、やたら足取りに隙がないのがいる」

妙に自信に満ちた足跡があるのだ。踏み出す歩幅は均等で、圧力の掛け方に偏りもない。

原生生物に襲われたような形跡は見えるのだが、足取りには乱れが一切見当たらない。攻撃時の踏み込みの跡すら見当たらないのだから、手だれという言葉も霞むほどの腕前の持ち主である。

「・・・きな臭くなってきやがったな」

「ここらで気を引き締めた方が良くもね——と、リイナ、目印」

「はいよ」

岩壁に、今までよりはつきりと刻まれた記号群を見付けて足を止めた。良い具合に原生生物の群れが途切れている。

手にしていた大剣をストックに戻し、ハンドガンとチェンジした。追って来てる奴もいるかもしれないし、近付いて来たら打ち抜いてやる。なお、遠距離戦の腕前は、ツインハンドガン使ってる理由が

『数撃ちや当たる』の信念であることから察して頂きたい。

手にしたAランク武器のエビルツインズは本来は2丁1対の代物だが、右手の方は帰還させた。両手が塞がっていると武器変更に僅かではあるがラグが発生する。もしもの際にはやはり近接武器が確実であるし、それを思えば自由な手を確保しておくのが望ましいだろう。安全装置を解除してフォトンを銃身に回して待機した。

トニオと逆方向を向いて立ったカグラに、エミリアは感心した視線を向けてくる。さすが元傭兵って感じ！とか思ってるんだろう。多分傭兵じゃなくても警戒くらいするよ。

「あれ」

視線を岩壁に移したエミリアが声を上げたので、横目で表情を確認した。

「どしたの。疲れが吹っ飛んだような清々しい顔して」

「カーシユ族の村、結構近くにあるみたい！」

眩しい笑顔で壁面を見詰めるエミリアだが、驚きに染まった顔で視線を向ける小ビースト夫婦には気付いているのだろうか。自分はエミリアが時々、あり得ないほど頭が回ることに慣れて来たが。

「もー、敵は邪魔だし、歩きにくいし、疲れちゃったから、早く着いてゆっくりした・・・い・・・」

気付いてなかったらしい。

「・・・なー、なんて・・・」

尻すばみに小さくなった声が途切れる。引き攣った笑顔が張り付いて、2人の驚き顔に目を向けようとしない。

そんな複雑な顔でこちらを見られても、フォローできないよ？ふいつと顔を逸らして警戒に身を入れる、フリをした。後ろ頭に殺意が突き立った気がしたが、エミリアごときの殺意はどうってことないので気にしない。

「お前、カーシユ族の文字が読める、のか？」

「でも、最初は読めなかったよね？」

「え、い、いや、あははは！ほ、ほら！さつきからずっとさ、リイナが読んでるの後ろで見てたし、普通読めるように、なるですよッ！？」

だから、あんたも読めるよねと水を向けるのを止めて頂きたい。いくつ目だったかの目印のときに、そんな超人スキルは所有してないと否定したはずだ。

「よ、読めるのよ、普通なの！誰だって、ちゃんと見てれば読めるようになるのが、常識なの！」

常識って言葉好きだよね、この子。

拳を握ってはつきりと言い切ったエミリアに突っ込む気力も失せたらしい。怪訝そうな目を向けながらもハングアップしたトニオに、エミリアは勝ち誇った顔を向けた。

「ほらあ、わかつたらさっさと行こ！？カーシュ族の集落はあっちだって――」

そのまま誤魔化すように駆け出したエミリアを呆れながら見守つて。

「エミリア、退けッ！」

「え？」

襲い掛かる数本の矢を視認して声を荒げた。反対方向を警戒していたことが災いして、方向転換のコンマ1秒に阻害される。

悠長に振り返ろうとしたエミリアの身体をトニオが攫ったことに心底安堵を覚えながら、煮えくり返る腸はらわたの赴くまま、矢の飛んできた方向へ拳銃をぶっ放した。

岩肌を削り、木を貫いて、一応目標にも届いたらしいフォトンの銃弾に襲撃者の足が止まる。ふわりと空中に展開された召喚陣に、カグラは思わず目を見開いた。

「あれは・・・!」

——ミラージュブラスト!

リイナの驚愕の声に一瞬の硬直が解ける。慌ててこちらにもミラージュブラストを展開し、飛翔する業火の塊を氷の刃で打ち消した。ミラージュブラストは疲れるのであまり行使したくはないんだが。

「エミリア、構えろ、襲撃だ!」

「わ、わかった!」

エミリアとトニオに駆け寄りながら、ハンドガンを消してツインセイバーに変更した。位置を変えて、襲撃者とエミリアの間に立つように陣を取る。同じく駆け寄ってきたリイナがトニオの僅か後ろに立った。

4対の視線の先で、襲撃者——どう見ても青年に全く届かない少年がギラギラとした琥珀色の瞳をこちらに向けていた。

「おまえ、ここから先には行かせないぞ!」

民族衣装に身を包んだ少年が吼える。威嚇のつもりだろうか。そんなん全く怖くないもんねばーか

ばーか。犬歯を剥いて同じく威嚇し返した。

額に巻いた幅広のバンドから飛び出る髪は真っ黒で、トニオがちらつとこちらを見る。

「・・・弟か何かか?」

「生まれてこの方一人っ子だ!」

目と髪の色だけで兄弟にされるなら、世界に何人の血縁が誕生すると思っただのか。射殺す勢いで睨み付けると、さすがに即座の謝罪が返った。

気を取り直して向き直る。

「で、何だって?カーシュ族が、何の罪もない人間にいきなり襲

い掛かるってのはどういう了見だ!？」

あからさまな憎しみをぶつけてくるこの少年がカーシュ族であることは、格好からして恐らく間違いない。知り合いのカーシュ族も確かあんな格好をしていたと思う。

かつ、あの開幕早々のミラージュブラスト。そもそも、ミラージュブラストは彼らから伝えられた『技術』である。グラール中に普及したのが僅か1、2年前なのだから、辺境の部族ではカーシュ族以外に使用できる者など存在しないはずだ。

「ふざけるな! 村をあんなふうに・・・これ以上は、絶対に許さない! 村は、ぼくが守るッ!」

血を吐くような叫びに眉を潜めた。トニオとリイナの表情を確認して、深く溜息を吐く。

「・・・あのさ、もしかして、すつごい勘違いとか、されちゃって・・・ない・・・?」

「だろうね」

恐る恐る口に出したエミリアに頷いた。

弓を消して槍を構え直す姿に、鎮火しかけていた怒りが込み上げる。要は、勘違いからエミリアは殺されかけたのだ。恨み晴らさでおくべきか。否。断じて否。絶対に許さない、絶対にだ。

よって、とりあえず全力で気絶させる方向性を脳内会議満場一致で可決した。手心など加えてやるものか。

「来るぞ——つて、おい、カグラ!？」

大地を蹴り付けた小柄な肢体に向かって駆け出した。

突き出された槍を左手で往なし、逆手に握り直した刃を一閃。衣を引き裂いて過ぎたセイバーを、再び半周回して握り直し、鋭く突き出した。肩を掠って血を散らす。当然突き立てる気は毛頭ないの

で、狙いの通りだった。武器を消し、代わりに握ったものを大地に落とす。

怯まない度胸は認めてやるが、腕の差を感じられないのは実戦経験が乏しい証。度胸と無謀は別物だ。後でたんまり悔やむが良い！

カグラの両手から消滅した武器に、少年の顔が驚きに染まった。

初心者には武器を手放すって発想はあまりない。左手で胸倉を、右手で肩の後ろを、抱き着くようにわし掴む。

「な・・・ッ」

慌てて振り解こうと暴れるが、万事対応が遅いのである。体重を掛けて垂直に引き倒し――。

「――ッ！」

痙攣して声もなく大きく跳ねた身体を更に押さえ付けた。僅か5秒とはいえ全身隈なく電流を食らえば、成人男子のビーストであっても意識を保つことなど不可能だ。

まして、ニューマンだかビーストだか知らないが、子供に耐え切れる衝撃ではない。

「ふん、他愛のない」

息を止めるように気絶した少年の胸を一度強く押さえてやって、心臓が動くのを確認してから放り出した。

「ちよっと、何してんのさ！やり過ぎだよ！」

「カグラ、おまえなあ・・・」

「こっぴどくのは自業自得ってんだよ。何がやり過ぎなもんか」

人に刃物向けるなら、あっちだって刺される覚悟で来てるだろう。肩の流血だけで済ませてやっただけ有難く思えってんだ。

小ビースト夫婦の非難を受け流して改めて少年の横に腰を屈める。先程背中に手を回した際にちよつと気になっていたのだが。

「・・・どうかしたの？」

「んー・・・」

そういえば、エミリアが非難の声を上げないのを一瞬不思議に思う。まあ、殺され掛けた恨みかな、と軽く受け止めておいた。それにしても照れたような頬の赤みが解せなかったが、大したことではないだろう。

右半身を覆う衣を捲り上げ、鮮やかな橙の生地の裏側に視線を走らせる。

「怪我してる」

「え、ええ！？大丈夫なの、それ！？」

「どうか。表に染み出してきてないし、そう出血は酷くないと思うけど」

思いつきりスタントラップ食らわせちゃったしなあ、と呟いた力グラに、ようやくエミリアの責めるような視線が固定された。だつて気付かなかったんだもの、仕方がなからう。

赤く血に染まった裏生地を戻し、黒いがゆえに染みが分かりにくいインナーに手を這わす。塗れた感触はあるが衣服を絞れるほどの出血ではないし、重要な血管を切っているような深い傷ではないように思えた。

となれば。

「手当てしないと駄目かなあ」

「あつたりまえでしょ！ええと、船に戻つたら治療ポットとか・

・

船の設備を反芻するが、なかったと思う。あれは目的地に人を運ぶだけの簡易な代物であつて、内部で生活するような居住シップではない。

その点、確か。

「俺たちの船なら治療できるぜ。ただ」

トニオの目が奥地に向かうのを、了解、と遮った。

「村の様子も気になるって言うんだろ。そっちは引き受ける」

「頼んだぜ。すぐ追い付く」

「エミリアも、気を付けてね」

返事が早いのか、少年を抱えて走り出すトニオと、追従するリイナ。

「え、あたしとカグラだけで行くの!？」

どうでも良いけど身長の関係で抱えるのきつそうなんだが、自分とリイナで戻った方が良かったんじゃないだろうか。力もどっこいどっこいだし。

しかしエミリアを預けていくのも不安だし結果オーライかなと切り替えた。別にトニオが信用ならないってんじゃない。腕は確かだし、預ける相手として性格的にも問題はないんだが、目の前にいて貰わないと心配だってだけである。

「さて、行くかあ」

「戦力半減って・・・結構、キツイんじゃない・・・」

「だあいじょうぶだって。原生生物なら、私だけでもこのくらいなら対処できるから」

言って、さつさと先を急ぐ。急いで追ってくる軽い足音との距離を開き過ぎないように歩幅を調整しながら、心の中で一言付け足した。

原生生物なら、ね。

2 - 3 先に待つのは只人か？

足元が揺れる。ふら付くほどの大地の震えに、足を縛れさせたエミリアを支えて槍を地面に突き立てた。

「何、地震！？」

「爆発音もしたね」

場所は前方。音と振動の伝わり方から考えるに、そう滅茶苦茶に遠い距離ではない。

注意深く辺りを見回し、とりあえずこちらに向かう意識がないことを確認した。そういう姑息な陽動をする連中も、自分を含めて少なからず存在する。OK OK。問題ない。

「まさか、カーシュ族の集落で何かあったとか！」

「可能性は高い、かな」

遅れて流れてきた煙と焦げ付くような臭いに顔を顰めた。ゲートに隠れていて見難いが、よく見れば森の一部に赤い光が確認できる。
って。

「火点けるとかマジか！？」

文化保護地区である。一面森が広がっている上、消火施設など当然あるわけがない。下手すりゃ一帯焼け野原。

その上、火事が本当にカーシュ族の集落だったとすれば。

全滅、という可能性が浮かんだ瞬間走り出した。遅れて後方で走り出すエミリアを思い出して速度をやや緩める。あ、槍忘れてきた。ひらりと手を振ると、光に姿を変えた武器が追いついて手に装着した端末に吸収された。

身を低くして木々の間をすり抜けるついでに邪魔な枝を切り落としているのだが、ぶっちゃけ自分一人ならこんな面倒なことしない。

その内、エミリアにも狭所の駆け抜け方を教えないとなあ。

「エミリア、伏せ！」

「んぎゃあ!？」

山坂を滑り降りた先で気配を感じて、頑張つて付いて来ていたエミリアの頭を押さえ付ける。上がる悲鳴を手で口ごと封じて草陰に身を隠した。

じつとりとした視線を顎先辺りに感じるが、きっと気のせいだろう。

視線の先では村が轟々と音を立てて燃えていた。盛る火の粉が巻き上がり、更に森を焼いて広がる。赤く染まる一面の視界の中に倒れた人間の姿は見えないが、すでに人型をしていない可能性も存分に考えられた。

鼻腔に入り込む空気が孕む、肉が焼ける臭い。頬を擦れば、ほのかにベタ付く感触。頼むから、これに気付いてくれるなよ、エミリア。

エミリアを横目で伺うと、佇む数人の男たちに視線が固定されていて息を吐いた。同じく視線を固定する。

知らない顔と、ひとつの知った顔。共通する感情を映さない無表情さに首を傾げた。燃え盛る炎を点けたのがあいつらならば、少しくらいの興奮は見せるものであるはずだ。強烈な違和感を心に刻みながら、隙を伺う。

中央に立つ銀髪の男に、恐らくあいつがリーダーだろうと当たりを付けた。飛び掛れるだけの隙を見せないまま、悠々と炎揺らめく風景を悦楽交じりに眺めている。

「悲願への道はこれで開かれた。貴様達にもう用はない。いずこなりとも自由に去るがいい！」

・・・どうでもいいことだが、カグラの故郷には独特の文化や造語が多い。

見ただけでわかる。男は二ホン独特の病氣、中二病に該当するだろう。中二病とは二ホンにおける患者数が多い心の病である。チキユウコロニー固有の教育体制の中で、中学2年生というランクを平均として発症することが多いため、そう名付けられた。

思春期の少年少女にありがちな自意識過剰やコンプレックスから発する一部の言動傾向からなる病で、主な諸症状は、脳内の自分最強設定を現実を発現する、やたら格好良い言葉を使いたがる、他人とは違う存在であろうとする、自分には隠された力があると思い込んでいる、など多岐に渡る。

当然、侮辱用語である。

だって、上半身裸に長コートってどうなの。銀髪赤目は生まれつきだろうからしょうがないけど、その格好は、ないわー、と言わざるを得ない。言動も辛い。何、その、王族みたいな喋り方。

「ね、あの赤いプレート。あれ、何だろう」

袖口を引かれて、テンションがだだ下がりしたまま視点をずらす。男が手にした赤いプレートには、見覚えがあった。

「あれは・・・」

「カグラ、知ってるの!？」

「——」テスト勉強とかに使う下敷きじゃないかな。赤ペンで書いた文字隠して、暗記に使うやつ・・・いつてえッ!」

脇腹に強烈な一撃を食らってもんどりうつた。ロッドで急所突きは下手したら息を引き取るレベルの入り方をするから真剣に止めて貰う必要がある。

止めた息を慎重に吐き出して、痛みが少し引いたことを確認しながら呼吸を再開。何て凶暴な子だ。恐ろしい。ほんと恐ろしい。

「この状況で真面目な顔してボケちゃうカグラが恐ろしいっつの！それとも何、本気！？本気なのッ！？」

1割くらいは希望を含めて本気だったよ。だって、下敷きじゃなかった場合、あれがこの惨劇の元凶かもしれないんだもの。

赤いプラスチック板みたいなものについて、知り合いのカーシュ族にちよつとだけ聞きかじったことがある。曰く、カーシュ族の守り神だ、と。そんな重大なもんをあの中二病が手にしているのだとすると、人智を超えてめんどくさい事態に巻き込まれるに違いないのだ。

あと、エミリアはできれば声を抑えてくれまいか。

「・・・何者だ？」

見下すような目で振り返る男に舌を打った。ほら気付かれた。

隣でエミリアが思い切り動揺しているが、あれだけ声を荒げて気付かない方がどうかしている。この辺りも学んで行こうね。しっかりと叩き込んであげよう。

ここでじつとしていても火でも放り込まれたら一巻の終わりなので、渋々と大人しく立ち上がって茂みを跨いだ。後ろであわあわとしていたエミリアも、やがて覚悟を決めて茂みを突っ切る。身長足りないから跨げないんだよね、この子。

自然な動作で気付かれないようにエミリアの髪に付いた葉っぱを取り去ってやりながら、気を取り直して男に睨を向けた。正確には、男の後ろに表情なく佇む見覚えのあるオッサンに。

「名乗るほどのモンじゃないし名乗りたくないから名乗らないけど、別にあんたに用があったわけじゃないよ。そっちの、ええと・・・」

あいつ名前なんだっけ。佇むのは、そもその目的、現金徴収に
来た元凶である。ワ、ワ何とかリー何とかだったと思うんだけど。
カグラ、手、手の甲！と脇腹を突付かれた。そういえば、あんま
り覚えが悪いもんだから、エミリアに道中、油性ペンで手の甲に直
書きされたのだ。良いじゃん、別に名前なんてエミリアが覚えてれ
ば。

ちらつと視線を落として。

「ワ、イリー・・・コココ？」

「ちつがーうッ！」

今度は背中に食らった。エミリアの戦闘タイプってそういえば知
らないが、ひよつとして接近武器使いのハンターとか向いてるんだ
ろうか。背骨が砕けたんじゃないかと一瞬懸念する。

「あたしの字が汚いって言いたいのー！？」

「わかってんじゃねーか。読めないんだよ。これほんとに何て読
むの？」

「ワ、レ、リ、ー、コ、コ、フ！何回言ったら覚えんのよッ！」

どうせ今日を最後に会わなくなるだろうし、覚える気がないから
だよ。

口に出すのを止めたのは賢明だったと思う。エミリアの目はあか
らさまな殺気を伴ってカグラのど元を見据えていたのに気付いた
からである。

そんなもん避けれるだろうと馬鹿にしちゃいけない。こいつ多分、
就寝後とか忘れた頃を狙ってアタックしに来るぞと直感が告げてい
た。

「あー、ワレリー・ココフさん？その人に用事があってここまで
来たんだけどね」

村のどこかで爆発が上がった。熱を孕んだ風が身を焼いて過ぎる。爆風に煽られた木材が大地に落ちてガラガラと音を立てるのに、エミリアが耐え切れなくなっただけのように怒鳴り声を上げた。

「これ、あんたがやったの！？こんな酷いことして、一体何が目的ッ！？」

嘲笑を浮かべる男に湧き上がる嫌悪。後ろ手にストックをスタンバイ状態にして、できるだけ発現にラグを生まないよう設定する。エミリアを馬鹿にしていた視線が一瞬こちらに流れたところを見ると小細工は見抜かれたらしいが、備えるに越したことはない。

「ふん、消え行く存在に何を言ったところで、無駄にしかならんな」

「ちよつと、何よ、消え行く存在って！」

鼻で笑いながら零された言葉に、カグラは思うところがあつて隣の少女に視線を走らせた。

憤怒を露に吼える顔にミカの表情の欠片は見えない。彼女が口にした言葉の数々が頭を過ぎるが、しかしまさかなあ。

視界を男の顔に戻す。20歳に届くか届かないかという年齢の、整った容姿。さっきからこの顔をどこかで見たような気がするのに、どうもつかえた飛び出して来なくてムカムカした。

直接見たことはないんだ。会って話したわけではないと思うんだけど。

「文句を唱えるというのなら、その脆弱な力で遠慮なく刃向かってみるが良い。それとも――」

こちらが首を傾げている間に、2人の暴投合戦はヒートアップしていたようだった。唐突に膨れ上がった殺意に身の毛が逆立つ。

「文句など考えられぬようにしてやろうかッ！」

「エミリア小さくなれ！」

「ひぐう！？」

反射的にエミリアの襟首を引つ掴んで引き倒すのと、エミリアの首があつた場所を鋭い切っ先が通り過ぎるのは同時だった。異常なまでの接近速度に対応は遅れたが、辛うじてナイフを抜いて、返す刀を受け止める。ストックを開放する時間すら惜しかった。

「ほう、我が刃を止めるか。まずまずの腕だ」

速度至近距離でかち合つた目に背筋が凍る。お褒めの言葉が全く嬉しくない。覗く、底知れない暗い闇。ざわりと身を引き摺る『何か』に胃の腑を撫で上げられるような不快感に、思いがけないほどの恐怖を覚えた。

「だが、この身を貫くには到底足りんな」

一瞬の硬直を見逃すほど男は甘くはない。均衡を緩めたカグラのナイフを跳ね上げて、浮いた腕の下、心臓目掛けて白銀が踊る！

「——ッ！」

咄嗟にできたのは膝を折ることだけだった。肩を撫でるように過ぎた刃物が鮮血を纏う。痛みは覚悟のほどではなく、切れ味に優れた獲物だったことが幸いした。これが刃の潰れた粗悪品での傷だったのなら、声の一つや二つは上げたかもしれない。肉はすっぱり切られるより巻き込まれるように挟まれる方が痛いのである。

しかし、死神と握手をすることは免れたものの、すぐそこで黒い鎌の素振りが行われている現実に変わりはない。握った刃を振り下ろすか、あるいは迅速に離脱するか。迷う暇どころか思考する余地すらカグラには与えられなかった。

ほう、という再度の感心の声と。

「か、カグラあッ！」

「その身体、壊すには惜しいな」

エミリアの声、男の勝手な言い様、視界を埋め尽くす闇の塊。視認と同時に爆発を起こしたそれは、カグラを容易く吹き飛ばす。

脳を揺らす陰湿な衝撃はカグラの動きを著しく制限した。ただでさえ本調子には未だ遠い同調だというのに、神経の接続が完全にエラーを起こしたのか、末端の感覚が酷く鈍くなる。足、指、腕。力の入らなくなったそこは、カグラが立ち上がるうとすることさえ許さない。

「後でゆつくりと魂を破壊してやろう。そこで大人しくしている」
愉悦を浮かべる男の振り返る先にはエミリア。カグラを泣きそうな顔で見た少女に向かい、男は歩みを進める。

息はできる。意識もはつきりしてきた。急げ、焦れ、早くしろ。震える指先で地面を掴んで、筋の通らない膝を叱咤して、生まれたての子羊のように二足歩行に戻ろうとする。

急速に活動を取り戻す自分をどれだけ急かしても、エミリアたちまでへの距離が、遠い。

「ヤ、ヤダ・・・嫌・・・」

「まずは貴様からだ！」

「エミリア・・・ッ！」

振り上げられた刃を凝視することしかできなかった。また助けられないのかと罵倒する自分の声が耳に届くより、早く。

「いやあああああああああああッ！」

高い悲鳴と共に走った閃光が目を焼いた。

金属が噛み合う甲高い音。男の動揺を感知して、カグラの胸を歓喜が満たす。

光が明けた空間で、エミリアの杖が男の刀をしつかりと受け止めていた。元来の腕力か、はたまた低い身長のせいかわかりづらい気味ではあるものの、露骨に動揺する男の刃に破れるような儚い守りではなかった。

『あなたは・・・』

エミリアの顔を彩る光のライン。開かれた瞳の理知の輝き。神々しい後光。それらは何をどう考えてもエミリアではなく、漏れた声は確実にエミリアに宿る旧文明人であるミカのものだったが、そんなことはどうでも良い。とにかくエミリアが無事だという事実があれば、カグラに文句は一切ない！

ようやくある程度の自由を取り戻した身体に鞭打って、生み出した槍を思い切り男に投げ付けた。ここに来て初めて驚きを露にした得体の知れない男は、大きく後方に跳んで回避する。

「・・・ちつ、分が悪いか」

舌打ちをひとつ残して身を翻す奴を追うよりも。

「エミリア・・・ミカ、大丈夫!?」

『は・・・い・・・』

崩れ落ちた少女に駆け寄って、地面に落ちる前に身を攫う。座り込むようにして抱えた腕の中で、ミカの意識が遠退いて消えた。念のため呼吸と心音を確かめたが、どちらも異常はない。大方、ミカの急の表出に耐え切れなかったんだろう。

自分の不甲斐なさに情けなくなる。ミカには助けられてばかりだし、エミリアは助けられないばかりだし、一体何をしてるのか。

とりあえずこれ以上醜態を晒すのは嫌なので、今は溜息を吐くに留めて落ち込むのを止めた。何せ、やることは大量にある。

上着を広げた上にエミリアの身体をそっと横たえて、男が去った

後も亡羊と立ち尽くすワレリー、及び数人の男たちに向き直った。向かって来るなら迎撃するし、そうじゃなければ火消しに回る。トニオたちが追い付いて来れば、ここは任せてエミリアを安全なところまで連れて撤収したいのだが。

そっぴゃあいつら今どの辺に居るんだ。警戒する片手間に通信機を起動して回線をオープンしようとして。

「おい、カグラ、エミリア、こりゃ一体どうなって・・・！」

「ちよつと、エミリア、大丈夫かい!?」

ナイスタイミングである。まるでこちらの様子でも見てみたい。

カグラたちと同じく、傾斜を滑り降りて駆けて来る小ビースト夫婦に視線を移した、途端。

「あ、おい、お前ら待て！」

「へ？」

足音に顔を戻すと、光のない目で佇んでいた集団が慌てた様子で走り去っていくのが見えた。あれ、さっきまで息をするのもめんどくさそうな集団だったと思うんだけど、いきなり何なの。

「逃すか！」

勇んで追い掛けようとするトニオは頼もしいが、それより先に火を消した方が良くないか。

「目が覚めたみたいで顔してたけど、一体・・・けど、そうだね。ただでさえ酷いんだ。これ以上燃えたら文化の保護が取り消しになっちゃうかもしれないし、一刻も早く応援頼まないかね」

「ちつ・・・まあ何人かの顔は覚えたし、手配書でも回しておくか」

「あー、そっちは頼んだ」

人の顔を覚えるのは苦手とは言わないが得意でもない。人並み程度の記憶力より、トニオの卓越した瞬間記憶の方が頼りになるだろ

う。

流血し放題の肩に適当に布を巻いて止血をし、意識を飛ばしたままのエミリアの身体を、敷いた上着ごと持ち上げる。切られた肩はじくじくと痛むが、それより暖かな体温にほっとした。頭を肩口に引き寄せて体勢を整える。

「エミリア、大丈夫なのかい？あんたも酷い怪我してるじゃないか」

「つつかだな、何があつたんだ、こりゃ」

「エミリア大丈夫。私も大丈夫。まあ、事態については後で——と？」

気付けば通信機がパカパカ光っていた。そういえば茂みに隠れたとき、念のためマナーモードにしてたっけ。手が離せないためリイナに頼んで回線を開いて貰う。

映し出された髭面に、今更当初の目的を思い出した。

『おいおいおい、ワレリーの船の反応が遠去かってんじゃねエか！逃してんじゃねエ！きつちり取り立てろッ！』

「あー・・・」

そういえば依頼内容は借金の取立てだった。中二病との戦闘がそれっぽくなさ過ぎて、うっかり忘れてた。

トニオが肩を竦めて、リイナが不快気に眉を寄せる。2人に苦笑を返して、カグラは腕の中のエミリアを見た。

エミリアの無事がはつきりするまで追うのは無理である。船を飛ばして追い付いたとしても、マイシップにこの子1人置いてワレリーの船に乗り込むのは断じて許容できない。

仕方ないな、と息を吐いた。

「色々不幸が重なったんだよ。帰ったらもう一回行くから、とり

あえず帰還させてくれ。エミリアが氣イ失ってんだ」

『何だと！？あの馬鹿、何やってんだ！』

クラウチの動揺は普段の言動からすれば不思議だったが、後で考えればそう突飛でもなかったと思う。別に見た限りエミリアを邪険に扱っているのは、どう扱えばいいのか戸惑っていることの裏返しのようなのだ。どちらかといえば大事なんじゃないだろうか。

数秒の沈黙の後の提案は諸手を上げて歓迎できるものだった。帰還の許可と、ワレリー捕獲任務の代行。よっし、これで帰っても宇宙空間にトンボ返りせずに済む。

トニオたちに先に帰還する旨を伝えて、比較的獣の少ない道を開拓して来たようなのでマップを転送して貰った。さすがにエミリアを抱えて元来た道を帰るのはしんどい。

「ああ、それと、あのカーシュ族の子供だけだな。俺らの船に寝かせてあるから、連れてってそっちで預かっていてくれよ。

1人で転がしとくわけにも行かねえだろ」

それもしんどいんだけど。1人で2人の意識不明者連れて帰るの？しかし断るわけにも行かず渋々首を縦に振る。

「そんじゃ、落ち着いたら通信入れるわ」

「おう。仔細漏らさず説明しろ」

じゃあまたな、と振られた手に頷きだけ返して駆け出した。

愚痴ったってどうしようもないけど、これ、むしろ帰る方が難易度高いんじゃないのか。

2 - 3 先に待つのは只人か？（後書き）

下敷きには学生時代に非常にお世話になりました。
あれってまだ現役で活躍してるんだよね？ね？
ジェネレーションギャップは発生しないよね？

番外：クラウチの思惑

昔、顔を見たことがあった。だから、搜索隊がクラウチの保護管轄下にある馬鹿娘と共に連れ帰ってきた女を見て、それが傭兵カグラであるとは即座に思い当たった。

カグラの名は一部の界限では非常に有名である。腕は立つが、技量自体はガーディアンズ上層部に敵うほどではない。しかしトリッキーな戦い方は相手を翻弄するのに十分で、初めて手合わせする相手であれば大体の奴を圧倒できるだろう。

ただし、カグラの本領は戦いではない。

名を轟かせるのは搜索分野。ニューデイズの人が立ち入ることすら稀な危険区域だろうと、モトウブの岩礁地帯だろうと、物怖じするどころかむしろ喜び勇んで分け入って行く勇壮な後姿には、ファンまで付いているとかいないとか。依頼がレリクス奥に逃げたラッピーの子一匹の捕獲だろうと、モトウブの過疎地に刻まれた一節の古代文字の発見であろうと、まず確実といって良い確率で完遂して帰還してくるというのは異常な成功率である。

それが何を示しているかを考えると、カグラがリトルウィングに在籍している今、笑いが止まらない。

依頼対象の痕跡を見逃さない洞察力、注意力。大雑把にでも位置を捉える勘。まともに刃を交えたら生きて帰れないであろうランクの敵戦力を回避する戦闘能力の応用力と、危険に対する警戒網と察知アンテナ。柔軟な思想。反射神経。

危険地帯に自ら飛び込む胆力においては列挙するまでもないだろう。頭が回ることは、顔合わせの際の事態の把握の早さで確認済み

だ。

時に戦闘力すら凌駕するそれらの要素は、のどから手が出るほど欲しいものだった。年齢16にしてガーディアンズに本格的な勧誘を受けたことがあるという事実に乗って流れている、実は14歳の頃から辺境のギルドに打診を重ねてはことごとく拒否されていたという噂も、あながち間違いではあるまい。

実のところ、実力のある者はそこそこいるが、搜索系に特化した傭兵つてのは中々掘り出し物が見付からないのである。特性上どうしようもない事実だ。

なんせ、傭兵の最大の仕事はいわゆる用心棒。力が何よりのアピールになるに決まっている。

フリーの傭兵ならば尚更のこと、大手からの依頼を寄せるコネクションがないのだから、個人依頼を寄せるためには力を磨く必要があった。

たとえ当初は搜索系で行こうと思っても、方向性を転換せざるを得ないのが傭兵なのだ。本来は。

カグラはそうではない。最終的な目的が、噂を信じるならば「両親を探すこと」だという。とすれば、そもそも生活のために傭兵になつたのではなく、搜索するために傭兵になつたのだ。それで特化しない訳がないし、方向性を転換したら本末転倒である。

そんな傭兵はそういない。無理矢理とはいえ籍を置かせるのに成功したことは、クラウチにとって間違いなく今年最大の業績だ。

需要に対して供給が足りていなかったリトルウィングの新たな金づるに、機嫌は鰻登りだった。

試しにあてがってみた少々複雑な2、3件の依頼も、さして苦戦

することなく1日で終わらせてきた。カグラいわく、退治だの護衛だのという依頼でないときには、敵を倒さなくて済むから完遂が早いのだという。

傭兵としての申し分ないスペックを確認できたところで、今回初めてエミリアおにもっを担がせて依頼に当たらせてみた。あのクソ生意気な子供はやたら懐いているようだったし、カグラはやけにエミリアを気にしているようだったので、相性は悪くないだろう。難易度は中ランクといったところか。

場所が場所なので多少の不安がないでもなかったが、あれに任せておけば問題ない、と思っていたのだが。

「・・・ったく、あのガキ、疫病神にでも憑かれてんじゃねエのか」

SEEDには汚染されている。カーシュ族の集落が焼き払われる。おまけに、妙な連中と鉢合わせた上、ドンパチ起こし、更には気絶したと抜かす。

溜息を吐いて酒を呷った。3杯目を頼もうと手を上げかけたところで、店の入り口が開く音。振り返ると、げんなりとした顔で周囲を見回す女の姿がある。

「おう、カグラ。こっちだこっち」

声につられて琥珀の目がクラウチを捉えた。大腿に近付いて、不機嫌を絵に描いたような顔をして隣の席に音を立てて腰を下ろす。

「お疲れさん」

「まったくだ——エミリアは？」

すかさず飲み物が出てきたところを見ると、カグラもそれなりにここに通っているらしい。ただし、酒ではないようである。ここをカフェと呼ぶかバーと呼ぶかは人に寄る。カグラはカフェ派のようだ、クラウチはバー派だ。どうでも良いが。

「起きた。何だ、お前やけに遅かったの、あいつの部屋に寄ってたんじゃねエのか」

「医務室で怪我の手当てしてたんだよ。怪我してから時間が経ち過ぎだとか、何で帰還して真っ直ぐ医務室来ないんだとか、散々説教食らった。つか」

怪我の手当て。そう聞いて、そういや肩を負傷したとかいう報告を受け取っていた気がする、と思い出す。

「怪我人に厄介事押し付けんのやめろよ、あんた」

「何だ、そんな酷い怪我だったのか？」

「縫われた」

苦い口調で零された言葉に目を剥いた。だってお前、エミリアが気を失って、自分はちよつと肩負傷した、としか言わなかっただろ。うが。そんな酷いと知っていれば、さすがのクラウチとて帰って早々別事を押し付けたりはしない。

悪いな、と謝罪を返すと、腑に落ちない顔をしてから片手を振った。

「で、どうだった？」

「ワ・・・何とかのことならこっちが聞きたい。こっちは船から報告した以上のことはないよ。さっきの依頼のことなら、まあ、適当に収めてきた」

「まさかりゾート地区に痴情の纏れ持ち込んで来る奴がいるとはなあ」

「纏れっていうか、一方通行だったみたいだよ。ストーカーだね」
ワレリー捕獲に送った社員が担当していたクラッド6内の警備を、丁度帰還したカグラに押し付けたのは1時間ほど前だ。リゾート地区で身体に爆弾括り付けたアホ男が、女1人抱えて心中しようとしてやがったのである。

船から近かったこともあって向かわせたところ、5分もしない内

に騒ぎが収束したとだけ通信が入った。

「顔合わせたこともなかった愛しの彼女を追って来てみれば旦那さんがいて逆上したんだと。俺というものがありながらーとかありがちなことほざいててイラッとしたから、リゾート地区責任者に照明落とさせて、動揺してる間に昏倒させた。全裸に剥いてM字開脚で縛って写真撮って警備に引渡しといたから、後は身元割って社会的信用かち割って終わりでしょ」

「全裸って辺りから急速に同情心が育ったんだが、俺がおかしいのか？」

「うん」

何という真っ直ぐな目で肯定しやがる。こいつだけは敵に回すまいと心に決めてクラウチは逃げるように目を逸らした。目を合わせ続けていると、それが正当な報復だと洗脳されそうだった。

3杯目の酒を口に運ぶ。

「んで、何か情報掴めたの？」

「あー、ワレリーな・・・」

軽食まで摘み始めたカグラの視線が、歯切れの悪さに訝しげに細められた。トーストを咀嚼しながら先を促されて深く息を吐く。

「気が付いたら村が燃えていた、だとよ」

「はあ？」

声を上げる気持ちはわからんでもない。というか、むしろよくわかる。自分も聞いた端はワレリーが当然嘘を吐いてるモンだと思っ
たし、そうでなければ脳の病気だと疑った。

しかし、である。

「あいつとは長い付き合いだ。嘘は吐いてねえよ」

「長い付き合いなら他人に取り立てさせるなよ。テメエで行けよ。完全に私用じゃねエか」

「うるせえなあ」

痛いところを突いてきやがるが、まあ今回はそれが幸いしたとも言える。

クラウチ一人で出向いたとして、今回偶々同行することになった二人の協力を、知り合いでもないのに得られたかどうか。となればカーシュ族の集落まで辿り着けたかも怪しい。

「洗脳？」

「だろうな。そういう技術がないわけじゃない」

「ブラックテクノロジーだし、確立はされてないけどな。となると、主体はあの男か——ミカに反応してたな」

「ミカ？」

何でもない、と即座に返したカグラを問い詰めることはしなかった。

数日接して何となくわかってきたことだが、こいつは本気で言わないと決めれば絶対に言わない。それが必要だと考えればその内口にするだろう。

「ま、何にせよ今回はご苦労だったな。達成はできなかったが、荷物背負ってこんだけやれりゃ十分だろ」

「私は不満だけどね」

口を尖らせたカグラには思うところがあるらしかった。グラスの縁を軽く噛んで眉根を寄せる。

傭兵としてのプライド、というものではないはずだ。聞くところ、達成できなくても依頼主が満足してりゃそれで良いというスタンスである。こいつはプライドなんぞに重きを置いていない。

となれば。

表情を伺いながら、脳裏に閃いた光景を口にした。ワレリーに会って、ついでに覗いて来た部屋の中、ベッドに大人しく横たわった普段とは180度異なる子供の姿。

「エミリア、か？」

寄越されもしない目が、それが気掛かりだと告げていた。降りた沈黙を破る気もなく言葉を待つ。

やがて、ぽつりと呟かれた言葉は。

「・・・あの子が、怪我しなかったのは――」

途中で消えて、そのまま打ち切られた。一息に煽ったグラスを叩き付けるようにテーブルに置いて、さっさと支払いを済ませて立ち上がる。

「おい」

「そのうち、言う」

それだけ言って、足早に立ち去る背をポカンと眺めた。

何食わぬ顔でグラスと皿を下げるマスターは、さすが接客のプロである。何だ、あの慌しさ。他の客がぎょつとして振り返ったのに、カグラは気付いてたんだろうか。

つつか。

「何をいきなりブチ切れてんだ、あいつ？」

まあいい。その内言うつつつたんだから、その内わかるだろう。

口に入れた氷を嚙んで頭を切り替え、クラウチは思案する。

あの様子なら、怪我は大した障害にはならないはずだ。数日置けば復帰できる。馬鹿娘も起きたことだし、カグラには伝え忘れたが新しい戦力も加入した。となれば次の依頼を見繕っておかねばなるまい。

仕事をしるとエミリアは言うが、自分の仕事は基本的に依頼の分布作業である。なに、他の仕事は下の奴に任せておけば良い。

溜まった仕事を片付けさせるのに、さて、何日かかることか。

樂ができそうだと笑うクラウチに、偶々居合わせた部下がぞつとした顔を見せて十字を切った。安心しろ、お前にも仕事回しといてやるから。

目的が遠ざかる。

ああ、気分が悪い。

別に体調不良だとか吐くとか、そういう話じゃない。ただ単に腹立ちに胸がムカムカしてるってだけである。何に、などとは言うまでもなからう。当然自分の不甲斐なさ以外の何物でもない。

詳しい事態をクラウチに話すべきか否かを迷ったが、成り行きに任せることにした。英断だと思う。というか、むしろ言おうと考えた自分がどうかしていた。

だって、旧文明人が世界征服狙ってるんだよって、誰がどうやって信じろの？

単なる痛い子である。妄想は己の中でだけ綴られるから世界は平和なのである。

実は自分は1回死んで、エミリアに憑いてるミカという旧文明人が超凄い力で生き返らせてくれて、実は旧文明人はヒューマンの身体を奪い取ろうと企んでて、でもミカは良い旧文明人だからエミリアの危機を助けてくれたんだよって。

大事なことからもう一度言おう。単なる痛い子である。これ言っちゃったらどう足掻いても心の病を患った可哀相な子である。故郷の俗語を借りるなら、これこそ中二病の典型だろう。良かった、思い留まって。

エミリアがミカのことに気付いたら、一応釘刺しておかないといけないかもしれない。あの子、頭は回るけどアホの子だから。猪突猛進に進言しちゃう恐れがある。

まあそれは良いとして、そう、自分の不甲斐なさの話だ。船の中でも実は散々に落ち込んだりしたんだが、思い出すとまた落ち込む。

何でこう上手く行かないんだろう。やる気を出せば出すほど空回りするような可哀相な性質ではないつもりだけれど、今回のことに限って言えば全く反省が生かせない。

死ぬほど危険な目に合わせるのを阻止したい。でも、じゃあエミリアを危険な場所に連れて行くのを止めるってなると、あの子の成長の妨げになる。だから、自分が守る。

それは手段としては正しいと思うけれど、生憎カグラはそこまで戦闘に特化してはいないのだ。エミリアは合成甘味料パルスイートもかくやというほどベツタバタに褒めてくれるが、別段際立って強いわけではない。ただ、効率を重視してるからそう見えるだけで。

一体一体確実に息の根を止めて行くより、纏めてトラップに引っかけ、殲滅した方が早いし、疲れない。刃の打ち付け合いは力がないのでできないし、スタミナ温存も兼ねて隙を見付けて受け流す方向にしている。時間をかけてじっくり付き合うより、強襲で仕留められれば楽なので先手必勝、出来るだけ早い決着を心掛けている。

総合すると、何となく強く見えちゃう不思議。しかしこれらはあくまでも、自分より格下の相手にのみ有効な手段である。

敵が自分より強ければ当然時間はかかるし、装甲に寄っては最悪攻撃が通らないことも多いのだ。ミラージュブラストがヒットした上で通用しなかったら、カグラにそれ以上の手はない。あと出来ることなんぞ逃げの一手。

こんななんだつたら、もつと戦闘特化目指しとくべきだった。一人でうる付くだけだと思っていたから搜索スキルをひたすら磨いて来たのだが、まさかこんな弊害が発生するとは。

負傷した肩に視線を走らせて低く唸った。あの男はミカに反応を

見せていた。脳裏を過ぎった考えが、確実に勘違いであるという補償はない。再度の接触の可能性が消せない以上、対策を考えておかなければいけないだろう。

しかしあの腕。2本の刀を振り被る様は、明らかにカグラより戦闘に長けていた。まともにぶつかっても勝ち目はない。

では、どうするか。あらかじめぶつかる場所が決まっていればいくらでもやり様はある。ありとあらゆるトラップを埋め込んでおけば、動きを止めることは容易であろう。罠は店売りのものだけではないのだ。職人に依頼すれば、どんなえげつないものとして作成できる。

だが現実問題、誘い込みは非常に難しかった。あれが何者なのかもわからなければどうしようもない。

もしあの男が旧文明人だったとして——どうやって奴らは目的を達成するのか。どんな手段を取るのか。何ができるのか。どこまでの常識が通用するのか。

「ミカに聞いてみるかなー・・・」

呼び出しに応じられただけ。エミリアが起きてるときは無理なのかな。出て来る条件だけでも聞き出しておけば良かったと今更後悔する。

「あ、おい、カグラ」

とりあえずエミリアに会って、1回「ミカ」って呼び掛けてみるか。不審そうに見られたら、お前のあだ名だよって言っときゃ良い。どう考えてもエミリアをミカって呼ぶの無茶あるけど、言い張ればいつかは真実になるものである。なっても困るけど。

「おいって」

ああ、それから、この身体のこととかも聞かなきゃいけない。何

かしたらまた死ぬよ、とか。そういうこともあるかもしれないし――

「おいカグラ！ 気付けつつうーのッ！」

「あんだようるさいなあ・・・って」

振り返って、眉を潜めて、ふと下を向いて、知った顔を見付けた。一連の動作に青筋を立てる知人だが、だって、仕方がなかるう。お前が小さいのが悪いんだ。

「トニオじゃん。生息地が違うんだが大丈夫か？」

「何の心配なんだよ。大丈夫だよ、問題ねエよ。お前実は気付いてたんだろ。シカトとかふざけんじゃねエぞ」

「怒るなよ。気付いた上で脳が存在の認知を拒否してた可能性はあるけど、故意じゃないよ」

「それでどうやってたら怒るなってんだよお前はよ！」

相変わらず短気な奴である。ぎゃあぎゃあ騒ぐちびっ子に眉を顰めて、通行の邪魔にならないよう壁に背を付けた。

で、何か用か。

「確認したいことがあったんだよ」

何となく慎重な様子で声を潜め、周囲を伺う。こちらを気にする者がいないことを確認すると、鋭い目が再びカグラに向き直った。

「お前、ここ数年で何かあったか？」

質問がアバウトすぎてちよつと理解しかねる。

「あー・・・通信端末壊したつつつたろ、カグラ」

「壊したつつつか、壊されたんだよ。仕事でさあ、Sランクに付け狙われて死ぬかと思った」

「それだよ」

首を傾げて言葉を待つ。やっぱりトニオが何を言いたいのかピン

とこない。

すっかり鉢合わせたどでかい原生生物から命辛々帰ったのは苦い思い出である。Sランクなだけあって、強いし、硬いし、速いし。到底倒せる気がしなかったからさっさと身を翻したのだが、手持ちのBランクシールドはことごとくぶっ壊されるわ、左腕の腱損傷するわ、出血多量で朦朧とするわ、回避し損ねて通信機どころか武器スロットまでやられて開けなくなるわで最悪だった。大怪我こさえたあの状態でよく逃げ切れたもんだと思う。

高ランクの装備は、そのランクに合わせてスロットの仕様を変えなければ収納できない。ランクの変更は専門の人間に頼む必要があるのだが、組織に所属しないフリーの人間は、めんどくさいから一々変更に赴いたりはいしないのが普通である。

だって、わざわざどっかのギルドとかに出向いて、金払わないといけないんだぜ。

ただ、あの時はそれが敗因だった。盾はあまり使わない自分なので、Bランクそこそこにしか設定していないのである。せめてAランクを持ち歩いていれば、もうちよつと軽傷で済ませられたんだろうになあ。

しかし思えば思うほど通信機器失ったのは痛かった。お得意様とも連絡が取れないから依頼が受けられなくて、警備のしつかりした場所へ入り込めなくなった。当然両親の搜索が滞る。昔の知り合いとも全く連絡が付かないので、両親らしき人間と遭遇したかどうかの確認が取れない。

何より、未だに連絡の付かない人間が腐るほどいる中で、腕の良情報屋が行方をくらませているのが辛かった。めったに表に出てこないから見付けるの骨が折れるんだよ。一番両親の目撃情報を寄越してくれたのがあいつだったので、頭の痛い問題である。

で、それってどれ。

「大怪我つてのは、何か障害でも残してんのか？」

「別に。メディカルセンター突っ込まれて一月くらい入院したけど、とつくに完治したよ」

腱も無事治ったし、さすがに傷は残っているが特に問題はない。

事実の隠蔽を訝しむ顔を見て、ようやくトニオが何を言いたいのか理解した。

「動きがやたらぎこちねエだろ。単に鈍ったって感じでもないしな。何があつた」

「……んー……」

まあ、気になるよね、それは。

変化は多分、前のカグラを知る者にだけわかる些細なものだろう。だが、それを踏まえれば劇的なのだ。

戦闘におけるカグラの持ち味の一つに、緊急時の事態を把握するかしないかの瀬戸際での初動の早さがある。脳が理解すると同時に身体が動く。判断をすっ飛ばして動くわけだから、そりゃ普通よりずっと早い。

しかし、まだこの身体はカグラにとって「異物」として扱われている。だって、最近できたばかりの肉体だ。生まれて20年を共にしてきた身体と、1週間程度しか座していない住まい。どちらが使い勝手が良いかなどは比べる余地もない。これは脳が命令を下して、ようやく動く人形のようなもので、引越したは良いけど、片付けが全然終わっていないような状態である。

故にカグラにとってみれば初動が極端に遅い。トニオはカグラの戦い方を知っている。息をするように動く手足で、淀みなく切り込む様を覚えている。

「……やばいことか？」

「やばいは、やばいかなー」

言葉を濁して髪をかき混ぜるように頭を掻く。

「通信機の方は別に関係ないよ。ただ、身体の方は、ちょっと、まずい」

探る視線から顔を逸らして溜息を吐いた。

カグラが死んだことについては、今話すのは得策ではないと思う。トニオが事態を信じるか信じないかと言えば、どちらとも言えないだろう。カグラが全てを語ったところで、あまりにスケールが途方もない。それはそれでどっちでも良い。別にトニオに脳の異常を疑われたところで痛くないし。

ただ、まだ何もわかっていない状況で話を広げるのは多分、まずいのだ。

旧文明人とかいうのがどこにいるのかもわからない。ひょっとするとエミリアが気付いていないように、トニオに寄生しているという可能性もある。もし寄生していたとして、ミカのような害のない旧文明人かといえば、話を聞くに恐らく違う。

トニオでなくとも、リイナに寄生している可能性。その知り合いに寄生している可能性。もしかして無機物に宿る性質なんぞ持っていた場合は最悪である。

その辺の見極めも含め、ミカに聞いてみる必要があるだろう。

「その内、話さないといけないようになると思う。ならないのが理想だけど」

「んだそりゃ」

「私もよくわかんないんだけど」

両手を開いて肩まで上げる仕草に、呆れた顔を食らって苦笑する。だってわかんないもんは仕方がなかるう。こっちだって好きで関わってるんじゃないやねえや。

「ま、通信機が壊れてたのは残念だったな」

「あん？」

トニオの顔に浮かんだ嫌らしい笑み。壁から身を離して乗り出すと、ニヤニヤとした顔で口の端を吊り上げた。

「折角、両親とやら見かけたのによ」

「——はあ!？」

ぎよつとして出した大声にそこらじゅうから視線が投げられたが、知ったこつちやない。

両親で、両親か！

「どこで！」

目の色を変えて身を乗り出したカグラに、トニオは憎たらしい笑みを深めてみせた。何だこいつ、憎らしい。殴ってやろうか。

「ガーディアンズだよ。3年前のSEED事変のときにな、色々駆け回ってんの見たぜ」

ガーディアンズって、何でもたそんな妙な場所に。

数秒間、呆然としたまま沈黙。脳が活動を開始するのに、多大なエネルギーを消費した。

開いた口を更に開いて。

「何で連絡しねェんだよ、このチビすけ!」
怒鳴る。

「誰がチビだテメエ! お前の通信機壊れてて繋がんなかったつってんだろツ!」

「そこを何とかしろよ! 友人のために秘められし未知の能力に目覚めてテレパシー超越す程度の奇跡、どうして起こさなかった!？」

「当たり前のように考えなくても無茶だとわかる無茶言うな！」

「じゃあせめて、新しい通信機のコードが脳裏に閃く程度の奇跡くらいは起こせよ！」

「せめてつつたかお前……！奇跡ってのは起こそうと思って起こらないから奇跡ってんだよ！」

「やあああああああつくに立たねエ野郎だなもうツ！」

頭を抱えて蹲るカグラに、俺のせいじゃないと良い募るトニオ。うるさい。お前のような友達甲斐のない奴に構う気力はない。

ガーディアンズって、そんなとこに出向く用事が、普通あるわけないだろう！何やってんだあの両親！

——やっと立ち上がる気になったのは、ぎゃあぎゃあ騒ぐトニオを回収に来たリイナの怒鳴り声を聞いて溜飲が下がった後だった。あんまり通路で騒ぐんじゃないよと釘を刺されたが、みんな多分、そんなに気にしないよ。

だって、上司とかもよく騒いでるもん。
クラウチ

気を取り直して。

「エミリアー、いるー？……って」

勝手に戸を開けたカグラを迎えたのは、ベッドの上で死んだ目をして倒れているエミリアの姿だった。何、このどんよりした空気。ミカに話を聞けばなあと思ったんだが、ミカごと自殺しそうな勢いで落ち込んだ様子を見せる少女には切り出すに切り出せない。

おそるおそる近付くと、濁った目がじりと動いた。

「何してんの」

「カグラ・・・」

数度瞬いた目が、やがて生気を伴って、ついでに涙も伴った。瞳の表面に瞬く間に膜を張った水分にぎよっとする。

「か、カグラぁー！」

ちよっと、何をいきなり泣いてんの！

全身のバネを使って飛び起きたエミリアが弾丸のような勢いで腰に巻き付いてくるのを、全力で踏ん張って受け止める。びえええと泣き喚く姿はまさしく子供である。

「ご、ごめんね！あたし・・・あたしのせいで・・・ッ！」

「ああ・・・」

理解する。ほっとした。別に障害があったとか、そういうわけではないらしい。

「ミカ？」

「う、うん・・・全部・・・聞いたっていうか・・・」

ミカと、接触したのだ。

できればカグラも同席していたかったところだが高望みはすまい。とりあえずエミリアが事態を把握したという事実はありがたいものである。なんてったって、ミカって呼びかけても訝しまれないし。

よしよしと頭を撫でてやりながら、何を話したのと先を促す。

返って来たのは大方カグラが聞いたことだった。旧文明人についての新情報はない。

エミリアにとってはカグラの死が重要度ウェイトの大半を占めているようだったが、別にそのまま死んじゃったわけではないんだし、そんなに気にしてないんだけだな。伝える言葉にも首を振って抱き着く力を強めるだけで、安心を返さなかった。

まあ、それについては追々整理が付くだろう。

それよりも。

「エミリア、それ、しばらくは誰にも言わないようにね。多分信じられないだろうから」

念のため釘を刺しておくことを忘れない。

「・・・・・・・・・・」

で、何でエミリアは顔を逸らすのかな？

頭を掴んで顔を合わせて、再度、ね、と念を押す。返る沈黙。必死に逸らされる目。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・お前・・・」

呆れと哀れみを混ぜ合わせた混沌とした視線に、少女の身体がびくりと跳ねた。竦み、亀のように引つ込む首。モゴモゴと口が動いて、動いて、止まる。

言っちゃったのか。既に言っちゃったのか。どうしてお前はそうイノシシなんだ。少しは待って相談しようという気は起きなかったのか。

「誰だ」

「お、おっさん」

「どこのおっさんだ。毛の権化か。見知らぬおっさんか」

「け、毛の権化って...まあ、そうなんだけどさあ」

厄介なおっさんの方が。

落ち込み具合から結末は良くわかる。当たり前だが頭が可哀相な中二病扱いされたんだろう。

「ミ力は見えないんだな？」

「そう、みたい」

言いながら現場を思い出したらしい。膝を付いて手を付いて、がつくりと落ち込む様を視界に入れながら、カグラは深く息を吐く。これでクラウチ落とす難易度がラスボスランクまで跳ね上がったわけだが、自分に一体どうしろってのか。

—— 一回、この子をしっかり教育しよう。

とりあえず、そこからだ。決意した途端、突き当たりが見えないほどに進む道が長々と引き伸ばされたのを自覚した。

しかしまあ、誰のためでもない、自分のためである。

もう一度大きく溜息を噴出して、鳴り出した通信機を起動させた。

3 - 1 揃う真実、

足を強く床に打ち付けると、衝撃を起爆剤としてセンサーが反応する。途端に爆発を起こしたトラップが原生生物の四肢を砕き、塵と消えた。手にした得物を霧散させて一息吐く。

惑星パルム、インヘルト社。クラウチから早速回された仕事は、こちらさんの環境生物研究所とやらから逃げ出した原生生物の鎮圧だった。鎮圧っていうか、まあつまり、駆除である。

インヘルト社といえば、グーグル太陽系における^{リトルウィング}三大企業に数えられるほどの会社だったはずだが、何でまたうちなんか仕事回すかね。ガーディアンズに持ってきや良いじゃんか。

豪奢でありながら堅牢な作りの施設は、正直言つて息が詰まる。成金みたいに金持ちアピールの豪華さではなく、センスは良いと思うんだが、センスと居心地は違うわけだ。大体アレだ。何でこんなクソ広いの。

「カグラ、肩は大丈夫かい？」

「さして支障はないけど・・・あの髭ダルマ、言つたそばから仕事回すとか、毛に養分回してるせいで記憶容量が圧迫されてんじやねえのか。天辺から爪先まで全身ツルツルにしてやるうか。トニオ、ガムテープ何ロール必要だと思う」

「止めたれ。せめて剃つてやれよ」

「カミソリとなると刃を垂直に立てて滑らせる自信があるが、よろしいか？」

「よろしくねえよ。止めてやれよ。あんま苛めんな」

苛められてんのはこっちだつづ。

無然として視線を向けると、トニオの視線はこちらになかった。

困惑の表情で向かう目の行き着く先をちらつと見て納得する。エミリアが区画の隅っこで膝を抱えて蹲っている。何してんのあの子。
「・・・おい、カグラ、行ってこい。お前のパートナーだろ」
「ええー？だって、私もう散々励ましたし。大丈夫だよ。見えない人が頑張って励ましてるよ」

「それはむしろ精神崩壊フラグじゃねエのか。良いから行ってこい！」

「そうだね、あれはちょっとどうにかしないとね。カグラ、頼むよ」

壁を向いてブツブツ呟く姿は、異様の一言である。実は独り言を口走ってるわけではなく、見えない人ことミカが一所懸命に激励を送っているのに答えているだけなのだ。——まあ、ぶっちゃけやつぱり見えないので、危ない人にしか見えないわけだ。

うつん、めんどくさい。基本的に今まで周りにいた人間てのは反省という言葉を知らない勇者ばかりだったので、こういう落ち込み方をする者に遭遇したことはないんだが。

実りに実った稲穂のように頭を垂れるエミリアは、カグラの視線に気付くこともなく壁に語り続ける。そろそろ反省からオッサンへの呪詛へと切り替わり始めた言葉がひと段落するまでじつくりと待つて。

「大体さあ、人が亜空間実験がヤバイって言ってるのに、なあんでよりにもよって亜空間実験主導社のインヘルト社に送り込むのよ・・・」

おいちよつと待て。

「なによ」

「何だ、亜空間で。聞いてないぞ」

同じようにしゃがみ込んで顔を寄せる。潜めた声は、ヒューマン

より聴覚機能の発達した小ビーストにも届かない。横目で確認したところ、二人は怪訝そうな顔をして待機したままである。よし、そのまま寄って来んなよ。

「え、ミカ、言っただけなの？」

『以前は時間もなかったの・・・』

エミリアの傍らで揺れるように浮かび上がるミカの申し訳なさそうな顔。腰を曲げた体勢のミカを下からじっと見詰めると、頬を伝う一筋の汗が視認できた。

ああ、これは忘れていたんだなと直感する。

以前、大雑把に事態は聞いた。しかし旧文明人がどこにいるかという話題は、少なくともそのときにさらっとでも説明できたことのはずだ。想像するに、危ないから気を付けてね！っていう忠告しか頭になくて、対抗策とか、そういうところまで意識が届いてなかったんだろう。

落ち着いた物腰と見かけに寄らず、案外すっかり屋さんである。

「で？」

「えつとね・・・」

先に音量を落とすように注文を付けて、ついでに今お前単なる独り言ブツブツ呟く痛い人だから再反省するようにと苦言を申しておく。落ち込みようが酷くなってミカの非難を食らったが、真実なんだから仕方がなからう。

さて、聞き齧った知識を推測を交えながら話すエミリアに、ちょっと言いたいことがある。まずな、推測にものごつつい専門知識が織り込まれてるわけだが、そんなんこちに理解できると思うか？
「要は、亜空間を解して、潜伏してる奴らが出てくるから、亜空間実験は止めるべきだったか」

「まあそうなんだけど・・・あたしが頑張って説明したのに、そ

「ただで凝縮しちゃうのってちょっと酷くない？」

「説明はわかりやすく、簡潔にしろ」

とどのつまり。

旧文明人たちが絶滅を乗り切る苦肉の策としてヒューマンを作り、ある程度発展を遂げたら乗っ取るうとしている、というのは以前聞いたところである。で、精神体となった彼らがどこにいるか。ミカに尋ねようと思っていたことだったのだが、なるほど、亜空間の一部、『マガハラ』と呼ばれる空間に待機しているのだという。

亜空間実験を止めるべきだというのはそのためだ。この間カーシユ族の住処から奪われた下敷き——もとい、レッドタブレット。本来であれば狙って特定の亜空間に繋げることなどできないのだが、アレが『鍵』となる。アレさえあれば、マガハラに穴を開けられるというわけだ。となれば、亜空間実験の完成と共にヒューマンの身体が乗っ取られる事態に陥ってもおかしくはないわけで。

「……てことは、やっぱりあの中二病、旧文明人じゃねエか。亜空間で待機せずに乗り込んで来れるのって普通なのか？」

『いえ、そんなはずは……』

わからない、と首を振ったミカの表情に嘘はない。そもそもミカがどうしてエミリアにくっ付いてるのかわかれば少しは憶測もできるかもしれないので、今度じっくり問い詰めてやろうと思う。

「しかし、だからって亜空間実験を差し止めるってのは無理があるだろ」

「でも、ヒューマンが乗っ取られちゃうよりはさあ」

「エミリア、亜空間実験が何のために行われてるかわかってる？」

「勿論わかってるけど」

わかってて止めるつもりだったとは恐れ入る。呆れを視線に乗せて向けると、泣きそうな顔で身じろいだ。

「亜空間実験つてのは、元々伊達や酔狂で開始してんじゃないんだよ。資源枯渇問題どうすんの。今更ヒトは文明を捨てられやしない。行き着く先は同じこったな」

グラール太陽系には、ヒューマンが住み着きつつキャストが統治を行う惑星パルム、ビーストが人口の7割を締める資源豊富な惑星モトウブ、宗教団体グラール教団に所属するニューマンが支配を行う惑星ニューデイズの3惑星が存在している。

この三惑星が共同開発を行っていると知られる亜空間実験。同盟を組んだとは言え、過去の確執が未だ根強い三惑星が力を併せるといことがどれだけ重要を意味するのか。その辺りは当時のいざこざを知らない者には理解し難いことではあるかもしれない。

昔っから提言されてはいたのだが、ここに来て資源不足問題は深刻なものとなった。ここで言う資源とは人的資源ではなく物的資源だ。大概、物的資源つてのは99%がヒトが生まれる前から存在していたと言って良い。そして、急激に発展した文明は、当然ながら資源が生まれる速度を優に上回ったのである。

鉄、銅、ウラン鉱、石油、石炭、レアメタル、天然ガス、石灰石、石英、リン鉱石。遠慮なしに採掘されたあらゆる資源。無尽蔵ではあり得ないそれらは、僅かな貯蓄を残すばかりとなった。

このままでは近い将来、生活に支障が出るようになるだろう。そうなれば、まず考えられるのは三惑星間での戦争である。残り力スのような資源を求めて血で血を洗う事態になりかねない。というか、戦争は決定事項だと言っても良いはずだ。利益を求めて領域を犯す行動は、既に人間に組み込まれた本能と言い換えても過言ではない。

だが、むざむざ戦争を待つほどに上の人間は頭は弱くなかった。自業自得であるとはいえ、戦争を覚悟に事態を諦めるよりは動くべきだとしたのだ。

そして考え出した解決案が、亜空間を通り資源を強奪して——
もとい、拝借してくること。正直、個人的には資源見付けた先の原住民とまた厄介な騒動が起きるんじゃないかと考えているんだが、まあ人間誰しも自分が可愛い。確定ではない「もしかしたら」を考えるより、目先の欲を満たす方が優先ということだろう。きつと上の方々もそれくらいの可能性は考えているだろうし、見て見ぬフリには同意見のほうである。

人は今更、資源がないからと言って文明を捨てられない。現在のところ最も資源を使用しているのは、我らが標準住居、コロニーの維持だ。資源を消費する文明を捨てることは、つまりコロニー住まいを止めることになる。努力で解決できる問題じゃない。人口に対して、惑星には明らかに人が暮らせる土地面積が不足しているのだから。

亜空間開発ってのは、そういう巨大な次元の話だ。カグラやエミリアが余迷い事を口にしたところで止められるような規模ではない。「主導握ってるインヘルト社潰して、その後どうなると思う？ エミリアなら開発止める？」

「……………」

「止めないだろ。私なら、他の企業探すが、インヘルト社から社員引き抜いて専属機関作らせるね。今更後には引けないって、皆わかってる。どうにかするなら亜空間開発を止めるんじゃないくて、マガハラに繋げないようにするか、いつそ繋げちまって——」

—— 掃討すべきだな。

言葉は虚空に溶かして暈ほかした。カグラの注意力はミカの眉が寄つたのを見逃さない。

重くなつた場の空気を掃うように勢いを付けて立ち上がり、エミリアに起立を促す。が、残念ながら彼女は納得行かない顔のままカグラを見上げ続けて動かなかった。

「・・・あのな、どうしようもないだろ、今は」

「おい、まだなのかよ」

痺れを切らしたトニオが眉根を寄せて歩み寄る。後ろからリイナも付いてきているのを見て、ミカに目配せを送った。

掻き消える姿を周囲を窺うフリをしながら見送り、肩を竦めて苦笑いを浮かべる。

「拗ねちゃった」

「どういう事態で、お前何言っただ」

「発言ミスってクラウチの信用落としたんだと。で、終わったことをグダグダ言っでないで働けと」

「そりゃ拗ねるだろ・・・あのなあ、エミリア」

間の話題を極端に削っただけだし、働けてのは今から言おうとしたのだ。トニオに遮られたのはカグラのせいじゃない。嘘は言っていないので、胡乱な目を向けてくる少女から視線を外した。

エミリアに視線を合わせるようにしゃがみ込む小さな背と、周囲の警戒を交代する。何か言いたげに仰ぎ見るリイナには微笑み一つ落として終わらせた。

「失敗したってんなら、挽回すりゃ良いんだよ。俺も、カグラだって、失敗せずにここまで来れたわけじゃねえんだ。むしろ駆け出しの頃なんて失敗ばかりだったしな」

うむ、その通りである。カグラが駆け出しの頃つつたら先輩に迷惑かけることが仕事のようなもんだった。事態を引っ掻き回すだけ引っ掻き回してボタンタッチするあの快感は、新人時代だけの特権だね。

エミリアからの確認の視線に、感慨深く頷く。ちらつと横目にこちらを見るトニオの目は、微妙に複雑そうな色を湛えていた。

何。色々と仕事押し付けたこと、まだ根に持ってたの。だってこれらの仕事、小ビーストに最適だったんだもの。適材適所ってもん

だと割り切れよ。

「・・・まあ、あいつは極端な例だったんだが、新人なんてそんなもんだ。あんま気負い過ぎずに地道にやれよ」

「できる・・・かな・・・」

「できるつて。お前、見所あるぜ。カグラもそう言っただろ」

言っただけど、何でトニオが断言すんだ。お前現場にいなかったろ。

「・・・うん。うん、頑張つて、みる」

拳を固めて自信なさげに、しかし確かに頷いたエミリアを見て、さすがだなあと感動した。誰がつて、そりゃこんな簡単に慰めを完遂してみせるトニオに。こいつ、何気にアメと鞭の使い分け上手いんだよな。

「その意気だぜ。お前なら大丈夫だ。元ガーディアンズ教官のオレが保障してやるよ」

「制服が嫌だつてだけであつさり辞めた野郎が偉そうに・・・」
でもちよつとばかし癪に障ったので、ぽつりと横槍を入れてやった。案の定カグラに対して沸点の低いトニオは、顔を引き攣らせて食つて掛かってくる。

「ちつげえよ！オレが辞めたのはリイナがガーディアンズ入れなかったから——ん？」

ん？

途切れた声に振り返る。立ち上がつてこちらに向かつていたトニオの視線が下がっている。

「どうしたんだい、エミリア？」

驚愕に見開かれた目は零れ落ちそうなほどだった。壁に同化したいとも言つようにべつたりと背を付けた様子は、少なくとも普通ではない。

「おい、エミリアー？」

名前を呼ぶカグラへの反応は敵意だった。思わぬ小動物の警戒心に眉を寄せる。腰を落として再度視線を合わせると、怯えたように更に身を壁に擦り付けた。

「えっと」

首を傾げて僅かに沈黙。

「私はガーディアンズに所属したことはないよ」

「おま」

途端にひっしと懷にしがみ付いた柔らかい生き物を抱き留めて、よしよしと背中を撫でる。怯えの原因は良くわからんが、とりあえず。

「ガーディアンズ嫌いみたいだなあ」

「自分だけ逸早く安全地帯に避難すんのマジ止めろ」

そんなこと言われても、危機察知本能が人一倍強いんだから仕方がないじゃないの。

で、何でもまたこんな異常なほどの怯え具合を発揮しているのか。

ただ単純に怯えるだけならまだしも、下手に手を伸ばそうモンなら指を食い千切られそうな緊張感、日常生活で植え付けられるようなレベルの反射行動ではあり得ない。

しかし、ここで原因を探るのは得策ではなかった。多少心配ではあるが、言えるようならその内言うだろう。

ゆるゆると背中を撫でるうち、強張りに満ちていた小さな身体からも力が抜けてきたようだった。密着した身体の隙間から、やがて窺うように視線が届く。

「あいつら、喧嘩したら怖いけど遠巻きに眺めてる分には害はないよ。偉そうで癪に触るから、私も好きとは言わないけどね。ちつとは落ち着いたか？」

「・・・うん。ごめん。大丈夫。ガーディアンズ嫌い」

「そんだけ凹んでも自己主張は忘れないその意気や良し」

頭に手のひらを優しく落として身体を離れた。照れたような顔で

トニオとリイナにも謝罪を落とすのを生暖かく見守って、スロットの中を整理する。

しまったなあ、通路狭いし、大剣は置いてこれば良かった。2、3種類入れてある双剣をストック上部に移動させる。ナックルも上部へ。あ、槍忘れた。通路では使いやすそうだったのに。

ついでにシールドラインのミラージュユニットも交換しておく。カグラは生憎、シールドラインをチェンジしようとしてすっかり解除したりするので、多くを持たないことにしているのだ。そのため2つしか常備していない。両方トイトイ装備ってことが多いんだが、狭い所でのトイトイって向かないんだよね。炎や氷なら壁にぶち当たって終わるだけだけど、土は具現化系だから建物壊すことになるし。

2度3度武器を取り出してストックの反応速度に異状がないことを確認する。

さて、無駄な時間を過ごしたことだし、皆さん急ぎますよー。

3 - 2 絡む枷、

「・・・終わったか？」

「終わったんじゃないかな」

「もー、つつかれたー！」

三者三様に戦闘の終了を噛み締める様子を眺めながら、カグラも手にした武器をストックへ返す。

数が多かったので時間は掛かったものの、そう強敵というわけではなかったのでカグラ的にはあんまり疲れていない。トニオやリイナもカグラと同じく疲労は少ないようで、へたり込んだエミリアを微笑ましく見守っていた。

エミリアと目が合う。頑張ったから褒めてくれと言わんばかりに四つん這いに寄って来たので、ワンコロよろしく頭を撫でてやった。ぐちゃぐちゃになった髪に悲鳴を上げつつ、それでも嬉しそうに見えるのは気のせいではないだろう。こっちが体力強化も検討しないとなー、と過酷なトレーニング内容を建設中であるとも知らず暢気なことである。教育に飴と鞭は大事なので、今は言うまい。

ともあれ、このまま原生生物の気配がないのであれば、任務は完了。中々に順調だったことだし、エミリアの汚名もある程度は返上できるはずだ。頭が可哀相な子という認識はしばらく拭えなかつたが。

よーし報告して帰るかー。

元気に踵を返そうとしたところで。

「り、リトルウィングの皆さんですか!？」

「ん? おお、そうだぜ」

転がるように駆けてきた男が、息せき切って声を上げた。

制服から推測するにインヘルト社の社員か。慌てふためく様子に眉を寄せる。

「原生生物の鎮圧なら、完了したところだよ。今から報告に行こうと思ってただけど・・・どうしたんだい」

同じく疑問を抱いたリイナが首を傾げた。

男が息を整えるのを待つ間、奥の様子を慎重に探る。原生生物がまだ蔓延っているのかとも思ったが、生物の気配は感じない。ただ、時折ガシャガシャと物音がするのが気掛かりで、念のためストックからツインセイバーを取り出す準備をしつつ、曲がり角からひよっこりと顔を覗かせて――。

「おわあ!？」

迫る銀閃を慌てて避ける。大きくバックステップを取ったつもりだが、距離が足りず追撃を食らった。抜いた剣で鋭い一撃を辛うじて受け止め、そのまま拮抗する。

重い。潰れる。正面から受け止めるんじゃないかった。受け流す動きに身体が対応できなかったんだから仕方ないけど。

「ボーマルタ!？」

エミリアが声を上げた。

4ツ足の無骨なシルエット。確かに鋼の身体がチャームポイントのGRM製警備マシナリー、GRM-05ボーマルタ^{ガラム}君だが、良く知ってんな。このタイプは耐久力、攻撃力共にそこの原生生物を上回る厄介なシロモノである。ただ、知能は持たせていないので、攻撃が単調。基本に忠実な番犬だ。

「原生生物鎮圧のために起動させた警備マシナリーが、暴走しまして・・・」

「おいおい、二次災害とか何やってんだよ」

「止められないのかい？」

「停止の命令は送ったはずなんですが、効いた様子がまるでなくて・・・申し訳ありませんが、そちらの鎮圧もお願いしたいのです」

「ええー、どんなのがいるの？」

「そうですね・・・^{ガラム}GRMの多脚、小型密集系、グリナ・ビートが数機でしょうか」

「豊富だね。骨が折れそうだ」

「ま、しゃーねえな。しかし追加報酬は頂くぜ」

「当然です！よろしくお願いします！」

「お前らにはこっちのフォローをしようという気はないのか！？」
当然のように普通に話を進めやがる。押される両の剣は、最早カグラの鼻に触れようかというところまで達しているのに！踏ん張った後ろ足が攣りそうで、変なところで緊張する。

どうも手助けは入らなさそうだったので、腹立ち紛れにあちらに押し付けようと思った。

つかえ棒代わりの後ろ足から力を抜き、超重量を支えていた上体を押されるままに後ろに倒す。押し掛かってきたでかい図体の腹に片足をかけ、勢い任せに蹴り上げた。

ちよつとばかり変則的だが、故郷では巴投げと呼ばれる体術である。

一瞬の空中浮遊を楽しんだ多脚マシナリーが耳障りな音を立てて地面と親密になった。着地点にいたトニオの緊急回避が成功したことに舌を打つ。エミリアとリイナはさつさと壁際に退避していたようだった。社員さんの姿が見えなかったけど、きっと死んでいないだろうとカグラは信じている。

「て、てめえー！何しやがる！」

「やかましい！私の怒りを噛み締めるが良いわッ！」
一人で倒せというのならお前がやれ！

ツインダガーを装着して構えるトニオに、カグラは襲い掛かってきた第二陣と刃を交えながら叫んだのだった。

で、エミリアは、原因はリーダー格のマシナリーの故障ではないかという。最新鋭のレオル・バディアとかいうのの試作稼動を行っちゃった事実からの推測だ。

何でこういう緊急事態に試作稼動とかしちゃうのかな。信頼の置けるもので済ませないからそういうことになるんだと、お偉いさんには分からののですか。頭の良い人は慎重な性格してると一般には思われてるけど、彼らは案外思い立ったら即実行の方々だから困る。ちなみにエミリアはまたしてもトニオやリイナに不審の目を食らっていた。カグラが追求しようとしなのは単に必要な方向への探究心が極端に薄い人種だからであって、大体の人間は、なぜなにどうしてを解消しようとするのが常である。いい加減学習すると良い。言及されたくなければ、見せないように伏せておくべきだ。

なお、その迂闊さがエミリアであるとも言えるので忠告はしてない。

そういうわけなので、カグラたちはひたすら奥へ奥へと進む作業に没頭している。戦闘はできるだけスルーしているんだが、それでも既にエミリアが声を発することはない。ロッドを振り上げる動作すらしない。消耗し切っているようなので、あとはゼーゼーヒューヒュー言う呼吸音が停止しないのを気を付けておくばかりだ。生き

る。

当然エミリアが稼働できない分の戦闘は他の3人に押し掛かってくる。しかしそこは戦闘慣れた傭兵。運動量を抑えての戦闘を心掛けているし、何より基礎体力が違う。未だ動きにぎこちなさが目立つカグラであっても、能力に支障をきたすほど疲労してはいないまあ、そこそこ疲れてはいるけど。

追ってきたマシンリーを挟むように扉を強制的に閉鎖した。強靱さでは扉が勝っているようで、端末操作に従順な2枚の板材は見事に鋭利な足を分断する。

金属が悲鳴を上げるのを無視してロックを掛け、一端の安全地帯を確保。エミリアが膝を付くのは敢えて止めなかった。

「しつつかし、無駄に広いな。さすがに嫌になっちゃう」

「全くだぜ。もうちょい利便性を追求しろってんだ」

「さっきの人、亜空間発声装置の開発場所だって言ってたけど、まだ着かないのぉ!？」

「確かここらだと思っただが・・・リイナ」

ト二オの声に、すかさず腕の端末を操作して地図を呼び出すリイナ。息のぴったりさはさすが夫婦である。ううん、地図読み解き要員欲しいな。なんせ自分が見ても50%くらいは間違ってるから。

「うん、次の区画だね。その扉の向こうだよ。ひらけた場所だから、武器を振り回すのに苦労はしないと思う」

「そりゃ有難いね」

マシンリーには思ってたより小さな刃が通らなかったで、途中からはナツクルに変更していた。ナツクルは使いやすくて好きなんだが、今回ばかりはこれがもう、物凄くやり難かった。

ノックバックしないド硬い標的があんなに殴り難いとは思わなかったのだ。マシンリーを相手にするって事態はあまりないので経験

が足りなかった。普通、マシナリーってのはヒトの生活のお供だから、敵対することはないのである。

硬いから腕は疲れるし、弾力性がないから衝撃は完全に殺されてコンボに使える勢いがなくなるし。ついでに蹴ってみると涙が出るほど硬くて痛いし。

何度、大剣にチェンジしてぶった切る快感を得ようとしたことが振り下ろしくらいなら天井と床にちよつくら決り傷が付く程度だし認可される範疇だったろう。

同行者が血相変えて静止して来なきゃ、今頃愉快痛快な気分だったに違いない。何でマシナリーのこいつらが建物傷付けんのは良くてこつちやあ駄目なんだ！差別反対！

大体、畏の爆発でビクともしねえんだから、刃が掠ったって大丈夫だろ。言葉にすると多分エミリア辺りから実に論理的な反論が返ってくるのは予測できたので、胸中に留めるに置いた。無駄な害は被るまい。

「エミリア、落ち着いた？」

「ゴールが見えたとなれば大丈夫！」

現金な子だなあ。その単純さが愛しいので、言動がアホっぽいよとの忠告も、やはり止めておいた。

「じゃ、行きますかー」

扉脇のパネルに触れて、通達されたコードを軽快に打ち込む。どうでも良い話だが、タッチパネルって形式は非常に感知が良すぎて嫌いだ。袖が変なところに触れて、2度ほどエラーで弾き出された。やっぱリキーってのは凹凸がはつきりしてるのが良いと思う。

ピピ、と軽い電子音に、武器を構えて待機する仲間と目を合わせた。

一つ頷きあつて、滑らかにスライドした扉に目を向け——閉める。突入しようとしたト二オが顔面を打ち付ける天使の音色が響いた。心が休まる打撃音である。

「カグラあああああああ！」

「いやあ、おつきかったなあ。嫌なモン見た。帰ろう」

爽やかに返した踵は速やかに阻止された。殺意すら滲ませて見上げてくる小ビーストから目を逸らす。

「帰ってどうするんだい。ほら、四の五の言わずに、行くよ」

だって、目算の高さだけでちよつとした3階建てビルくらいはあった。胴体はリトルウィングのエントランスを4室繋げたより馬鹿でかい一室を埋めるほどの容量。蜘蛛のような長い足がしっかりと大地を捕らえ、巨大な体積を持ち上げている様は圧巻の一言だった。

なお、カグラは蜘蛛が死ぬほど嫌いである。一匹残らず絶滅すれば、人類は中傷ディアボロスに負けることなく平和に暮らせるのだと心から信じている。蜘蛛を淘汰する生き物がこの世界にあるのなら、神と崇め奉つても良い。

あのフォルムは物凄く嫌いだ。座頭虫ザトウムシみたいだった。知ってる？

山とか登つてるといつの間にか肩とかに乗つてて私を発狂に追い込む、豆に針金ぶツ刺したみたいな奴。アメリカ地区では「あしながおじさん」とかいう小粋な呼び名を冠してるけど、そんなの認めないよ。あしながおじさんは人類の味方。蜘蛛は生物の敵だ。

ちなみに座頭虫は実際には節足動物門鋏角亜門クモ綱ザトウムシ目であつてクモ目じゃないらしいが、そんなの関係ない。灰色は黒と見なす。蜘蛛っぽいのは蜘蛛である。

見たくない。帰りたい。

「もう良いじゃん。嫌だよ。蜘蛛は嫌だ。帰ろう」

「お前、あれを蜘蛛とか抜かすか。あんなでかい蜘蛛がいて溜ま

るかってんだ」

「世界中の蜘蛛は私より断然大きい」

「何それ怖い」

「そこまで言い切られると、もう天晴れとしか言えないけどね・

」

惜しみなく溜息を吐いたリイナがカグラの襟首を取って歩き出す。ちよつと待って。中腰は辛い。ぎゃあ、と悲鳴を上げて壁に張り付いた。

「私はおんもで待ってるからッ！」

「駄目に決まってる！ほら、女は度胸！往生際悪いよッ！」

「往生際が悪いのが許されるのなら、私は今日から男として生きる」

「往生際悪いのに何という潔さなの」

「今でも似たようなモンだろ。さっさと行くぞ！」

「おい今なんつった」

迂闊な一言をさらりと吐いたト二才の脳天に、落とした踵がめり込んだ。

地味に気にしてるんだよ。わかるか、ホテル泊まるうかと思ってチエックインしようとしたら、普通に男扱いされたりする屈辱。トイレとか温泉とかは言うに及ばず。警備に止められたこと数知れず！

ピ、と再度入力されるパスワードを胡乱な目で見守る。

カグラとしては心行くまで妨害し続けても良いのだが、どうせ最終的には突破されざるを得ないんだし、エミリアに汚名を挽回させるのもちよつと可哀相だし。

あんまり唐突に嫌なものが目に入ったから、ちよつとゴネてみただけだよ。本当だよ。

そういうわけじゃないと行くからさ、エミリア、背中を全力で押す準備に入るのは止めてくれるか。

3 - 3 さて、着地点はどこに？

結論から言うと、辛勝した。

何で戦闘描写飛ばしたかと言えば、そりや当然、カグラの記憶が曖昧だからである。

動きは蜘蛛と違って思ってたより鈍重だったが、動きが違っからといってフォームが変わるわけではない。握った大剣で足の関節を叩き割り回る際、できるだけ全体を視界に納めないようにした。

その結果が、相手の動きを把握しきれなかったが故の幾筋もの男の勲章だ。いや、女だけ。

まあ、手を抜いたわけではなくむしろ全力でお相手したので、破壊速度自体には影響はなかったと思う。カグラがいらん怪我を負っただけの話である。

「・・・自分を犠牲にしてまで嫌いなのか？」

「蜘蛛なんて全部亜空間に吸い込まれればいい。亜空間実験、成功した後には失敗しろ」

「その力強すぎる意思をもっと別の方向にだな・・・」

「断じて断る」

「頭痛が痛い」

何そのあてつけがましい言葉。大事なことだから2回言ったようなものであつて、別に誤用じゃないよ。

ちらつと視線を送れば、本当に頭が痛そうな顔をして米神を揉んでいた。

可哀相なト二オ。どうしたの、そんな疲れた風情で。労わりを込めた慈愛の視線に顔を引き攣らせた彼は、しかし寸でのところで怒鳴り声を抑えたようだった。つまらん。

「で、エミリア。後何かすることあんの？」

「うーん・・・こいつ倒したことでジャミングは解消されてるはずだから、すぐに命令系統は回復するはずだよ」

エミリアがそう言うのなら、ある程度は信用置けるだろう。ただ、命令の発信源たるこの周辺の回復はまだしばらく時間がかかるかもしれない。

ふうん、と一つ頷いて。

「わかった。駄目だったら逆さ吊りでデコピンの刑な」

「何その理不尽!？」

「世界と引き換えにしても愛せない嫌悪対象と戦って荒んだ私の心に滲み込む一滴の清涼剤」

「憂さ晴らして素直に言いなよ」

「そんなはつきり言ったら、エミリアが可哀相じゃない」

「遠回しに言っても事実は変わらねェだろ」

気分は変わると思うんだけど。

憎しみを込めて睨め上げる視線を心のバリアーで粉碎しつつ、警戒しながら扉を開いた。

とつくに新型の所在地からは移動している。当然、あんな巨大な足の多い物体と同じ空間に長々と居たくなんかない、というカグラの断固たる主張による移動である。お隣の部屋は侵攻時に安全を確保していたので、待機場所は自然とそこになっていたのだけれど。

何も無い空間に10分もいると、いい加減飽きる。時々ガンガンと壁だか戸だかにぶち当たって行くマシナリーがいたのだが、ここ1、2分は騒音もなかったし、そろそろ大丈夫だろう。ポップコーンだって音がしなくなったら作成終わりなんだし。

前方に敵影なし。ひよっこりと顔を出して後方を確認。マシナリ

ーがガツチャンガツチャンと喧しく歩いているが、敵意はなし。

しばらく観察して、目の前を通り過ぎて行くのを待つ。センサーがこちらを認識した。一旦足を止めてジロジロと全身を眺め倒される。胸元の立ち入り許可証を目視した途端、何事もなかったかのよう

うに歩き出した。

「・・・えらい慎重だな」

「さっきの今だしね。確認がてらでしょ」

許可証の発信する電波だけで判別を下さなかったところを見るに、新しい命令が届いているらしかった。

ということは、ここら一帯も問題なし。さつさと報告して帰ろう。

一仕事終えた後つてのはやっぱり気が抜ける。のんびんだらりとした歩調は行きとは正反対で、トニオでさえも全く警戒網を張る様子がない。

ここはそもそも、普通であれば世界で1、2を争うほど安全な場所であるはずなのだ。今となっては敵もおらず、そんな場所ですら緊張し続けるほど世界不信の心得は持っていないのである。

「・・・依頼主の待機エリア、どっちだっけ？」

「右だ。お前、相変わらず重度の方向音痴だな」

都合の悪いことは聞かないフリ。

右に曲がって、またも左右に分かれていたので勘を頼りに左へ行こうとしてエミリアに止められて右に曲がって、次の分かれ道を左に曲がる。何このダンジョン。シンジクステーションじゃないんだから、もっとスッキリさせなよ。

一際巨大かつ頑丈そうな扉をスライドさせると、ようやくお目当ての人影が見えた。弾かれたように振り向く、対マシナリー戦を押し付けてくれやがった男にヒラヒラと手を振った。

はて、隣に佇んでいる壮年の男には見覚えがあるんだけど、誰だ

ったかな。

「良かった、ご無事でしたか！」

ご無事でしたよ。何を縁起の悪い心配をしてたんだこの野郎。こっちはあ迷路のせいでストレスがマッハでだだ上がりしてんだ。発言には気を遣わんと、その2つの鼻の穴が倍程度に広がることになるぞ！

半眼で眉を顰めるカグラの背に、宥めるようにリイナの紅葉の手が当てられる。

了解。任せます。

一步を引いて、改めて男の隣に立つ人物に目を向ける。あちらも視線に気付いたようで、ふと顔を厳しい顔を綻ばせて口を開いた。

「あなたたちのご忠言の通り、警備マシナリーも正常化されました。適切な対応を感謝致します」

「あなたは・・・インヘルト社代表のナツメ・シュウ!?」

代表取締役。社長ってやつだね。そうそう、そういえばこんな顔の人だった。

ニユースでちよくちよく見かける画像と照らし合わせるまでもなく、納得して、ああ、と声を漏らした。

白髪と言うよりは銀髪と呼ぶべきだろう。肩に触れるか触れないかという髪を後ろに流している様は、漂う威厳と良く合っている。瞳に浮かぶ理知といい、どこに出しても恥ずかしくない渋み溢る立派な紳士だ。

「ええ、自己紹介が遅れて申し訳ない」

それにしても柔和なオッサンである。立場の割りにえらく腰が低い。普通なら居丈高であっても全くおかしくはない地位の人間なのだ。現在のインヘルト社というのは、そこまで上位に位置する大企業なのだから。

「あなた方の迅速な対応がなければ、亜空間研究に致命的な遅延が生じていたかもしれない。改めて、お礼を言わせて下さい」

エミリアがそつと顔を背けるのを見逃すカグラではなかった。そうだね、そんなに丁寧にお礼言われると罪悪感覚えるよね。エミリアは高らかに亜空間装置なんぞ破壊しちまえと唱える過激派だったもんね。

ニヤニヤと向けた視線で温かみを送ると、心底悔しげな睨みが返ってきた。悔しがるより反省しろ、お前は。

「しかし、亜空間研究をこんなところで進めてるなんてのは思わなかったな」

ふいにトニオが上げた声に、リイナが頷き賛同する。

「そうそう、もつと一目に触れないところで嚴重に警備してるモンだと思ってたよ」

「・・・十分嚴重だったと思うんだけどなあ」

こいつら、今まで自分たちが張り倒してきたマシナリーの数々を忘れてんのか。

まあ、たかが4人で突破できてしまうという意味ではザルかもしれないが、通常であれば、更に警備の人間が待機しているところなのだ。今回は、原生生物だけならともかく、マシナリーの暴走というイレギュラーのせいで真価を発揮できなかっただけで。

それはそれで問題だけだね。

「そうですね。嚴重であるつもりだったのですが、今回はそれも裏目に出してしまうことになりました。もう一度警備を見直す必要があるようです」

「ま、大事な施設なんだし、人件費食ってでももつとヒトを増やす方が良いでしょうねえ。言っちゃ悪いけど、キャスト含め、マシナリーってのはガード破られたときの強制接続が怖いから」

「ええ、痛感しました。無事に収束したからこそ言えることです
が、今回のことは良い教訓にもなりそうですね」

苦笑いを零す紳士が、ひどく大切なものを見る目で施設を見渡した。

「ここには、レリクスから発見された旧文明の遺産を集めてある
のです。それらが破損しては、亜空間研究の前進に大きな支障が発
生する——いえ、場合によっては、研究が終わってしまう可能性
すらあるのです」

「ええ、ど、どうして!？」

目を剥いて驚くエミリアだが、こちらこそ驚いた。

どうしてって、もしかして知らないの?こつち方面に関しては圧
倒的な知識を有していたので、当然知ってるもんだと思ってたんだ
けど。

「亜空間は旧文明にはすでに発見されていたテクノロジーなので
すよ。レリクスには、亜空間テクノロジーがそこかしこに使用され
ている。つまり、レリクスを研究することが亜空間研究である、と
も言えますね。そして、亜空間研究とは言い換えれば旧文明テクノ
ロジーの研究なのです」

ですよね。

視線を巡らせると、小ビースト夫婦もカグラと同じく、事実を再
確認しただけだという色を見せている。勿論、最早案山子のごとく
佇むだけの存在と成り果てたインヘルト社員も同様である。

「えっと、あのー、そんな重大な話、あたしたちに言っちゃって
も良かったんですか？」

そんな質問しちゃうってことは、本当に知らないんだなあ。

「公式に発表されてるよ。エミリアってニュースとか見ないの?」

「ちよっと、人を馬鹿の子みたいに・・・!」

「専門的な知識というのは、興味を持たなければ耳に入らないものですからね」

普通なら良いフォローではあるんだけど、エミリアにしてみれば「ニユースも見ねえんだな」って確認にしか聞こえないわけだ。専門知識の塊の子なんだから。

さすがに不憫になったので、細い金髪を掻き回すようにして頭を撫でた。

「次世代の子供たちの将来を左右する亜空間研究だし、エミリアはどっちかっていうと無邪気に守られてる側にいるべき子だから、本来ならそんなもん知らない方が良いんだよ。気にすんなって」

「あー、そりやそうか」

「おや、良いこと言うじゃないか」

大体こんな子供が関わってることは褒められる事態じゃない。大人つてのは子供を守るために早く生まれてくるのだ。カグラたちが大人に守られて過ごしたように、物事は螺旋を描く。

親という庇護から外れたカグラだからこそ、人のフリ見て何とやら。余計に強くそう思うのだけれど。

「ちよつと、髪の毛ぐちゃぐちゃになるでしょ！」

顔を赤くして暴れるエミリアを片手で押さえて、端末を確認した。そろそろ予定時刻である。

微笑ましそうな顔で佇む紳士に軽く頭を下げて辞去を述べる。再度礼を述べられたのだが、そもそもこちらは金銭絡みで動く企業戦士なのだからそんなに気にすることはないのになあ。

この時、カグラは気が付かなかった。

こちらをじっと見詰める視線と、知った気配。退出した後動い

た『それ』に気付いていれば、例えば自分は一体どう動いていただろう。

そもそも、思い出すべきだったのだ。ナツメ・シュウに会ったその時に、思い出した映像の中、その傍らに立つ『それ』のことを。

まあ、それでどうにかなったとも思えないけれど。

私と子供と子供と、

前に行くエミリアは、いつそ異常と言っても良いほどに上機嫌だった。クラウチに仕事の出来を褒められたのが原因なんだが、ここまで喜びに満ち溢れているのを見てみると、いつそ哀れに思えてくる。どんだけ褒められ馴れてないんだって話。

まあ、今回の一番の功労者はエミリアなので、褒められたというのは当然の結果だった。マシナリー暴走の元凶を突き止めるのにもう一働きしなきゃいかんかったと考えるとぞっとする。

それにしても初仕事でボーナス与えるとは、以外とクラウチは気前が良い。娘を猫可愛がりする親父にも見える。こう、隙あらば甘やかそうという。ちなみに借金回収は仕事とは認めない。絶対にだ。

なお、それから5分経った今も、テンションが落ち着く様子は一切ない。次回に繋がる勢いなので、ここまで舞い上がらない程度にカグラも誉めて伸ばす方向で教育しようと思う。飴、飴、飴、飴、飴、鞭、飴、フェイントで鞭、くらいのペースが良いかな。

さて、今どこに向かっているのかと言えば、事務室である。チェルシーから、拉致ってきた子供が目を覚ましたとの情報があったのだ。

痛め付けた身としては正直あんまり行きたくない。エミリア一人で行つてくると良いよという進言はあえなく却下された。何だよ、初めてのおつかいくらい受けようよ。

重い足取りでややスローペースを目指せども、リトルウィング社内のこと。そう時間をかけない間に目的地に到着した。

「カグラ、ちゃんと謝りなよ！」

「嫌だね。私は正当性を主張する」

扉横のパネルにキーを打ち込もうとしてど忘れした。懐からカー

ドキーを取り出してかざす。

軽い音と共にスライドした向こう側から、すぐに強い視線が届いた。見返すまでもない、あの子供である。隣にはチエルシーの麗しい姿もあった。

目があった途端、警戒態勢に入る子供。て、おい、素手で飛び掛かってくる馬鹿があるか！離れる！

「チョットチョット、敵じゃないヨ！大丈夫。カグラはこう見えて、子供には優しい気がするヨー」

「そのなけなしの優しさを脱ぎ捨てた私を見たいというのであれば武器を取るが良い！」

「カグラ、大人げないッ！」

だって、対応に困るんだもの。

とりあえず腕の付け根を指で強く圧迫し、子供の握力を抜かせた。服を掴んでいた指から力が抜けたのを見計らって腕を捉え、身体を半回転させて後頭部をわし掴む。

それでだ、非力なヒューマンとはいえ、一応リングを絶命させる程度の握力は有しているわけだが。

「はなせ！」

「このまま握り潰されると、大人しく着いてくると、どっちが良い？」

「ちよつとカグラ——って、どこ行くの？」

「お昼ごはん」

そういえば食べてなかったのを思い出した。忘れてる間は大丈夫だけど、思い出せば腹は減るもんだ。唐突に食べたくることって誰だってあるよね。

どうよ、と窺う間もなく、少年は速やかに抵抗を止めて捕虜と化

した。

「ごはん！」

「おーし、良い子だ」

同意を得たところで形の良い後頭部を手中に納めたまま歩き出す。お昼を余裕で過ぎてる時間なので、カフェは多分空いてるだろう。

「チエルシーも行く？」

「残念だけど、ワタシはもう済ませたヨー。また誘ってネ」

非常に残念である。引率者がいれば、対応はそっちに任せたのに。

じっと見詰める視線に眉を潜め、スパゲッティを運ぶ手を止める。視線が逸らされる様子はない。口を開く様子もない。多少の気まずさを覚えて、とりあえず少年の口にフォークを突っ込んだ。

わざと手をぶれさせて口の端っこにミートソースを擦り付けてやったのは、単なる遊び心であって他意はない。掴み掛かられたときに袖がちよつと伸びた恨みとかでは断じてない。

「ふあふあは」

「食ってから喋れ」

エミリアはどっか行った。ここ奢るって言うてたけど、食い終わるまでに帰ってくるだろうか。嫌だぞ、こいつが食い散らかした無数のプリンに散財すんの。

少年は、ユート・ユン・ユンカースというらしい。警戒心露わに名乗ったあのときの少年はどこ行っただろう。

今更の確定だが、本人曰く、やはりカーシユ族の戦士見習いだそうである。見習いから本職にするのに、やっぱり昇進試験とかあるのかね。

はふはふとパスタを飲み下したユートが口を開く。

「カグラは、強いな」

「そりやどうも」

「どうやったらそんなに強くなれる？」

どうって。

口を閉ざして黙り込む。非常に答え辛い。そもそもあんまり自分が強いつもりもないし。前も言ったけど、効率重視で動くから一見強そうに見えるだけで。

貝殻と化したカグラに首を傾げて、ユートはずいとな身を乗り出す。もう一口放り込んだパスタは、程良い温もりを啞内に行き渡らせただけで、追撃を阻んではくれなかった。

「カグラのたたかいかたは、お兄ににてる気がする」

「・・・参考までに」

「強いんだ！ものすごく強かったんだけど、なんだろう、それだけじゃなくて・・・武器をあわせてるのに、少し、遠い、感じがする」

うむ、清々しいまでにわからん。

早々に理解を諦めて栄養摂取に意識を戻した。恨みがましい子供の視線なんぞ蚊に刺された程度にも感じん。

「お兄は、強くなるには死にふれろっていった。死にふれることで強くなれるって。ぼくは、それがわからない・・・」

ちらりと上げた目線の先では、少年が気落ちして肩を落としていた。目は相変わらず強くカグラを捕らえていたが。

「わからんならお兄とやらに聞けよ」

「お兄は、大地神さまのところへいった」

「・・・ああ。そりゃ悪かった」

神さまのところへ行った、という使い方は万国共通である。
ばつの悪さにジョッキに口を付けて——中身はお茶だよ——
唇を湿らせた。

「まあ、わからんでもないな」

「わかるのか!？」

わからんでもないが、合ってるかどうかはまた別の話だぞ。

身を乗り出すユートの近所から汁物を救出する。こいつ、食い物あっても構わずテーブル叩き付けそう。こぼれそうなものは早々に食っちまうのが吉である。

「死にふれたことがあるのなら、教えて、教えてほしい!死ってどんなものだ?死の先には何があるんだ!？」

必死の形相で辿々しく言葉を次ぐ少年には、周囲の視線つてのは見えないんだろうか。カフェってな、ゆっくりするところだよ。決して騒ぎ立てるとこじゃなく。

スパゲッティの残りをかっ込んで咀嚼しながら考える。

つつたつてな。

メモントモリ

カルペディエム

ヴァニタス

「死を思え、一日の花を摘め、全ては空しい・・・色々あるけど、死に触れることで、か。なるほど、兄とは気が合いそうだったんだなあ」

言うのは簡単なのだ。ただ、それを実感できなければ意味はないし、教えることで理解を阻害する可能性は大きい。

虚空に視線をさまよわせながら汁物を啜った。まだ熱い。保温機能が高すぎる。カグラは猫舌なのだから、その辺り考慮して頂かないと。

「なんだ、それ・・・めめ、と?なあ、もつとしつかり教えてほ

しい。カグラは死にふれたことがあるから、そんなに強いんだろう！？」

「そつから勘違いなんだが、私は強いつもりはないぞ」

「でも、ぼくよりずっと強い！」

そりゃ人生経験の差だ。戦闘民族のカーシュ族戦士に簡単に勝てる腕があれば、今頃は両親探しなんぞ投げ捨てて、どっかの機関のトップランクだよ。

汁物の攻略を早々に諦めて、テーブルの遠くの方に安置する。あそこならこぼれてもカグラに被害はなからう。

少し考えて、人差し指を立てる。アーモンド型の目が吸い寄せられた。

「教えても意味がない。意味がない意味は、言葉を理解したらわかる。だから教えられない」

「そんな！」

「ヒントはやるよ」

文句を封じて言葉を紡ぐ。

「言葉は、正確に記憶しろ」

混乱を移した琥珀色の瞳の中に、飄々とした自分の顔が見えた。

こいつ、よくこんなのに真剣な話題振ろうと思うよね。自分なら避けて通って、エントランスうろついでる真面目人間キャストのバスケットにでも質問するけどな。

「よく・・・わからない・・・」

気弱げな声は、捨てられた子犬のようだった。生憎カグラは猫派である。そんなものに絆されて口を開きはしない。

「なあ、他に、他にはないのか？」

「長らく考えてもわからんようなら、その内第2ヒントを授けてしんぜよう」

「いますぐほしい！」

その内つつつてんだろ。暴れて落ちると思ったら大間違いだぞ。

「たっだいまー！遅くなってごめん——って・・・」

「おう、お帰り」

「どーけーえ！カグラ、やめろ！」

意気揚々と扉を開いたエミリアが、急激にテンションを落として顔を引きつらせる。

こちらこそその表情だ。何だその、お前の2倍くらいある戦利品の質量。ボーナスなんぞ完全に吹っ飛んでんだろ、どう考えても。

「・・・なにしてんの？」

「教育」

「いた、いたいっ！」

食堂で暴れ続けるクソガキにはお仕置きが必要である。個人的には、体罰が最も有効だと思ってる。

「はなせー！」

プロのレスラーから教えて貰ったエビ固めが暴れた程度で外れるわけあるまい。むしろ暴れるだけ痛くなるから反省して大人しくなるが良いよ。

公式ルール通りマット叩いたら許してやるから、お前の奇跡を待たな。

子供。(前書き)

クラウチマジ死ね回。

子供。

「でねでね、これがチエルシーで、これがトニオ、リイナにはこれで——これはあんたにあげる！」

気前の良いことに、エミリアは初めてのボーナスのほぼ全てをプレゼントにつき込んだらしい。次から次へと出てくる色とりどりのラッピングボックスの量といったら、友達100人計画でも遂行してんのかと言いたくなるほどである。案外知り合い多いのな。

それで、お前はその全長1mオーバーのカクワネのヌイグルミを、一体どうしろって？

「いつも、その、ありがとね」

ツンデレきたーと言いたいところだが、エミリアは別にカグラにツンツンしてるわけではないしなあ。

オッサンには大体お互いツンだが、こっちには比較的素直な感じなので、萌え的な意味の感慨は湧かない。ほのぼのはする。ビデオに撮っというクラウチに見せたら、分かりやすい感じで隠れ悔しがるんだろうな。ええと、ビデオ機材はマイルームだっけ。

「・・・どうもな」

「うん！」

抱いて寝ろってか。それともサンドバックにしろってか。

どちらにしても好意に違いはない。一瞬の躊躇の後に速やかに手を伸ばし、笑顔と共に受け取った。多少頬はひきつったかもしれないがご愛敬。つつか仕方ないだろそのくらい。

ちなみにスカラカンだったカグラの部屋は、段々物が増えてきている。入室と同時に2体のディ・ラグナスがお出迎えしてくれる。中央にトッゲトゲのサボテン椅子が安置してあったり、何か知らん

が手に入れたトニオのポートレートが2枚並んで壁を陣取っていたりする。

こないだまでは1枚だったんだけど、部屋に来たトニオがもの凄い嫌そうな顔でビリビリにしていたから増殖させたんだ。今度破くと4枚になるよ。ストックは十分あるから心配すんな。

つつか、何でトニオのポートレートなんぞがこんなに出回ってるだろう。どっかにコアなファンがいるのか。しかも多数。怖い。

そうだ、この人形、サボテン椅子に座らせておくと緑と緑で調和するかもしれない。尻に3つ4つ穴があくかもしれないが、尻には穴があいてるもんだし、少しくらい増えても問題ないよね。

人形の行く末が決定したところで、プレゼント兼昼飯のプリンをようやく食べ終えたユートが目をきらめかせた。

「そのちつさいのは誰にあげるんだ？」

お前じゃないことは確かだよ。

他より少しばかり高級さの漂う小箱の行方は分かりきっている。

避難していた冷めた汁物を啜りながら、先を言い淀むエミリアの、何とも言えない表情を楽しんだ。

「えっと、これはね、その」

真っ赤な顔でもしてればもつと眼福だったんだけどなあ。純粹に言い辛いらしく、眉を八の字にして口ごもり。

「えっと・・・これは、お——」

蚊の鳴くような声を、けたたましい非常ブザーが遮った。何だ、良いところなのに！

『リトルウイング全社員に連絡。非常事態発生デス！』

スピーカーを通る堅い声音はレイチェルのものだった。

『クラッド6、リトルウイング管轄ブロックに、武装した集団が

侵入しまシタ！」

「え、えええ！？それって、まずいんじゃない……！」

「まあ、警備会社が進入許したとなるとなあ」

普通に不祥事である。相当重大な。クラウチ、責任問題問われて辞めさせられたりしないかな。

カフェの人間全てに緊張を産んだ警報はナリを潜めたものの、赤い警戒色は空間を支配したまま消えない。警戒しにくいから止めて欲しいんだが。

視線を走らせた中には特に異常は見られなかった。カフェの出入り口は一つである。防弾シャッターまで締め切っていれば、安全の確保は容易な場所だ。
となれば。

「エミリアはユートとここで――」

「なんだ！すごい音がしたぞ！？」

「ちょ、ちよつとユートッ！」

「――待ってるって、何でそこまですら待てないんだお前らはああああ！」

誰か、檻を用意しろ。スヴァルティアでも捕獲できるような丈夫なやつ。

ホールから聞こえた重なる銃声。一目散に駆け出すクソガキどもは一度撃たれてしまうが良い。冗談だけど、ちよつと本気。万が一発射されてんのがゴム弾なら、心から被弾を望む。麻酔銃なら3、4発当てても許すよ！

カフェに残る事務員その他に籠城を命じて、慌てて後を追った。正直言つと何で自分がこんなに慌てなきゃなんのかと思う。でも見捨てるわけに行かないのが人生である。ああ、世知辛いなあ。

「な、何よ、何なのよあんたたち！」

カフェを飛び出して真っ先に入っただのは、エミリアに集まる銃口だった。

隣に立つユートは清々しいまでに無視されている。カグラと同じくホールに駆け付けたその他の社員も、侵入者の虚ろな視界に映りすらしていないのではないだろうか。

視界に映っていないのならさっさとエミリアに合流するのだが、いかんせん実際にはばっちり認識されてることだろう。迂闊には近付けない。

というか、位置移動が早すぎる。あいつ何でこういつときだけ素早いんだ。普段どんくさいのに。

『カグラ・・・』

敵という垣根を越えた向こうから、脳に直接届くような鈴の音が聞こえた。現出したミカと視線を合わせて、他人にわからない程度に小さく頷き返す。

狙われているのは、間違いようもなくエミリアである。問題は、この場にいる人間がそれを理解していないことだ。

カグラには、エミリアが狙われている理由が大方見当付いている。他の人間には推測もできない。故に、揃って一方向に定められた狙いが、ただ「飛び出してきた子供を人質に取った」としか思えない。殺意の方向は、行動を決める。「エミリア」に向けられているのか、「そこにいた子供」に向けられているのか。

「おいおい、人質を取った程度で逃げられるとでも——」

カグラの横で小さく嘲りを吐いた男には速やかに眠って貰った。寝付きの良いのは良いことである。床とお友達になる直前、騒音を立てて侵入者を刺激されては困るので、爪先で鳩尾を搦ってやったそのままそつと床に放置する。

おい、何だ、知り合いでもない野郎がこつち見んな。お前も健やかに眠りにつきたいのか。

人質なら、良いのだ。人質なら、逃げるまでは命が保証される。死体は取引材料にならないのだから。

だが、他でもない、エミリアが狙われているのなら。

「・・・お」

ぎゃあぎゃあと騒ぎ立てるエミリアとユートにヒヤヒヤしていると、扉のかげに人の姿が見えた。目を凝らして視力よ一時的に良くなれと願を掛ける。

見覚えのある姿だった。面識はないが。

ふとこちらを向いた人影は、一瞬の躊躇もなくカグラに一つの頷きを投げた。了解、と頷き返してストックを脳裏で漁る。

身を屈めて構えを取ったのを確認。後ろ手に出現させた無骨な球体のスイッチを押し、落とし、踵で弾いて足の甲に回し、爪先から床に転がったのを見届けて目を閉じる。

コロコロと転がりエミリアたちの足下に辿り着いた球体が――
閃光を放ちながら破裂した。

「な、何だ!？」

「う、わ、まぶしい・・・!」

声を頼りに駆け出して、目を開けると同時に二人の襟首をひっ掴む。

体重を掛けて押し倒した矢先、頭上を掠める鋭い光鞭。おお、鞭とは何という似合う武器。自分をご存じでいらっしやる。

「ちよつとカグラ」

「ちよい黙れ」

文句を押し留め、当てずっぱうで振り下ろされた刃を足裏で弾いた。そのまま伸び上がった顎に軽い一撃を当て気絶に追い込む。

反対側から射出されたいくつもの光弾は、再び空を斬る一閃によって霧散した。あの、助かったには助かったんだけど、自分も当たるところだったんで、できればちょっと注意してあげて下さい。

事態を察して大人しくなったエミリアから手を放し、起き上がるうとするユートを全力で沈める。口は鼻まで覆って塞いでやった。呼吸は皮膚で行うと良い。

「んんんッ！」

「閃光弾で目眩んで見える方がおかしい。いいからちょっと大人しくしてろこのクソガキ」

「え、通じたの、今の」

いいから黙れって、お前ら。敵の命中精度が段々増してきてるから。折角視力を奪ったのに、鬼さんこちらとヒントを与えていては仕方がなからう。

しかし、目を押さえてギアアギアと喚き立てるリトルウィング社員の諸君に無駄な犠牲を出すわけにも行かないので、もしかしたらこつちに引き付けるのは正しいのかもしれない。次々と協力者の手で侵入者は薙ぎ倒されていることだし。

エミリアが少しずつ戻ってくる視力を確認するように瞬いた頃には、ホールの一面は一種の地獄のような有様だった。

「す・・・ごいな、こんなに人が倒れてるの、初めて見るぞ」

そもそも半死半生の人が倒れてるってだけでも、普通に見られる光景ではあるまいよ。

「・・・ていうか、あの、もしかして、死んでる？」

「ちゃあんと全員、生きてるわよ」

エミリアは早急に謝罪か感謝の意を示すと良い。

カッン、と硬質な床と小面積が接触する音に、少女の身体がビクリと震えた。

涼やかな声は笑い混じりなので怒っているわけではないだろうが、内面と外面が一致しない人なんてザラにいるよ。そつとエミリアの耳元に囁いた言葉に、彼女はそつと苦笑をこぼした。

「あまり妙なことを吹き込まないでちょうだい。私の印象が悪くなるじゃない」

「そういう人もいるよ、というだけの忠告ですよ。別にウルスラさんがそういう人種だということじゃなく」

「ものは言いようね。話に聞いていた通り、新人とは思えないふてぶてしさだわ」

「・・・ちよつと、誰からどういう評価を聞いているのか、詳しく教えて貰えませんかね」

ウルスラ・ローラン。名前外見その他諸々は元々知っている。

軽く説明するならば、ウルスラはメディア露出も高い有名人である。リトルウィング者の統括であり、クラッド6の艦長。いわば社長。かつ、高名な服飾デザイナーだ。

ボンデージ調の挑発的な、特徴のある彼女の服装はそういう事情がある。決してSM趣味が高じて私服になっているとかいう事情ではない。ここ重要だから覚えとけよ。テスト出るぞ。

「初めまして。私のことは知ってるみたいね、新人さん」

「ごめんなさい、知ってます。カグラです。初めまして」

「・・・？」

訝しげに眉根を寄せる彼女の気持ちは良くわかる。いきなり謝罪されたら、そりゃ不思議だよな。でもごめん。

同業者の女傭兵が彼女の物凄いファンで、3日くらい徹夜してま

でウルスラ情報を植え付けられているのである。正直、そこらの軽度のストーカーより彼女に関する知識はあると思う。

ほんとごめん。あのストーカーを世に放ったまま放置してることにごめんなさい。

素早く目を逸らしたカグラを救ったのは、思いもよらず、エミリアだった。

「あ、あの、ウルスラさん、助けてくれてありがとう!」

ここは知り合いのようである。拳を握るほど力一杯のお礼に、ウルスラの冷たい表情が緩んだ。

「どういたしまして。でも、お礼ならカグラにも言ってあげて」

「フラッシュ焚いただけですよ」

こちらを向いたエミリアが口を開くより先に事実を述べる。単なる突撃補佐にお礼言われてもね。

「さっきのまぶしいの、カグラがやったのか?」

カグラを振り仰ぐ対の目。そういえば、ユートンところではああいう道具は使わないのかもしれない。本来の用途は対人用だし。

「手持ちに閃光弾があつたもんでな」

「カグラは何で動けたんだ?」

「視力つてのは、いきなり眩しいの食らうから潰れるんだよ。目閉じときゃ平気」

矢継ぎ早に繰り出される質問にも、まあ多少の素っ気なさはあるものの、それなりに正確に答えてやることにした。

この年の若者つてのはとりあえず実力で押してみるってのが基本信条なのですぐには小手先技の実行はしないだろうが、その内役に立つこともあるだろう。カグラがまさにその先駆けであるし。

「・・・そんなのしなくても、たおせたんじゃないのか」

「倒すだけならねえ。今は安全性の確保が先決だったんだよ。こ

つちが特攻したことで発砲されたら、色々と困る」

最後は濁した。ここでエミリアが殺されるし、なんぞと口走ったラグラの人生にレッドランプが灯る可能性がある。美人なお姉さんに追求されるのは嬉しい反面怖いし。

「ユート、獲物しとめるために畏張ったりするだろ？別になくても倒せるのに」

こくりと素直に頷いた少年に内心でほっとする。良かった、ぼくはそんな卑怯なことしないぞ！とか言われなくて。

「単身当たれば怪我するかもしれないけど、畏張って効率良くやれば怪我の確率が下がる。補助テクニクみたいなもんだね。ケースバイケースで色々やると楽になるんじゃない？」

「ふうん・・・いろいろあるんだな」

眉尻が少々下がっているのを見るに、実行はやはり難しいらしい。イノシシさんだもんねお前。でも、その小手先技で惨敗したつてのは覚えてると次回に役立つよ。

ちなみに、ユートと話す間にも周囲は目まぐるしく動き回っている。

そりや当たり前だ。侵入者の処理やら残党の確認、経路を突き止めた上での警備の強化に、負傷者の保護。やることは山とある。

その上でエミリアと会話を続けるウルスラが何故ここにいるかというと、要は何となく事態を察しているんだろ。悠長にしているよう目で目線には隙がない。周囲の警戒をラグラに任せ、エミリアの口調や表情から状況の理由を探っている。穏やかな顔を作ってるように、姉さん、目が怖いです。

「おいラグラ、こいつらどうする」

「どっかの個室にでも押し込めとけ。後で丹念に弁解聞いてやる」

「・・・お前が？」

「文句か」

「いや・・・同情してるだけだ」

トニオは相変わらず失礼な奴だなあ。ちょっとお話するってだけじゃないの。腹割るって表現が現実になる可能性を寄り添わせるだけで。

「それで、エミリア・・・」

床掃除をしながら去って行くトニオと入れ違いに入ってきたヒゲ面に、ウルスラが即座に反応した。身長差の関係で俯きがちにしていたウルスラの垂れた横髪から、鋭い鷹の目が覗く。姉さん、眼光怖いです！

ところでクラウチ。足下がおぼつかないようだが、ひよつとしなくても酔ってるんだとしたら、さつさときびすを返すべきだと思うよ。行動方針は「命を大事に」がオススメ。

「おう、随分賑やかだったが、何か」

言葉の途中でヒゲの一筋が切断された。同じく切断された言葉の続きは、のどから虚空へと帰宅したようである。ははは、二の句が告げないとはまさにこのことだ。

「クラウチ・・・」

ウルスラの背後に幽鬼のような焰が見える。

エミリア、ユート、ちょっとこっち避難しておいで。

「お、おう、何だよ」

「あなた、今までどこにいたの？今更ノコノコと出てきて」

唸る拳がクラウチのボディを捉えた。文節の間に殴り掛かるとは上級者である。初心者には喋ってから攻撃するから避けられやすい。

「給料分くらいは、きちんと働きなさい！」

ほづら、お子様は壁の方向いて耳を塞いでおりなさいな。情操教育に悪いわ。

ところで女王様と下僕みたいな構図を作り出してる二人は、周囲

のドン引き具合にはちゃんと気付いてるんだろうか。ないだろうな。ご愁傷様です。

「・・・あ、あれ？」

「ん？」

青い顔で大人しく耳を塞いでいたエミリアが、ふいに狼狽の声を上げた。見れば、オタオタと懷やらポケットを漁っている。

「どうしたんだ、エミリア」

首を傾げるユートに向けられた目は必死だった。ちょっとばかり潤んだ水晶体。がつつりと少年の細い肩を掴んだ指は、まるで猛禽類の鋭爪のようだ。

「あの、あのさ、あああたしが持ってたあの包み」

「うお、なんだあ！？」

野太い奇声に振り返る。確認自体は労力の無駄だった。クラウチが何かに躓いたってだけだった。

クラウチが躓いて骨を折ろうと頭蓋骨が潰れようとどうでも良いが、しかし今は昔、可愛らしく包装されていた小さな紙の固まりをクラウチの足下に発見した。

沸き立つ嫌な予感に、慌てて口を開こうとしたが。

「何だこりゃ、ボロツボロだな。ゴミか？」

どうも遅かったらしい。途端に顔を青褪めさせたエミリアが小さな声を上げた。

「あ、それ・・・」

「んだ、お前のか？」

「え、いや、あの」

「・・・違うのか？んじゃ、やっぱりゴミか」

おい、ゴミはゴミ箱へとか映画館みたいなこと言ってなくていいから、ちょっとエミリアの異常を気にして止まれ。

「おいヒゲ、ちょっと待てって」

「あん？お前のか？」

何で結論をそう急ぐんだ、ちょっと待て。

頷くか否定するか、ほんの少し迷ったのが致命的だった。酔った足取りでダストボックスに向き直る中年は、止める間もなく。

「ま、どっちにしてもこんなボロいのは捨てちまって構わねえだろ？」

「あ・・・！」

犬に骨を放るように、気のないスローで投げ出される包装紙。と、その中身。

おいおいおいおい！疑問系なら答えを待てええええええええええええ！

聞こえただろうか。今のエミリアの絶望感に満ちた声音。

斜め後ろを振り返るのが怖い。淀みすら感知できない、いつそ澄み切った負のオーラをひしひしと感ずる。

「あ？何だ、エミリア」

のこのこと近寄るヒゲの横つ面を張り飛ばしてやろうか、それとも大剣でダイナミックに整形を施してやろうかと悩む。それとも頭頂部から槍を一直線に突き込んでやろうか。脳が活性化されて、この現状が理解できるようになるかもしれない。

「・・・力・・・」

「ああ？聞こえねえよ。もっとでかい声で——」

とりあえずクラウチへの処置は横に置いて、耳を塞いだ。ユートが視界の端で駆け出すのを捉える。

「バカアアア——ッ！」

超音波を辛うじて回避したカグラとは違い、ビーストのクラウチの優れた聴覚は、子犬の咆哮をともに受け止めたようだった。ざまあ。

背を向けて走り出したエミリアの背中を視線で追い、耳を押さえつづくまいった馬鹿に冷えきった一瞥をくれる。

「この馬鹿」

「お、お前ら、一体俺に何の恨みがあるってんだ……！」

それを語り出すと夜が明けるが、よろしいか？

「見付けた！見付けたぞッ！」

ようし、ユート、良くやった！

立ち上がるうとした馬鹿の肩を爪先で押しながら反転。悲鳴をBGMにボロクズ——じゃなかった、元小綺麗な袋を掲げるユートに走り寄る。

髪をかき回すように頭を撫でやると、妙に嬉しそうな顔をした。このくらいの子って、頭撫でられるの嫌いなもの多いんだけどないや、嫌がらせじゃなく、真面目に誉めてんだけど。

しかし酷い有様である。踏まれて蹴られて黒ずんでは仕方がないんだけど、どっかの髭ダルマがゴミ箱なんぞに放り込んだせいで、包装紙の模様の面影すらない。濡れてるし。これコーラかい。「ったく、それが何だってんだ」

「黙れこの虫野郎。フォローするこつちの身にもなれ」マジで、一体これをどうフォローしろってんだ。クラウチの首でも穫って行けばお怒りも醒めるだろうか。新しい何かが生まれるだろうけど。

ああ？とチンピラみたく睨み下ろす目に、ああ！？と極道のように眼光をくれる。遠巻きに佇む見物人が、一様にビクリと震えた。あんだよ、見せモンじゃねえぞこら。

「ほんとにわからないのか？」

「わっかんねエから首傾げてんだろぅが！はつきり言いもせずにゴチャゴチャと……」

殴ったるかと拳を固めたカグラの肩に、白魚の手がそつと掛けられた。小さく舌打ちをこぼして顔を背ける。背けがてら右足がクラウチの臍めがけて飛んでつたのはわざとじゃないよ。

一歩詰め寄ったウルスラの流麗な声が響き渡る。

「丁寧に包装された袋。アンタに聞かれても、誰のものか答えられなかったエミリア。そしてアンタにそれを捨てられたことでショックを受けて激昂。これだけ状況が揃えば、こういうことかなんて誰にだってわかるはずだけど？」

目を丸くした中年のオッサンなんぞ可愛くも何ともない。

じつとエミリアが去った方を注視していたユートがこちらに視線を向けるのに頷いて、共に踵を――。

「……まあそれはそれとして、カグラ、ちょっと一緒に来て貰えるかしら」

返そうとしたのだが足止めを食らった。

口は噤めたが歪んだ顔は正直である。返されたのは苦笑のみで、見逃してくれる気はないのだと悟った。

ウルスラがカグラを呼ぶ理由つつたらお仕事の話だ。当然最優先すべき事態ではあるが、目下エミリアを一人にしておくのは心配で仕方がない。施設の安否とか、周囲の被害的な意味で。

「カグラ」

口をへの字に曲げて思案するカグラの裾がちよいちよいと引つ張られた。

「大丈夫だ！ばくにまかせろ！」

その妙な自信が逆に心配なんだけど。

でもこの場ではカグラに拒否権がないのも事実。空を仰いで、そ

んな対処で大丈夫かと心に唱えると、ちまたで変な人気を博している金髪の男が大丈夫だ問題ないとどや顔で返してくれた。うむ、大丈夫だ。何かあったらルシフェルさまがきつとどうにかしてくれるだろう。人はこれを現実逃避という。

「・・・んじゃ、任せた。何かあったらコールしろよ」

コールナンバーを意気揚々と受け取ったユートは、一つ首を横に傾げて、わかった、と良い子の返事をした。翻った背中はずぐに扉に遮断されて見えなくなる。

迅速なのは素晴らしいんだが、あの傾げた首は何だったんだろうな。

「さ、心配なのはわかるけど、こっちもさっさと終わらせちゃいましょう」

さっさと歩きだしたウルスラの背を追うカグラとは逆に、クラウチはぼんやりと突っ立ったまま動かない。蹴り飛ばして再起動をさせた。

「今更気付いて後悔してんじゃねエよ、おっさん」

「・・・んなんじゃねえよ」

そっというのはな、未練たらしく泳いでる目を、前向けてから言うてみるってんだ。

引き続き子供。

嫌な予感に急かされる。歩行速度はすでに競歩の域だ。これが学校だったら、廊下はゆっくり歩けと怒られるだろう。

ウルスラの話は大したことじゃなかった。社長との顔合わせを今更果たした上で、会社の心得みたいなモンを叩き込まただけで、後はウルスラとクラウチの夫婦漫才を見せ付けられただけである。

正直、そんなんなら後にして欲しかったと思う。後日の仕事の予定は申し付けられたけれど、別に今じゃなくなつて良かっただろうに。侵入者への尋問はウルスラが引き受けてくれたものの、いまいち釈然としない。

ちらちらと向けられる視線はあつたが、口を尖らせて進むカグラに近寄る者はいなかった。

視線の中には敵意もあれば好奇心も混じっていた。懐かしい空気だ。ギルドに入つたばかりの頃がこんな感じだったかもしれない。新参の若造が気に入らない、心の狭い奴らの視線。

腕利きの先輩が面白がつて手を出していたという事実のせいもあっただろうが、今でもカグラは思うのだ。自分の子供ほどのガキに器の狭さを見せ付けて、挙げ句の果てには刃を持ち出すような馬鹿は、落とし穴に落ちて3日ほど出られなくなつて泣き喚く事態に陥れば良い、と。

実現させたときにはスカツとしたなあ。イライラするけど、顛末は良い思い出である。

その後先輩にしこたま怒られたのは、右の空気から左の空気に差し上げていたので痛くも痒くもない。

そんなことをつらつら考えながら、エミリアのいそうな場所を巡

る。

それこそ新参の自分には考え付く場所など少ないが、まさか全部が全部ハズレだとは思わなかった。シップにいるかと踏んでたんだけどなあ。

エントランスに戻ってぼんやりと立ち尽くす。

他にどっか行きそうな場所あったかしら。

「はあい、カグラ、丁度良かったヨー！」

「チエルシー。どうしたの」

聞けば、ユートに渡すものがあつたとのことらしい。渡りに船と言わんばかりにカグラに一枚のカードを押し付けて、彼らの行き先を教えるだけ教えて消えた。

手渡されたカードを確認すると、パートナーカードのようだった。燦然と存在を主張するリトルウィングの社章。要はリトルウィングにおける身分証明書である。ユート、お前勝手に社員にされてんぞ。

ちなみに面倒はカグラが見るようにとのお言葉も押し付けられた。

で、だ。

何で奴らの居場所がカグラの自室なのかな？

やられた。

扉を開けた瞬間に仕事を放棄する足を、カグラは引き留められなかった。できることなら精神にも仕事を放棄させて眠りたい。

折れた足を補助するべくドア枠に寄っ掛かって、死んだ魚の目を入り口付近に立ったユートに向ける。

「・・・呼べつたろ」

「使い方がわからない」

そういうことは先に言えよ。あの疑問はそういうことか。すぐ聞けよ。聞く一時の恥、聞かぬは一生の恥とか言うだろうが。

「ちくしょう・・・当たるなら他に当たれってんだ・・・！」

酷い有様だった。自室の面影がない。今日起きたときには、こんな凄惨な部屋ではなかったのだ。

部屋はひどく——整っていた。

きちんと置かれたインテリアは、必要な場所にしっかりと収まっている。テーブルの脇にはチェアが揃いで設置してあるし、ティーセットまでしっかり揃っている。ベッドサイドには上品なライトが添えてあった。控えめに壁際に立つ観葉植物が愛らしい。

見事な配置だった。完成された部屋だった。

唯一にして惜しまざるは、部屋を彩るメインリフォームが、全てを台無しにするカクワネ仕様であったことで。

「てめえ私に何の恨みがあるってんだーッ！」

『あ、あの、エミリアは暴りたいのを我慢したのは偉いんですよ！』

「暴れてこい、こうなると分かっているらば絶対に止めないから！気の赴くままオッサンの部屋でテクニク暴発させてくるのを私は推奨する！」

エミリアを宥めていたミカの矛先がこちらに向かう。残念ながら、そんな優しさで癒されるような小さな傷跡ではないのだ、部屋を台無しにされた恨みってのは。

「オッサンって誰だ？」

「さっき空気読めなかったヒゲダルマだよ！」

カグラに負けず劣らないメンチを切ってエミリアが振り返った。
おい、共有倉庫に仕舞い込んでおいたはずのカクワネのどでかい
ヌイグルミをベッドに仕込んでんのは何故よ。どうやって個人認^{ロック}証
開けた。

「ちよつと、今オッサンの名前出さないでくれる!？」

「やかましいわ!今のお前にブチ切れる権利があると思うな!」

「た、確かにちよつと、このリフォームは酷いかもかもしれませんが・
・・」

「ちよつと!この無惨な部屋がちよつと!?!古代文明人と現代人の
間にはふつかあーい認識の溝があるようだなあ!?!一度目でも仏
が全力で左の頬を殴りに来るレベルだぞこれッ!」

「何が酷いつてのよ!可愛らしくコーディネートしてあげたんじ
やないの!」

「ヒゲダルマの名前はオッサンなのか?」

「そうだよッ!」

良いからユートは黙ってる。タイミングずれてるし。

『だって、淡々と部屋に入って、淡々と倉庫のロックを破って、
淡々と部屋の模様替えに勤しむエミリアを真正面から止めるのは、
怖いじゃないですか・・あと、クラウチさんの名前はオッサンで
はないですよ』

「そこを何とかするのが旧文明人の実力ってモンじゃ・・いや、
オッサンかどうかはどうでも良いから」

「オッサンはクラウチなのか?」

「・・・だから、お前は黙ってる——って」

あん?

聞き捨てならない言葉に勢いが止まる。きょとんと女3人で視線
をあわせた。

発言を反芻するが、カグラもエミリアも一言もクラウチの名前を

出してない。

念のため遡って記憶を辿れども、ウルスラもやはり名前を呼んではいなかった。それ以前に聞いてたとして、今の会話とクラウドを関連付けできる脳をユートが保持しているとは思えない。

ということとは。

「・・・ちよつと、見えないんじゃないの？」

『そのはずなのですが・・・』

視線は、明らかにヒラヒラと振られる見えざる手についていく。何かの気配がするなあ、という曖昧な視線ではなく、何してるんだろつという興味の視線である。

うむ、言葉も聞こえている上、間違いなく見えている。

「そういえば私がミカのこと見えるのって、ミカの不思議力で構成されてる身体のおかげなの？」

『え？あ、はい。まだ完全には独立していないので、できればあまり長い間、私と・・・いえ、エミリアと離れるのは止めた方が無難だと思います』

「ちよつとそこ、現実逃避しない！」

だって言及するのめんどくさいじゃない。

いいじゃん、ユートが会話に参加できるんだよって事実だけで。きつと野生の能力が何かだよ。

「おねーさん、見えないひとなのか？ぼくは見えるぞ」

ほらわかってない。理由を追求しようと開きかけたエミリアの口が、徐々に閉じられていった。

見える、見えるぞ。急速に萎んでいく直接的な探求手段への意気込みが。

「おねーさん、なんだか大地神さまみたいだな」

にこにこ笑いながらユートがマイペースに言った。こちらの戸

惑いなど気にも留めない凶太さはカーシュ族特有である。良く言えば大らかとも言うが。

「大地神さま？」

「うん、赤い、これくらいの、うすつぺらいものに宿ってるんだ」
あ、いや、聞きたくない。下敷きの話は聞きたくない。現実を直視したくない。

おもむろに耳を塞ぐカグラに、怪訝な目が向けられた。残念だがそんな不審に負けるカグラではない。

なおも亀のように首を竦め続ける内、会話の筋は線路に戻ったようだった。

『レッドタブレット・・・でしょうか』

「レッドタブレットって、アレよね。こないだ言ってた、マガハラへの鍵」

『正確には、旧文明人によって開発された高純度のプログラム記憶媒体なのです。相当な容量を保有していますから、恐らくは人格を一つ抱えているのではないかと』

「ミラージュプラストを教えてくれたのも、大地神さまだぞ！」
なるほど、大地神ってのは旧文明人か。まさかそいつも、遠い未来に信仰を受けるとは思わなかったろうに。

そいつが乗っ取り賛成派か反対派かは知るよしもないが、とりあえず人の身分から現人神かみさまにまで昇格してるんだから、満足して成仏しろよ。余計なこと考えずに。ミカに似てるってんなら尚更。

「さっきの奴らが来たとき」

あ、下敷きの話終わった？

「大地神さまを近くに感じた。奪ったやつが近くにいたんだ」
終わってないらしい。いい加減諦めて渋々耳から手を離れた。どうせ性能の良い自分のお耳は、ないないしても音声拾っちゃうんだし。

しかし何となく察してはいたけど、下敷き——こと、レッドタレットってのは想像以上に凄いシロモノだったらしい。

そういえば、確認を取るのを忘れていたんだが。

「鍵つてのはさ・・・アレが奪われたイコール、マガハラに繋がっちゃうってことなワケか？」

『いいえ。私も詳しくはありませんが、他にもいくらかの要因が必要であつたはずです』

そりゃ良かった。じゃあ、亜空間実験云々の他にもある程度の猶予はあるわけだ。

それから。

「狙われてるのはミカだよな」

『・・・ごめんなさい・・・』

「いや、責めてるんじゃない。単なる確認だつて」

うなだれた美貌を上げさせると、微かに目が潤んでいた。うーん、自責の人だな。

それに比べて弾かれたようにこちらを向くエミリアの何と鈍感なことよ。

「え、あれ、やっぱり狙われてたのあたしだったの？ 偶々じゃないって!？」

「エミリアより先に戦闘能力のない事務員のお姉さんはいたよ。子供だからって理由だけで、ああも迅速に包囲できるとは思えないなあ」

「ギラギラした視線、エミリアに向いてたぞ！」

丸く見開かれた目によやく宿る明確な恐怖心。正直、怒りに失念してるだけなのかなと思ってたんだが、本当に分かってなかったとは。

カグラの服の裾を掴んだ小さな手は微かに震えていた。無理もない。命を狙われるってのは、こんな年齢の子供が耐えられるほど生

温いプレッシャーではないのだ。

「そういうわけだから、警戒しなさい」

「う・・・」

少なくとも今回のような無防備な行動は慎むように。傍にいれば対処できることが、本人任せの状態になってしまふ。言うまでもなく、誠に危険である。

わかったかと念を押すと、眼下の頭が小さく揺れた。

あと人事のようにしてるけど、ユート、お前もだぞ。ていうか、個人的にはユートの方が暴走率が高そうで不安。縄でも括り付けとこうかしら。

「あの、さ」

「うん？」

じつと見上げる瞳に視線を合わせた。少し言い淀んだ様子で口を開いて、閉じて、決意したようにまた開く。

「あたし、強くなりたい。あんたに守られるばかりって、その・・・やだ、し」

「ごによごによと何事か口ごもり、最終的に再度地に落ちた視線に首を傾げた。今更妙な殊勝さ謙虚さを見せられても。」

まあ、エミリアの中で何か決意があっただろうし、カグラが口出しすることではない。

とりあえず強くなりたいってことは了承した。前言通り鍛え上げてやるから首を洗っておくと良い。

「ぼくもだ！大地神さまをとりもどせるくらい強くならないと！」

お前は勝手にやれ。生憎カグラはチエルシーも示唆したように、2人も3人も子供の面倒をみられるほど心は広くないのだ。

だからこつち見るな。勝手な期待を寄せるな。

「よろしくね、カグラ！」

「よし、修行いくぞー！」

張り切って部屋から出ていくのは良いが、自分は追わないからな。
2人で行けよ。

『ふふ、微笑ましい。子供は元気なのが一番です』

「良いよね、実害被らない人は」

『頑張って下さいね！』

ミカって意外と良い性格してるよね。満面の笑顔がこのときばかりは心から憎らしい。

ベッコベコにエミリア凹ませて慰め役擦り付けてあげるから、ちよっと待ってろよ。

服装の話

ばちばちとコンソールを叩いてミッションを表示する。

画面に並ぶ依頼の数々を難易度順に区分け。搜索系を選択。アソート。表示を高レベル順に再アソート。しばらくにらめっこしていたが、今の身体の調子ではAランクは危ういかもしいのでBランクまで辿って検索し直す。Cまで落とす必要はさすがにないよな過去を考えるとこれでも屈辱である。

今のレベルってどんなもんなんだろうなあ。

「カグラさあ、もっと、傭兵！って感じの服、持ってないの？」
「あ？」

唐突に向けられた疑問に、画面を送る手を止めて振り返った。

背後からディスプレイを覗いているのは気付いていたが、突然何を言い出すの。

「そういえばカグラの服、あんまり傭兵っぽくないな」
「だよねえ。どう見ても普段着って感じ」

「普段着って感じつつうか、実際に普段着なんだよ」
横に並んだコートも不思議そうな顔で声を上げる。二人掛かりのイチャモンに眉を潜めて、己の服装を鑑みた。

どうってことのない服装だと思っよ。赤色のパーカーと、細身のジーンズ。特筆すべき点など何一つない、誰に恥じることもない普段着である。ブーツに鉄板が内蔵されているのは単なる乙女の嗜みなので、別段突っ込まれる筋合いはないし。

「傭兵っぽい服・・・ていうか、戦う人っぽい服ないの？」

「分類がいまいちわからんが、アーミーパンツくらいならあるよ」
「ぼくみたいなのはいいの？」

「お前のそれ民族衣装だろ。うちのは、ものすごく動きにくい
の。あんなん着て戦えるか」

まあ、原型留めてれば、という前提ではあるが。

そういえばスタイルシヨップで似たようなデザインを見かけた気が
する。気はするけど、あれもエミリアで言う「戦う人っぽい」服
ではないだろうなあ。フォーヌならアリかもしれないけど。ハンタ
ーはないわ。

ふうん、と口を尖らせる少女に胡乱な目を向けて、付き合ってら
れないので椅子を回し、再びコンソールに向き直った。

しかし残念ながら話は打ち切られなかったようだった。エミリア
は背中にくっ付いてカグラの肩を陣取ったし、ユートはユートで横
の椅子を領地とする。

あんね、こちらら忙しいのよ？ただでさえ厄介事が両手を広げて
抱き着いてくるのを容認せにやなんのに、合間を縫って両親探し
に出掛ける必要があるの。

「その格好だと、あまり強そうに見えない」

「見た目なんぞ飾りですよ。チエルシー見ろ」

「チエルシー強いのか？」

「……うん」

その問いには曖昧を答えとさせて頂こう。

最近ふと思い出した衝撃の事実である。今でこそ甘い喋りが男の
股間に力を与えるお色気お姉ちゃんことチエルシーだが、過去の彼
女は——いや、止めておこう。

回想であれ、ばれたら怖い。世界を平和に保つには、人類の恒久
の努力というものが不可欠なのである。

で。

「・・・つまり、何が言いたいのか、お前ら」

「その格好だと、あまり強そうに見えない！」

「もつと強そうな格好しようよ！ガチャツとした鎧とか！」

「重い。意味ない」

何のためのシールドラインだと思っているのか。

今更言うまでもない常識だが、グラール太陽系において、よくある漫画やゲームのような防御力重視の重装備は過去の遺物と化している。

それというのも、全てはフォトン様のおかげである。グラール教信者っぽく言えば、星霊様のご加護。

準万能エネルギーたるフォトンを組み込んだ防御システムをシールドラインと呼称する。どんな服装であつてもフルアーマーじみた装甲を纏うことができる、開発当時は民間人から傭兵まで、どこまでも話題になりまくつたらしいシロモノだ。なんせ服のデザインを損なわずに装甲を得られるのだから。

余さず恩恵受けてるのが、それこそチェルシーだよ。セクシーチャイナには防御なんぞあるはずもなく、多種多様の破壊力しか存在しないんだから。攻撃は最大の防御って見方もあるけど。

「だって、カグラくやしくないのか？！ばかにされてるんだぞ！」

「あ、ちよつと、ユート！」

「うおおおい、コンソール全力で叩くとかお前が馬鹿かッ！」

あああああ、折角ヒットした良物件が！

得体の知れないデータに飛ばされた。

慌てて再検索を掛けたが、ロストした数十秒の間に目を付けていた依頼は受注済コーナーに放り込まれている。誰だ畜生。ハイエナめ！

がつくりと肩を落としたカグラを苛立ち露わに見るユートだが、こちらこそ惜しめない敵意を向けてやりたかった。

敵意と言わず、いつその無念を思いっ切りぶつけてやりたい。プリンと偽って郷土料理の茶碗蒸し出してがっかりさせてやりたい。大人げ？鼻かんで捨てたわ。

「で、ええと、何の恨みの話だっけ？」

「カグラ当てつけがましい」

「おまえ、強くもないのに鼻履されてるって噂されてるんだ！どこかで恨みでもかったのか！？」

ほう、そういう話にシフトするか。良い度胸だ。

しかし、鼻履ってのは何の話だ。まさかいらん仕事任されまくってるのを鼻履と称しているんじゃないかあるまいな。鼻履ってのはてつきり良い目を見えることを言うんだと思ってたんだが、違うのか。

なお、人間生きていれば一つや二つは恨みを買うもんだと思っているので、原因について深く思いを馳せることはすまい。決して心当たりが多いとか、そういうんじゃないよ。

「・・・こないだカグラ、また男扱いした人殴り倒してなかったっけ？」

「当然の処置だ」
ないったら。

じつとりとしたエミリアの視線から自然な動きで目を逸らす。やましいんじゃない。ちょっとピンクピンクしいエミリアを見ているのが億劫になっただけだ。

で、ええと、どういう話だっけ。

「ほんと強いのに、くやしくないのか！？」

ああ、そうそう。そういう話だった。思い出さなくて良かったのに、何を一直線に話を戻してくれやがるのか、このイノシシ少年は。

一言で言うなら、悔しくない。

「えええー、何でよ！あたし悔しいッ！」

何でエミリアが悔しい。

耳元でキンと響いた声に一瞬意識が遠のいた。もう一度殺す気が、こいつ。悪魔でも2回しか生まれなんだから、2度生まれたカグラが人間じゃないと仮定して悪魔だと想定しても、もう生き返る術を持たないというのに。

抗議を交えて横目で睨み付けたエミリアの顔は本当に悔しそうだった。同じく、真正面に陣取ってコンソールとカグラの逢瀬を邪魔するユートも口をへの字に曲げている。

これだからお子様つてのは面倒くさい。ご機嫌取りは毎度のエミリアへの対応を見て分かる通り、あんまり得意ではないのだ。いつもいつも何となく外すので、そういうのはトニオとかリイナとかに任せておきたいんだが。

んんー、とやる気のない声を上げて、掛けるべき言葉を検索する。「そもそも、見た目で強さ誇示したって良いことないよ。腕に覚えのある奴らがバトル仕掛けてきたり、面倒背負った奴が荷物押し付けてきたりするだけで」

しまった、ユートの目が輝いた。

「強くもないのに覇^{ツシヨ}肩つてのは、あれだろ、身の丈に合わない好待遇受けてるって話だろ？」

確認に顔を見合わせた二人が、しばし首を傾げた後に頷いた。たぶん、という心許ない添え言葉と共に。

「好待遇つてところからして誤解なんだけど、こっちは押し付けられた依頼はしっかり達成してんだよ。身の丈合ってたんだ。その上で役者が不足してるってほざくんなら、そいつが節穴なの。見る目

ないの。そいつこそ結果からすら力量測れない実力不足の馬鹿なの」

「うーん」

「・・・うーん」

「馬鹿に馬鹿にされたって、あー、馬鹿がまた馬鹿言ってるよって程度にしか思わん」

「・・・うん」

「うーん」

エミリアは首を傾げながらも一応納得したのに、まだ駄目なのかこの猪突猛進 V e r 男子。

言ってみろ、何が不満だ。

「ばかにばかにされたら、くやしい」

「あー、うん、確かに！」

「もー、ほんつとめんどくせえな！蒸し返すな！」

折角納得してたエミリアまで戻っちまっただろうが！

「お前らに馬鹿にされても私は全く悔しくない！心の広さの問題だろ！」

「ちよつと、バカにしてんの！？」

「してないように思っんなら想像を絶する馬鹿だ」

後ろから全力で首を絞めようとしてくる末恐ろしい少女の手を掴み、前に引き込んで膝の上に落つことす。

暴れる四肢を巧みに押さえ付ける技術は、主にペット搜索の依頼で非常に役に立つのである。ブーマ飼ってる主婦とかマジでアホかと思った。飼うのは百歩譲って見ないフリするが、逃がすな。嚴重に繋いどけ。

で、ユートは相変わらず何を唸ってたんだ。

「でも、やっぱりぼくはくやしい」

「私が馬鹿にされんのが？」

「だって、カグラはぼくに勝ったんだ。カグラの実力を認めないのなら、絶対ぼくもばかにされてる」

「ユートは仕方ないだろ」

なんせ年少さんなのだ。年若いっただけでなめられる世の中、甘んじて受け止めるべきだろう。

まあ、悔しがる気持ちはわかる。

カグラだって尻の青さが痛々しい年頃には逐一悔しがってもいたのだ。悔しいついでにトラップ抱えて勝負申し込んでフルボッコにしていたのは良い思い出。

それなりに経験積みばいつか悟れるさ。脳の足りないお馬鹿さんを鼻で笑ってあしらう快感を。

「悔しかつたら見返してやるこつたな。依頼こなしで場数踏んだりや、いくら視力が悪くつたってその内嫌でも現実見るだろ」

「・・・わかった」

うむ、わかれば良い。満足を込めて一つ頷くと、三度コンソールに向き直った。

パネルを操作して再検索。 搜索系依頼フォルダへ突き進む――
直前。

「じゃあ、カグラ、これいこう！」

「ちよ、あたし大型なんて行ったことない！こつちがいい！」

横から操作をかつさらわれて椅子が横転した。膝の上のエミリアが強力なバネをもってコンソールに飛びかかる。慌てて離脱したカグラの耳に届く、椅子と床が接吻を交わす音。

ぎゃあぎゃあと騒ぐ二人を次に視界に入れたときには、すでに画面には「受注済み」の4文字が燦々と輝いていた。

おいふざけんな、お前らの実力でAランクラグナス行けると思っ
てんのか。

沸き上がる怒りと嗚咽の衝動は似ている。どちらも堪え難いとい
う意味で。

「クエスト中は背後に気を付けろよお前ら・・・!」

徹底的にだ。徹底的に教育し直してやる。

4 - 1 絡む糸を解きほぐす、

「ちよつとカグラ、聞いてよ——つて」

怒声と共に、相変わらずお伺いをたてずに入室するエミリア。

あの喧嘩から一週間が経過したが、彼女は未だにクラウチへの怒りを毎日毎日、飽きもせずにかグラの部屋で発散させている。迷惑な話である。そういうのは他人事だから楽しいんであって、自分の不幸になつたら蜜の味はしないのだ。

「エミリアさあ・・・いい加減、おっさんに直訴したら？」

「いやそれよりも、何よこのトラップ！入れないじゃないッ！」

トラップ？何のことかね。閉じた扉に貼り付いたまま動けないお前の前にあるのは、ただの身体測定機だが。

「踏んでも支障はないよ」

「MPが超減るでしょー！？」

体重知られるのつてそんなに恐ろしいことかね。

勿論言つまでもなくエミリア避けの踏み絵、ならぬ踏み板である。効果の程はチエルシーで実証済みだ。うっかり踏んじやつた彼女にワインボトルの先を向けられて震える羽目になつたのは不幸なことだった。

何故だと思う。あのワインボトル、飛んでいくコルク栓で人体の中でも最も強固な頭蓋骨を貫通できる威力を持つんだよ。

ていうか、チエルシーどうせ体重一定なんじゃないの。キャストだし。怖くないだろあんな機械。

「早く撤去してよ！」

「お百度参り今日で断念するなら考えてやるよ」

「うつつうつつ」

無理なのか。そんな涙目になつて睨むほどなのに。

「ねー、早く撤去——」

「ん、すまん、通信入った」

わざとじゃないしカグラのせいではないんだから、そんな射殺するような視線を向けるのは止めたまえ。つま先立ちのまま入り口で足を震わせるエミリアに背を向けて通信機をオンに切り替える。

後悔した。心の防犯上、通信先をちゃんと確かめてから応じるべきであるとカグラは思う。

『おう、カグラ——』

「今そっち行くから待ってろ」

対面を躊躇うほどの濃密な髭面から発せられる声を、即座にぶちぎった。こちらの声が届いたかどうかは重要ではない。

今は、そう、背後の誰かさんを刺激するべきではないという話が重要だ。

「ようし、エミリア、今すぐに部屋を出てユートと遊んでこい！」

「ちよ、何よその草原に犬を放つような対応！もっと腫れ物に触るように扱いなさいってのッ！」

その扱いで満足なのかお前。それで良いと言うならばこちらはそれでも良いが。

「エミリア。私今からその……『お』から始まる名前の生物と喋りに行くかもしれないんだけど……エミリアはどうする？私の部屋から早急に飛び出てユートと合流して気晴らしに宇宙に遊びに行ってくるの良いんじゃないかと思うんだけど」

「……あのさ。結局言ってること同じだし、それがあんたの精一杯の腫れ物に触る扱いなんだとしたら、多分致命的に間違ってると思うんだけど」

うるせえなあ。そもそも腫れ物は全力でスルーする派の人間なんだから文句言うな。言ってること同じなのに関して、そういうふうに誘導したいんだから当たり前だろ。

「あと、オッサンは名前じゃないし」
「そうでしたっけ、ふふ」

とにかく部屋に居座られてまた改造されたらかなわんで、操作パネルからエミリアの継り付いているドアをスライドさせる。悲鳴と共に廊下へ消えるエミリアに続き部屋を出て、厳重にロックを掛けた。

相変わらずカグラの部屋は目に優しい色をしたままなのだが、完璧であった初期配置が段々変な方向にシフトしてきているのだ。テーブルがいつの間にか巨大ケーキになってたりさ。使えねエだろそれ。上に何か置くと、クリームの中に沈んで消えるんだぞその家具。ベッタベタなるし。

なお、遅ればせながらドアの向こうからは機械音が聞こえてきていた。
172R pの58K v。鍛えてるし、まあこんなもんじゃないかね。

髭からは、まず通信ぶった切ったことへの説教を食らった。
誰のせいだと思っていやがる。てめえのせいで食らった散々な被害を思えば些事些末。マリモに生まれ変わる勢いで反省しろと説教仕返したところ、何やら相当凹んだようだった。ざまあ。

で、肝心の内容だが、どうやらインヘルト社の亜空間発生実験の警備依頼があったらしい。実験終了まで、装置を原生生物から守り通せとのこと。

「・・・何でうちにそんなん来るんだよ」

「前回の依頼達成が効いたんだろ？良いことじゃねえか」

声を潜めて問いかけたカグラに、クラウチはお気楽な声を上げた。

亜空間発生、あくまでも実験とはいえ、スポンサーへの誇示も目的なので規模はそれなりに大きい。

聞けば、インヘルト社主導で、グラール教団の協力を得て、ニューデイズの教団研究施設を利用し、同盟軍、ガーディアンズ、その他諸々の民間軍事会社による大々的な警備が決定されているという。もうこの時点で民間軍事会社に依頼が行くのがそもそも疑問。教団、同盟軍、ガーディアンズ。それだけあれば十分じゃない。うち

リトルウィング

いらんじゃね。

「んー・・・」

「何だよ、おいしい依頼だろ。何か不満か」

「いや、不満はないんだけどさあ」

何だろう。何か引かかる。こないだからずっとのに引かかっている小骨が、ここに来て存在を主張し始めた。

妙に嫌な予感がする。何が嫌なんだろうと考えてもどうもピンとこない。引っかかりの発端は何だっただろう。

嫌な予感は道ですれ違う他人のように頻繁に出会う存在だが、最近友人ランクにまで昇格した野郎が一人いた気がする。友人ってのは一々友人宣言をしなくともなっちまうモンなので、どいつがどうだかよくわからんのだ。

「まあ、何が気掛かりかは知らねえが、とにかく上等の依頼だ。四の五の言わず頼むぜ」

「・・・了解」

確かにうだうだ言っているも仕方がないので渋々席を立った。エミリア置いていこうかなあ、とどうにもモヤモヤするまま考える。

歩き出そうとした矢先。

「そうだ、あの小僧も連れてけ。置いてつてもうるせえしな」
嫌な提案を耳にして苦虫を潰した。

「ええー、トニオかりイナ寄越せよ。一人でイノシシ2匹の面倒
見ろってか？無茶言うな」

「だーいじょうぶ、大丈夫だ。お前ならきつとできる！」

ガムテープで毛抜き殺してやろうかこの毛だるま。無責任に激励
する能天気面に無性に神経を逆撫でされつつ、しかしクラウドがい
なくなるとエミリアの暴走が予測されるので、堪忍袋の緒をハンダ
付けすることで耐える。

聞こえる程度に舌打ちを残し、今度こそきびすを返——そうと
して。

「あー、おい」

「んだよ！」

用件があるなら一回で済ませろ。

振り返ると、何ともバツの悪そうな顔で頭を掻くクラウドの姿。

口を開くまでもなくピンときた。

「あーつとだな・・・その・・・エミリ」

「自分で見てこい。何で私がお前らの橋渡しエンジェル役務めに
やなんのだ」

「エンジェルでお前、図々しい」

「あんな酷い仕打ちを受けてなおクラウドへの殺意を抑え続ける
私。天使のようだろうが・・・私の部屋見てこい。私への同情と
自らの行いへの反省が溢れるから」

僅かに視線を落として後半を呟くカグラの視界の端で、盛大に顔
を引きつらせる面が見えた。

「・・・そんなに」

「多分、お前が考えてるのは違う方向で酷い」

自分にはいつあの部屋の模様替えが許されるんだろうな。エミリアの怒りが冷めない間の変更は火に油を注ぐ結果になりかねないのだ。涙を飲んで耐え続けるしかないのだ。

ああー、イライラしてきた。あの緑一面の部屋で迎えられる自分を思い出す。何故自分一人がこんな横暴に耐えねばなんのか。今からクラウチの部屋に侵入して、同じデザインにチェンジしてきてやろうかな。

じわりと漏れる黒い思惑に、クラウチは顔を歪ませたようだった。歪みを涙に変えるところを想像して低く笑う。

と、パタパタと走り回る華奢な姿が目映る。

「チエルシー、忙しそうだね」

声を掛けると、綺麗にロールした髪を靡かせながら振り返り、満面の笑みで駆け寄ってきた。

「ハイ、カグラ。忙しいケド、今は仕事とは違うのヨー。エミリアのパートナーカード見てナイ？」

首を傾げてデータを開く。端末を一新する前に比べて激減した名刺からは、すぐにエミリアを引き出せた。

「へえ、エミリアってブレイバーだったんだ。てつきりフォースだと思ってた」

「違うヨー！見て欲しいの、そこじゃないよ！」

だって初めて見るんだもの。些細なことが新発見になるのは仕方がないじゃない。

ふらふらと視線をさまよわせると、ようやく言いたいことが理解できた。ふうん、と鼻を鳴らして画面を切り替える。

そういうところで忙しくなれちゃうチエルシーの優しさに感動した。幹事ってのは大変だよな。

「ふうんって、それダケ？」

「どんなリアクション求められてるのかわからんが・・・私、良

いお店知ってるよ。予約しとこうか？」

「・・・ワオ！是非是非、お願いネッ！」

公開した端末情報を覗き込んだチエルシーの顔に浮かぶ満面の笑み。

了解、と請け負って、先にメールだけ先方に送っておいた。友人
つてのは思わぬところで役立つもんである。

返事はすぐにきた。大雑把な基本料金と、届け先を指定しろとの
お言葉。

「——というわけで、クラウチにツケとくから、よろしく」

「シャチヨサン、ありがとねー」

チエルシーから適当にリクエストを聞いて、大雑把な形と共に再
メール。どうせまた細部については几帳面な提案が送られてくるだ
ろうし、こちらから言うまでもあるまい。

データの終了と共にクラウチに水を向ける。

「・・・はあ！？待て待て待て、何でそこで俺に押し付けんだお
前ら！」

「シャチヨさんに拒否権はないヨ！」

猛烈な勢いで水を押し返そうとするクラウチだが、水つてのはそ
う簡単に抑えられるものじゃないと心に刻むが良い。

「俺は俺でだな・・・あー・・・カグラ！お前ならわかるだろッ
！」

チエルシーを説得することを早々に諦めてこちらを向いた視線に、
カグラは琥珀の瞳を細めてそつと微笑んだ。

コートのポケットを押さえる手。ちらりと覗いた固形物。

分かっているとも、クラウチがこー一週間で必死こいていた事実
が何であるかなど。はつきり口に出すのが気恥ずかしいのを知って
いる。毎朝鏡の前で、乙女のごとくゆうに10分は身だしなみに逡
巡しているのを知っているとも。うっかりその気持ち悪い現場に居合

わせた身だからな。

それを考慮した上で。

「許容しない。絶対に許さない。快く受け入れろ」

清々しい朝を汚す部屋の元凶をあつさりと許せるほど、カゲラの心は広くないのである。

「おつま・・・上司^{おれ}を何だと・・・」

「ウエンディゴ」

途端に癩癧を炸裂し始めた毛の権化に背を向け、チェルシーに手を振って部屋を後にした。

4 - 2 標を得、

打ち上げられた、巨大な鏃のような装置がニューデイズの上空遙かで傘を開く。八つの支点を元にして、青い輪郭が空に展開された。ゆらゆらと揺れる淡い燐光はフォトン粒子の残骸だろうか。

やがて臍気だった輪郭が美しい真円を形取り安定する。

「あれがゲートかー」

「いきなりマガハラ、とかないよね？」

『そうですね、今のところは・・・』

そりゃ良かった。もしこのまま繋がるとか言われたら、一転テロリストに変貌せざるを得ない。

まあ変貌したからといって装置の破壊に成功する可能性は豆腐の角に頭ぶつけて死亡する確率ほどもないわけだが。なんせ現在、ここは超一流ガードマンのバーゲンセール会場なわけだし。

「つつか、そもそも実用段階には達してないらしいね。スポンサーへのパフォーマンズってことは、無意味に派手な演出にしてる部分もあるんじゃない？」

「あー、言われてみれば、安定するまでのフォトン出力なんかすっごい無駄だったよね。エネルギー効率悪いからバッチバチしてんの。普通ならあんな風に光が弾けたりしないんだけどさ。あれ、あの程度はわざとだったのかも。一見派手だしさ」

「エネルギー云々ってのはわからんけど」

「・・・んーつと、ね」

空から逸れた視線がカグラを見遣る。

「開発中の武器とか、見たことある？」

「使い古したの蛍光灯みたいになってるようなのならある」

何回も起動しないとまともに動かない武器とか、どう使えっただと思った記憶があった。爆安で良いと言われても、そんなんだのスクラップである。

試しに手持ちのシールドにぶつけてみたら見るも無惨な真つ二つ。ランクにザコ扱いされるってカス過ぎるだろ。

「フォトンってさ、常に流動してないとエネルギー生まないの。だから構造とかプログラムとか、そういうので引っかかりが出来る流れが停滞しちゃって、折角のフォトンが無駄無駄アになっちゃうわけよ。で、そのフォトンってのは、武器なんかに対しての流れる量が多すぎてもダメだし、少なすぎてもダメなわけ。カグラが見たのは引っかかってる上にフォトン量が少なかったのね。一発で付かないってことは、フォトンが起動スイッチにしっかり伝わってないってことだから」

おい、ユート、寝るな。一応仕事なんだから。

立ったまま肩にもたれ掛かってきた少年をさりげなく横にずらしてやると、棒倒しのように真つ直ぐ地面に向かって行った。鈍い音を立てて世界と接吻を交わす様子が無感動に眺める。まさか起きないとは。

「で、量が多い状態だと、無駄なエネルギーがバーストしちゃって、ああいう無駄な光を生むの。一番良いのは勿論発動と同時に綺麗に流動して均一になった状態——ちょっと、聞いてんの！？折角あたしがサルでも分かる優しい言語で説明してるのに！」

「サルはわからんだろ。聞いてる聞いてる。上手く調整できてないけど一般人にはわからんだろうし、どうせだからもっとキラキラにして派手にしちまおうぜってことだろ」

「・・・まあ、そうなんだけど」

理解してるだろ。何が不満だ。

ぶすくれたエミリアを放置して、地面にうずくまるように本格的な就寝体勢に入ったユートを蹴り起こす。

余所のチームいないから対外的には別に良いんだけど、一人だけサボってるとか腹が立つよね。自分だってできることなら寝たい。

「起きろー。おい、起きろ。起きろクソガキ。おい」

しょうもないほどの耐久力である。5回目の踏み付けも効果が見られなかったので、仕方なしに尖った耳に手を伸ばし。

「・・・あん？何、クラウチ」

「い、いたたたたた！やめるカグラ、ちぎれる！耳がちぎれるッ！」

突如けたたましく声を上げた通信機に眉を顰めた。定期連絡の間にはまだ早い。

嫌な予感をひしひしと背負いながらコールに応えると、空中に現れるホログラム製の髭面。切羽詰まった眼光は真っ直ぐにカグラを捕らえる。

「・・・どこ行けって」

『ワリイな。グラール教団の研究施設に原生生物が進入した。実験装置がヤバイらしい』

言って、クラウチは地図を広げた。

明滅する赤い点が2つ。距離は思っていたより離れている。

「他のチームは。もっと近いのいるんじゃないの？」

普通に考えて、これだけの距離があるカグラたちを移動させるのはおかしい。手勢は腐るほどいたはずなのだ。まして研究所と言えば重要施設。少なくとも、2チームは挟んでおかしくないだけの距離がある。

『他でも問題があったみたいでな、今はお前らが一番近いんだよ』
焦った口調に、渋々頷いた。問答するだけの余裕はないらしい。

警備依頼を受けたときと同じようなモヤの解消を後回しにする変わりに。

「・・・他の問題とやら、資料だけ集めといってくれ。ちょっと気になる」

『ん？ああ、まあ良いけどよ。警備の粗探しか？』

「似たようなもんだ」

預けた仕事は容易に受け入れられた。どうもキナ臭く感じる事態が、自分の杞憂であれば良いんだが。

一つ頷いて了承を示す。こちらも頷き返したクラウチは、しかし妙に複雑そうな顔を見せた。

『頼んだ、カグラ』

あれ、自分だけ？

「ちよつと！」

疑問に思った後、すぐ納得した。カグラは。声を上げたエミリアと、あからさまに不満そうな顔を晒すユートはまた別である。

「何でカグラにだけ言うのよ。あたしたちは無視？」

『やたら危険なんだよ。今までとはレベルが違う。お前らには荷が重い』

単純に経験の問題だろう。カグラだって身体が馴染んでいない今の状況で、満足に結果を出せる自信はない。クラウチの知ったことではないだろうが。

しかしそれでも、カグラは人より危険についてある程度予測が付くのだ。実践経験に基づく反射である。

エミリアはもとより、ユートもそこまで経験を積んではないだろう。年齢もだが、実際戦った感覚を思うに。「実践形式の訓練」と「実践」には天と地ほどの格差がある。年齢の割に反応が良いのは認めるが、ユートが培っているのは恐らく前者だ。

そうか、こいつら鍛え上げるなら、単身で巨大生物の鼻先に押し出すくらいはしないといかんのか。

『だからな、お前等はそこで待機するか、一旦戻って』

「ぼくだって戦えるぞ！ばかにするなッ！」

「そうよ！あたしたちだって——」

説得の言葉を連ねるクラウチに、喧々囂々と噛み付き続ける子犬2匹。1分様子を見て結論が出た。

「まあ、戦えるかどうかは別として、だ」

息切れすらし始めた未熟者の肩に手を置くと、睨み付けるような眼光がカグラを射抜く。こっち牽制しても仕方がなかるうよ。

言つとくが、自分は機嫌損ねたら公私の分別区域を曖昧に混ぜ返してバレないように私優先にする人間だぞ。自慢じゃないけど。

「急ぎじゃないの？」

お前、これ説得できる自信あんの？ということである。

『・・・怪我せず帰って来い』

「え、なに？」

「やった！よし、いくぞ！」

即折れた。心の弱い奴だな、クラウチ。

ちなみに颯爽と走り出した2人だが、引率に従わないようなら問答無用でそこらに縛り付けて置いていくから、至急ブレーキを掛ける。

「・・・おう・・・」

施設は非常に遠かった。釈然としなさすぎるからもう一度言おう。

他にチームもつといただろ。

それはともかく、ふと見付けた痕跡にうんざりとして声を上げる。カグラの足下でしゃがみ込んで、アリの行列を見るように地面を凝視するユートを蹴り転がしたくなるほど気が重くなった。

「どしたの、二人とも」

陽気に構えるエミリアのやる気を殺ぐこともないだろう。何でもないと振った右手は——ツンツン頭のクソガキに台無しにされた。

「すごい数の足跡だ！なあ、これ、なんの足跡かわかるか！？」
瞳を輝かせるのを止める。絶対にそういう楽しい場面じゃないから。

偶然を装いつつ膝を少年の後ろ頭にぶつけて、同じくしゃがみ込む。溜め息がこぼれるのは仕方がないよね。エミリアのテンションが重力に負け始めてるのがありありとわかるんだもん。

よろよろした足取りで寄ってきたエミリアがへたり込むのを横目で見守った。座ってじつと地面を見る3人。こういう光景だこれ。

「・・・なんか・・・いんの・・・？」

正確にはいたのである。

答えずにちらつと視線を研究所方面に投げると、意図をちゃんとくみ取った少女は盛大に顔を引きつらせた。

「か、数！数は！？」

「私、10以上は数えらんない子だから」

「子とか図々しい！」

やかましい。テンパってれば暴言吐いても良いってわけじゃないぞ。

後ろ頭を弱めに叩くと、バランスを崩して盛大にすっ転ぶ。バランス

感のない子だな。でも仕方ないね。この子頭に重心寄ってそうだも

んね。

なあなあと隣からかかる声がうるさいので、渋々口を開いた。

「ウバクラダ15匹前後がマラソン大会開催中です」

「にじゅ・・・！」

「ウバクラダなのか？数はわかるけど、種類はどうしてわかるんだ？」

「蹄の形と大きさ、土の固さによる沈み具合だなー」

ユートは勉強熱心に見えて、実はあんまり覚える気はないようである。ふうん、と首を傾げる仕草に熱がない。

数だけ見えてれば、あとは大型か小型かだけわかれば、個人的にはそれで良いんじゃないかなろうかとカグラは思う。下手に目標が見えると、目がそればっかり探すようになるのだ。それこそ経験積んではば自動的にわかるようになるし、覚える必要はないんじゃないかな。

「え、あの、15匹つてのは、問題じゃないの？」

気は乗らないけど、別に問題ってほどでは。

だって、皆大好きウバクラダだ。基本攻撃は突進である。シールドの作りが甘かった昔なら話は別だが、巨体を生かした突進がガードできるようになってからはあんまり怖くない。研究所つてのはそうそう真っ直ぐな作りになってはいないのだ。こないだのインヘルト本社然り。

つまり施設内に入ってたというのなら、壁にぶち当たりまくってることだろう。それなら数が多いのはむしろ行幸という可能性もある。ぶち当たって止まった個体に玉突き事故とかな。

「施設の壁突き抜ける前には行かないといけないけどね」

「な、なあんだ！じゃあそんな、オッサンが心配するような事態じゃ」

まあ、シールドにジャストガードが実装されるまでは物凄い怖い

輩だったんだけどね。何度骨を折られたことか。一部傭兵の心に常駐するマスコットキャラ——もとい、トラウマ対象である。未だに常駐してる奴多いよ。

「でも、他にも色々足跡があるぞ？」

だから何でお前はそういらんことを。折角回復したエミリアの顔色が、青空みたいに爽やかになるだろうが。

「……………そういう足跡って、簡単に見付けられんの？」

現実逃避に走るのも、場合に寄っては正しい判断である。

「すぐわかるぞ！すぐくはつきり跡が付いてる」

「すぐくはつきり見えはしないけど、それなりに簡単ではあるかな」

カーシュ族って、常人と目の構造が違うんだろうか。不思議に思ったので無理矢理まぶたを開いて観察するが、別に表面上に違いはなさそうだった。ところでユートのまぶたこじ開けても抵抗しないのも不思議。

さて、足跡を見付けるのには一応コツがある。大したことじゃない。足跡を探そうと思わないことだ。

「探さないと見付かんないじゃない」

「足跡なんて分かりにくいもんを最初に見付けようってのが間違いなんだよ。先に他の痕跡を探すの」

まず、世界に線を引く。それから景色を線に当てはめる。線がふと歪んで感じたら、大抵そこは何かが乱した跡だ。草の乱れ具合、土の凹凸をしっかりと見れば、足跡がある。足跡を見れば、色々な情報を読みとれる。

これはあくまでカグラのやり方なので、他の人が同じ方法をとっているかは知らない。多分違うんじゃないかな。トニオは線引きせずに違和感を探すとか言ってた。やたら搜索範囲が広くなるから、

自分はやらない方法である。

「自然ってのはある程度規則性があるだろ。広葉樹はできるだけ重ならないように葉っぱが生えてるし、水気のない場所に粘土質の土は生まれない。そういう単純な規則性を線にはめるんだよ」

「ちよつと何言ってるかわかんない」

「・・・カグラはむずかしいこと考えてるんだな・・・」

そんな異常者を見るような目を向けられても。しかし反芻してみると、確かにわかりにくいかもしれない。しばらく言葉を吟味して、一つ二人に頷きを返した。

「慣れかな」

「そういう趣旨の話だったかなあ」

そういう趣旨の話だったよ。

つらつらと話しているうちに、どうやら研究施設の近所まで来ていたらしい。呆れるほどでかい建物にげんなりするのはカグラだけだったようで、不思議とエミリアは瞳を輝かせている。

おかしいな、いつもなら真っ先に肩を落とすだろうに。今からあれを搜索するんだよ？

「こういうでっかい研究所、かつこいいよね・・・！巨大ロボとか製造してそう！」

どうもこの子、嗜好が少年寄りだね。プールからざざーっと巨大鉄塊が現れたりしたら、喜色満面の歓声で迎えそう。

かくいう自分もそういうのは好きだ。合体とか変形とか、凄いい弾む単語である。多分二ホン区画の人間の9割はニコニコ顔で歓迎するだろう。少年の心を忘れない、永遠にロマンを求める人種が二ホン人だ。より正確に言うなら日本人という。この区画特有の変態的な精密技術の99%はロマンから生まれたよ。

通ずる嗜好に故郷を反芻しながら、後続を警戒した。ついでに先駆者の確認も済ませておく。

「・・・うん？」

「どうしたんだ、カグラ」

追ってきた足跡が、ふいに方向を転換しているのに気が付いた。入り口を目前にして、集団が足踏みをしたように足下が荒れている。そういえば先ほどから足跡にこもる力が落ちてきているとは思っていたが、何でまた急に。マラソン大会終了？

また戻ってこないと良いけどなあ、と呟いて、念のため扉の目立つ位置に罨を設置しておくことにした。電撃系トラップの出力を弱に設定しておけば簡易バリアの代替品となるのはあんまり知られていない。明確にターゲティングされていなければ、ちょっとしたビビビ感であいつらは足を遠ざけるのだ。

仮に人間が来ても、トラップは縦方向に展開するので本体に触れられる。つまり必要時の起動停止が容易なのである。とても使いやすい。ちなみに出力弱だと10回以上の接触に耐えうるトラップだが、強にすると1回でお陀仏するんで注意な。

本体を少々バラし、予備スイッチを増設。伸ばしたコードを建物の中に放り込む。内側にガキ共を放り込み、自分も建物に入って扉を閉めた。

トラップカードをスタンバイさせてターンエンドだ！

「コスイ・・・」

より格調高く用意周到と言え。

「否定はしないんだな」

「しない」

コスイとかセコいとか、そういう単語は罨師にとって褒め言葉である。罨師以外の人間がそれをどう思うかは別として。

スイッチを壁の高い位置に貼り付けて準備完了。罨の発動具合も

良好なので、ちょっとしたザコが少数で入り込もうとする程度なら妨害できるだろう。

頭の回る遠距離野郎とか電撃属性の馬鹿が来たら仕方ないね。ガチンコで潰してやるから覚悟すると良い。

こちらがひと段落したのを見て、ユートが小走りに寄ってきた。意外と頭が回るようで何よりである。カグラはてっきり、なんだこれ、とか言いながら罠の使用回数を激減させやがるかと思っていたんだが。狩りの準備は邪魔しない、ということだろう。

「それで、どっち行くんだ？」

「んー」

予想を超えて広い屋内に視線をやった。故郷では「東京ドーム何個分」というまいち把握しにくい広さの単位があるんだが、果たして何個分になるのやら。

「棒でも倒すか」

「何で唐突に原始的になんの！？」

「冗談だよ。実験装置守れってのはつまり、敵全滅させろってんだろ。誰がこんなクソ広い建物をくまなく回るかってんだ。そんな言われたら外部から火薬けしかけて木っ端微塵に爆破する」

「よくわからないけど、ひどいこと言ってるのはわかるぞ」

「手段は達成してるだろ」

「目的は見失ってるでしょ！」

「案外結果オーライじゃね？」

先日エミリアが言っていた通りの妨害にはなるし。自分が言っていた問題点を見なかったフリする必要があるけども。それも難しい話なので、かわりに進入生物を木っ端微塵にすべく足を進める。

ようは入った分だけ殺せば良いんだから、痕跡辿れば良い話だ。入り口は他にもあるだろうが、一応今のところの情報によれば突破

されたのはここだけだったようである。行幸。

なお、どうか他突破されるようなヘマこいたら、ヘマこいた奴の鼻からドーピングアイテム突っ込んで脳味噌を強化してやるからそのつもりで。

「うわ、泥まみれ。お掃除ロボットかーわいそー」

「エミリアのお部屋のお掃除ロボットも残念」

「そ、そんな汚してないったら！」

へえ、てつきりお部屋が腐海だからカグラの部屋に入り浸るんだと思ってた。違うつてんなら、今度突撃隣のパートナールーム仕掛けるから心しておくように。

「なんか・・・なにもいないな」

キヨロキヨロとおのぼりさんのように視線を走らせる少年が、戸惑いがちに声を上げた。

「もつと奥に進んじやってるってことかな」

「まあ、そうだろうね。ここに来るまでに大分時間食ってるわけだし」

しかし、そろそろ追い付いても良い頃だろう。念のため報告だけはしておこうとシステムを立ち上げる。ソワソワしながら報告待ってるウエンディゴがいることだし。

少々チャンネルの乱れ。一瞬の砂嵐の後、鮮明とは言い難い画質で毛を司る生物が投影される。研究所内部だから、変な電波でも飛んでるんだらうか。

『おせえ！』

「ごめんね」

一声と同時に通信をぶった切る。

コールは早かった。高らかに空間に鳴り響く前に再度起動。音量は最低限まで落とした。

「・・・あの、カグラ、オッサン、何か言ってるんだけど」

「わたくし、開口早々人を怒鳴り付ける育ちの悪い毛と会話できるほど寛大ではなくてよ」

男のヒステリーは見苦しいなあと数秒間眺めていると、ようやく無駄を悟ったのか、クラウチの眉間の青筋が収まったようだった。僅かに音を大きくする。それでもほぼミュートなのは、周囲の警戒のためだよ。ほんとだよ。

何はともあれ報告である。今ところ何も無いよ、と。お前のツンデレ成分を刺激する愛娘は超元気だから安心するが良い。

「でも、敵もいないけど施設の人もいないという」

「逃げたんなら良いけどな」

難しいんじゃないかな。施設相当数の人数がいたわけだし。

『』となる。

ふと聞こえてきた地鳴りのような音に、薄汚れたケセランパサランから顔を背けた。一拍遅れて視線をやるユートと、首を傾げて耳を澄ますエミリア。

「まずい」

再度通信を一方的にぶった切った。

慌ててエミリアの首根っこを掴んで奥へ強制誘導。おいこらそこで武器を構えるな少年。その物騒なものをストックに仕舞って、さっさと全力疾走に備えろ！

扉を巻き込み壁がぶっ飛んだ。視界をジャックするのは年少2人の前世だと思われる、猪突猛進が大得意な原生生物である。

みんな大好きウバクラダたん！

「な、何あれえええええええええ！」

「くっそ、数に任せてバリア押し込んで来やがった！」

集団に背を向けて駆け出すカグラに、ユートが続く。エミリア？

小脇に抱えてるからクソ重いよ。とっさの判断に弱いのは初心者の

常だが、凄く迷惑なので速やかに立ち直り自分の足で走ることを命じるが故に自分で走れ。

「戦わないのか!？」

「お荷物避けたらな!」

当然だがスピードが出ないのに舌を打つ。少し先に広い空間があるので、できれば安全を考慮してそこで打ち合いたかった。

こんな直線通路では、テクニク派紙防御のエミリアも心配だが、何よりユートが真正面から迎え打ちそうで怖い。だってこの子、隙あらば槍を構えようとするんだもの。いいから振り向かず^に走れ^ての。

「お、追いつかれるよ!」

お前が自分で走れば間に合うんだよ!

仕方なしに懷に手をやった。秘蔵のトラップがいくつかあるのだ。こんなザコ相手に使うのは心底辛いが、この際^に的被害を出すよりは――ああ畜生おサイフが痛い。いや、正確にはおサイフは痛くないけど、在住する子がなくなるのが寂し痛い。ランクの高い他の子が引^{おかね}つ越してきてくれる予定があるんなら我慢する^{だけ}だ。

こみ上げた熱い何かをぐつと堪え唇を噛んだ。視界を覆う薄い水膜。な、泣いてなんかいないんだからね。

「――あ、ちよつと!」

「ん・・・?」

エミリアの声と、ふわりと訪れた不自然な風。急ブレーキを踏んだカグラの手から、小さな身体が転がり落ちた。

悲鳴に頓着せず^に背後を振り返る。

見知らぬ鷲色の長い髪が勇ましく揺れるのを視界に入れて、カグラはすぐさま状況を把握した。

凹凸のない床にブーツの底を叩き付け、元来た道を駆け出した。

4 - 2 標を得、（後書き）

いらんとこ書いてたら、4章やたら長くなりそうです。
この話正直最後まであれば良い。
道中なんていらんかったんや…。

4 - 3 道連れを増し、

武器に見紛うほど攻撃的な肩パットと、カッチリした青いベスト、意味のない水色ネクタイ。どう考えても業務に不的確極まりない機能性皆無のミニスカ。

見覚えがあった。ガーディアンズの女性制服である。彼女たちの中にはアマゾネスの異名を冠するほどの火力持ちがいたりするので、助太刀致す！という状況だろうことは疑いない。

となればカグラのやるべきことは加勢である。戦略的撤退は何ら自分のプライドを傷付けることではないが、助っ人に任せきりで逃げるのは頂けない。薄っぺらい和紙のようなプライドでも、一応存在はするのだ。

彼女の掲げた長杖の先端で燃え盛る業火が、大地に強く舌を這わせる。火花という名の唾液を避けることもできず焼かれる生物。漂う香ばしさに涎が出そう。

オツユが漏れないようお口をしつかりとチャックして、一際強く床を踏み抜いた。出現させた大剣を、女性を追い抜きながら大きく払う。焼き焦げながらも突進を止めなかった本能を切り裂き虚空に還る質量。軽く引いた手に次の得物を握り、突き出す。真っ直ぐではない歪な槍に貫かれ、また一つ命が散った。

鎮圧はそれなりに時間が掛かった。防具補正のおかげで攻撃食らわないで立ち回れるようになったと言ってもウバクラダである。やたら生命力が高いんだ、こいつら。こんがりウェルダンに焼いて心臓を潰すだけの簡単なお仕事飽きた。

後ろの方で見ていたお子様二人——ユートはどうもシールドの使い方が甘いのでお座り命じておいたのさ。そしてエミリアは言うまでもないよね——が駆け寄って来るのを視界の端に捉えながら

大きく息を吐いて呼気を整える。頬を伝った汗を手の甲で拭い、周囲の安全を確かめて。

「……ん、OK。ありがとね、お姉さん」

ひらりと振った手からセイバーが消えた。左腕に装着した盾も同じく光の粒子に変わる。

振り返った先で、『お姉さん』が戸惑いを見せた。どう返したら良いのかとつさに浮かばなかったんだろう。

理知的な蒼い瞳は、まだ多分に幼さを残している。容姿や服装のせいかエミリアよりは大人っぽいように見えるが、どうも同じくらいの年齢じゃなかるうか。何にせよ年下である。

だが覚えておくと良い。お姉さんってのは、女性全般に有効な呼び掛けだ。古今東西のお嬢ちゃんオバチャンの誰に向けても、一切の角を立てない。万能である。ここテスト出るよ。赤い下敷きを用意して、赤ペンでノート取っておけ。捗るから。

少し待って、ちょっとつかえながら返ってきた「どういたしまして」に微笑みを打ち返す。残念ながらボールは受け取って貰えなかったので、スマイルが返ってくることはなかった。寂しい。

「カグラ、お疲れー！」

「何がお疲れだこのお花畑。のほほんと口開けて傍観しよってかに」

参加して貰っても困るのだが、せめて申し訳なさそうな顔くらいしてみせろ。

「だって、テクニク凄いいし、近接はカグラが担当してるんじゃない、あたしの出る幕なんてなかったし」

「気、概、の、問、題、だ」

「ぼくは戦いたかったのに！」

「お前は辞書にガードの3文字をインストールしてから口を開け」
少なくとも、今脳天に落ちた拳くらいは避けるか防ぐかできるよ

うになつてから参加表明するんだな。タンコブじゃ済まんのが実践なんだから。

「あの」

「はい？」

澄んだ声に目を向ける。こちらを睨むように見詰める少女。

「あなたは、傭兵ですか？」

「うん、そう」

ひよつとして初任務とかなんだらうか。敵意は感じないので、睨んでいるというよりは単純に表情が硬いだけらしい。しかしそれにしても戦闘はそれなりにこなれていたような。

首を傾げたカグラを言葉待ちだと取ったのか、少女は佇まいを正し、威圧するように武器を握り直した。

「では、ここは避難勧告が発令されていますので、速やかに子供たちを待避させて下さい。できればあなたもそのまま――」

施設外に出て貰えますか、と、こう続くはずだったんだらう。カグラが笑って否定するはずだったその言葉は、残念ながら残念な子が引き継いでしまった。

「ちよつと、誰が子供よ！人を傭兵じゃないみたいに！」

目くじら立てて喚き出したエミリアの襟首を掴み、鋭いスタートダッシュを見せた前進を止める。どうどう。お前手綱はどこに置いてきたんだ？

「・・・？傭兵の方だから、あなたたちをお任せしたわ」

いや、そういうんじゃないわ。

眼中のなさに益々ヒートアップする少女の襟が悲鳴を上げ始めたので、仕方なしにピヨンと飛び出た毛の触角を握った。根こそぎ抜けても良いなら暴れるが良い。

「じゃなくて！傭兵っていうんならあたしたちだって、ちよつとカグラ、痛いんだけどッ！？」

「お前が動かなきゃ痛くねえよ」

「動くわよ！人間だもの！」

「みつを」

「誰だそれ」

そつえばユートくんは激高してなくて良い子だね。多分転がる死体に目を向けてて、あんまり話を聞いてなかったんだろう。今回だけはその無頓着さを褒めてやろう。

ところでエミリアは放射能でも浴びたのだろうか。ギヤアギヤアと怪獣のように吼える声があんまりうるさかったから、うつかり骨ばったおててが鼻と口を塞いでしまった。むぐむぐ聞こえるうめき声は30秒以内に消えるだろう。息を吸おうとした瞬間を狙ったので。

しかし敵もさるものであった。こちらの魂胆を早々に見抜いたらしい。すぐに無駄な抵抗を止めて、こちらの腕をタップする。

タップされたからには放さざるを得ないな。

「実験装置を守れて以来を受けてるんだけど！」

「何だ、あなたも傭兵なのね。とはいえ、あの程度の敵に怯んでいるようでは程度が知れるわ。大人しく尻尾を巻くのが身のためよ」

「だ、誰が怯んでたってんのよ！待てって言われたから待ってただけなんだから！」

なんということでしょう。温もりも薄まらぬほどに素早い卑怯な裏切りであった。ギブしたんだからこっちに従えよ。

ときにお前って、待てって命じたら素直に待つタイプの賢い犬だっけ？そんな記憶は欠片もないんだけど。リードも付けさせてくれない駄犬の記憶ならあるが。

放っておくのも面倒な事態に発展しそうだったので仲裁に入った。ボクシングとかのレフェリーみたいな気分。

取り出したパートナーカードを警察証のように掲げて、再度エミリアの口を塞ぐ。

「当方、軍事会社リトルウィング所属の傭兵なんだ。私、カグラ。こっちの金髪がエミリアで、あっちのツンツン頭がユートね」

適当な自己紹介は、彼女の気を引くことができたらしい。こちらを向いたつり気味の鳶色に、営業用の笑みを向けて。

「さつきも言ったけど、実験装置守れって依頼を受けてる。こいつらのお守りはこっちで責任持つから、警察権限使うのは勘弁して欲しいんだけど」

ガーディアンズと言えば、まず厄介なのが警察権限。すなわち、個人的感情による取り締まり権限である。仕事はできるのに民間から諸手を上げて歓迎されない理由がそれだ。しっかりやってる職員に比べ、裏で好き放題権力振りかざしてるアホが多いのである。

「・・・あなたの依頼最高達成ランクは？」

「今んとこ一応、ソロでギリギリSかな」

3回かそこらしかトライしてないし凄いいギリギリだった上、全部討伐依頼じゃなくて調査依頼だったけど。隠密系は得意だ。数の暴力や戦闘の腕がなくてもどうにでもなるから。

その辺の事情はとりあえず場に伏せてアタックする。余計な一言で、んだデメエもお荷物か！とか認定されたら始まる前から依頼失敗だし。

Sランクといえば、一流の傭兵が複数でトライするレベルである。胸を張ってソロS達成を豪語する輩を、カグラならまず上から下から疑ぐり倒すだろう。嘘だとなればケチョンケチョンに貶して自殺する直前まで馬鹿にする。事実であれば驚いて傭兵としての敬意を表す。それほどのものだ。

わかるか。この自分が、敬意を表すほどの凄さだ。一応カグラとてクリアしているものの、達成条件が前途の通り。戦闘技術的には自分は基本的にAランク相当だと思っているので、討伐系ミッシヨ

ンのSランク達成は素直に尊敬するに値する。

なお、ランク達成の証明は簡単である。自分の依頼歴を見せれば良いので。

立てた指の先に浮かび上がる文字列に、肩パットちゃんは大きく目を見張って息を飲んだ。そんなに驚かれると微妙に心苦しい。

動揺を押し殺すように1度2度と分かりにくく深呼吸をする。残念だけどバレバレだったが、ガーディアンズとして格好付けたがる思考はわかるので気付かないフリをしておいた。

「私は、ガーディアンズ総合調査部所属、ルミア・ウェーバーです。奥のシエルターに閉じこめられた人々の救出に来ました。装置も気懸かりではあったのですが、Sランクを達成するほどの傭兵なら問題なくお任せできますね」

ウェーバー？

「ガーディアンズ!？」

あ、しまった、逆鱗に触れた。スイッチを入れたようにカグラの手を振り払い声を上げたエミリアの毛を、再度拘束する。ちょっとだけ引っかけた、彼女の家名のことはポイ捨てた。もし思った通りだとしても自分には関係ないし。

というかお前、今の今まで所属に気付かんかったんかい。こんなに特徴的なスタイルしてらっしゃるのに。

「カグラ、任務変更!」

「はいはい、その小さな頭で10秒しっかり考えてから発言しましょうね」

「任務変更ッ!」

考えるうちつとるだろうが。脊椎反射で言葉を返すエミリアは、現在最も受けたくないところから心底呆れた視線を受けている事実、果たして気付いてるんだろうか。

「なあカグラ。エミリア、なにをいきなり怒ってるんだ?」

「更年期障害なんだ」

「なんだそれ？」

「何よそれええええええええええ！」

2人とも、どうやら常識を学び直す必要があるようである。違う方向性で。

「任務、変更よ、変更！ガーディアンズなんか、人命預けてなんかいらんわよ！」

「変更したら装置はどうすんだ。クラウチに尻ひっ叩かれないの？」

「う」

ぴたりと静止したエミリアは、意外にも状況を理解しているらしい。怒られるのがわかってるってのはそういうことである。それでもなお主張を通そうとする意志の強さは天晴れだが、もつと生産性のある別の方向にだな。

「じゃ、じゃあ、装置を守りつつ救出すれば丸く収まるわけね！」

お前に角が取れるだけの實力があればな。

「いよ！Sランク！」

他力本願で仕事増やして押し付けるとかふざけんなデメエ！

己の堪忍袋の尾を部位破壊させないため、自ら解いて怒りを解放した。

頭の弱い金色のニワトリに肉食動物のように飛びかかり、首を脇に挟んでクラツチ。反対側で細い腰をホルドし、エビ反りに関節を固める。腕をパチパチと叩くギブ宣言には気付かないフリを押し通した。気付いたら放さないといけないからね。公式ルー尔的に。

「痛い、いたいー！なんでよー！？できる人がやる！自然の摂理じゃないッ！」

「私の幼馴染か teme、そういうのを寄生プレイつつうんだ！で

きないならできないなりに身を弁えて頑張るのが知的生命体！問題解決を放り投げるのは国会議員の仕事だッ！」

「知らないわよアンタの幼馴染なんて！折れるー！あたしの柳腰が折れるっの！」

「図々しい。くびれ作ってから出直してこい」

「殺スッ！」

いくら力グラが武闘派でないとはいえ、エミリア^{ザコ}が全力で暴れたくらいで負けるほど軟弱ではないと知れ。

情け容赦なく足を絡めて床に引き倒すと、天を貫くほどの悲鳴が轟いた。逆エビ固めに絞り上げる。

敵が寄ってきたらどうするつもりだって？倒せば良いじゃない。そういう予定なんだから。

「それで、どうするんだ？」

どうしようね。まあ実際、大人としてはルミア一人に任せっきりというのも気が引ける。

「うーん・・・装置を守った後で良ければどうとでもなるかな。閉じ込められてるのがシエルターってんなら、原生生物とお見合いしてるわけじゃないんでしょ？」

「え、ええ。そう簡単には進入できない、安全地帯であるはずですよ」

若干引き気味なのは何でかな。先程より心なしか距離を開けたルミアが、何かを堪えるような声で応答した。

「んじゃあご一緒しよう。どうせシエルターから出てきても敵がいたら足手纏いになるだけだし、先に先滅してから救出が妥当だね。戦力は増えるし、一石二鳥」

「えええ、あたしたちだけで十分・・・！」

黙れ小娘。

解放しかけた足を再度取って、虐待と騷の中間くらいの強さで捻り上げる。響く悲鳴が心地良い。

「・・・私も足手纏いについてきて欲しくありません。具体的に誰がどう、とは言いませんけど」

カグラの下に向けて視野が物凄く狭まってるので、言っているも同然である。気持ちは理解できる。いきなり女子プロし始める輩とか、信用ならないよね。常識的に考えて。勿論カグラは除外して。

「誰がついてくつてのよ。あ、た、し、が、行くって言ってるの！あんたは外で肩パットの広い面積使ってこれ以上何か入って来ないように威嚇してるのが生来の適任よ」

「それこそ信用なりません。どうしてもというのなら、ガーディアンズの監視下、つまり私の監視の下で動いて貰うわ。最低限の譲歩よ。あなたは馬鹿みたいに目立つ服で敵の注意を引く役目が最適じゃないかしら」

「ほーら監視ときた、これだからガーディアンズは！いい、監視つてのは、上の立場の人が下に使う言葉なの。自分が上だって自惚れてる証拠ね！」

「この場の上位権限はガーディアンズにあります。別に個人感情で話してるわけじゃないわ」

「どうだかー。だって、あんた、ウェーバーでしょ」

もういいや、と事態を放棄していたカグラの視界の端で、ルミアの表情が固まった。ゴタゴタに素早く飽きたユートが鍛錬がてら振り回す槍を避けつつ、そういえばと思い出す。

ウェーバーといえば。

「英雄イーサンの親族だもんね、七光りでガーディアンズに所属させて頂いてる」わけ？」

「な・・・！」

うわあ、エミリアのあんな悪い顔初めて見た。途端に柳眉を上げて激昂を露わにするガーディアンズ社員頑張れ。

そうそう、ウェーバーといえば、イーサン・ウェーバーだよ。ね。やたらめったらピンチ地帯に登場して、最終的には世界を救った英雄。頭脳は大人、身体は子供の名探偵かよって思ったこともある。あいつ事件発生装置なんだろ、わかります。

「実力がどうかさあ、七光り受けてるあんたに言われても、説得力ないってーの！」

お前さっき、テクニク凄いつて言ったがな。即乾性にも程があるだろ舌の根。

「誰が七光りなのよ・・・兄さんは関係ない！私はルミアよ。私がここに居るのは私の実力だもの、お兄ちゃんは関係ないッ！」

「あー、まあ、気持ちはわかるが落ち着け」

高揚に従いぼんやりと光を放つロッドを見て、仕方がないので制止をかけた。睨み上げる視線を頬で受け止める。

視線の先には、たしなめられたルミアに勝ち誇る馬鹿の姿。

「ふん、ざまあみるってんのよ」

「エミリアは言い過ぎ」

「うぐ」

反論がないということは、理解しているということだ。わかってんなら止めるか反省しろよと思うんだが、思春期の暴走に理論をぶつけても疲れるだけなのは明白である。拳骨一つを脳天に落とし、これをもって説教とした。

何だ。まだぶーたれるってんなら、絶好調で槍振り回すユートの方へぶん投げるぞ。

何はともあれ。

「ルミア。とりあえず先滅に移るけど、問題は？」

「・・・ありません」

「了解。ユート、前菜が来たぞー！」

「何だ！敵か！？」

こんだけ騒いで、寄って来ない方がどうかしている。

ぎょつとしてカグラの背後へ回るエミリアを、容赦なく足蹴にして前方へ突き出した。こいつはちよつと荒療治で戦士に仕立てる必要がありそうなので。お仕置きとも言っ。

「カグラさん」

横に並んだルミアがロッドを構えて呼び掛けた。肩パットが二の腕辺りに刺さりそうなので、もう少し離れて頂けると助かるんだだけ。

「私は一旦あなたたちに随伴する形で行動を共にし、救出行動をすることとします。これは応急的な判断であり、不適切であったと判断すれば、即座に前言は撤回し、こちらの指示に従って頂きます構いませんね？」

事務的な言い様に苦笑がこぼれる。湾曲を正せば、つまり。

「足引つ張るなら置いてくぞ、と・・・」

アイ・マムと言葉を置いて、爆走する敵を迎え撃つため駆け出した。

まず、正面からかち合えば、こいつらもそこそこ使えるんだという事実を見せ付けなければなららしい。別に難しいことじゃなかった。ユートが突っ込み過ぎないように援護して、エミリアがテクニクを発揮できるよう場を守る。それだけの話。

余裕をもつて一刀のもと切り捨てた原生生物を踏み付けるカグラの横を。

「うおおおおおおおお！」

「いっやあああああああああ！」

少年と、ろくすっぽ狙いを定めずに解き放たれた光弾が掠めて行った。

・・・訂正しよう。あんまり簡単ではないっぽい。

気を引き締めてあほらしい事実を見なかったことにしたカグラの前で、少年が吹っ飛ばされる幻影が見えた気がした。
気のせい気のせい。

4 - 4 そして少女の世界は始まる。

どうしてこう、お偉いさんってのは守りの術をことごとく外してくるんだろうと思う。具体的には、何で肝心の装置を施設の各所にバラツバラに配置しちまうのかってことだ。

防御するにあたり、当然移動を必要としないことが望ましい。あつちやつちや駆けずり回って2カ所を守るより、でーんと仁王立ちして一カ所を守るのが簡単なのは自明の理である。アホの子エミリアでもわかる事実だ。

攻め込まれた際に全滅を避けるということにおいては分散させるメリットもなくはないが、それは防御側の頭数が揃っていることが前提。今回のケースでは最悪以外の何者でもなかった。一カ所守っても別んトコが襲撃受けてるし、下手に突撃すれば折角守った装置が再び襲撃受けるし。デメリットしかねえ。

仕方なしに小バエ一匹まで残さず風潰しに駆逐したわけだが、いくらなんでもこれは疲れた。掛かった時間は数えたくもない。

まあ、毎度のごとくエミリアは潰れた。ルミアも半壊している。ユートが元気なのは何だろうな。敵の生気を吸収する機能でも付属してんだらうか。これだから野生児は。

そういうわけで、装置の安全は無事確保された。無傷ではないがそこは仕方がない。設置個所が悪いのが悪い。

で、目的を守備から救助に切り替えたわけだが。

「おかしいわ・・・この辺りにはもう原生生物の気配はないのに、どうしてみんな脱出しようとしらないの？」

人っ子一人出てこないのである。これ以上奥に原生生物が入って

いった形跡はないのに。

「そんなの、怖いからに決まってるでしょ。閉じこめられるってメチャクチャ怖いんだよ。ノコノコ出てったら何があるかわかんないじゃん」

「まあ、モニター壊れててわかんないから出ないってのは、くはないけど」

呆れ顔で胸を張るエミリアの意見は一理ある。それならそれで問題は無い。

ないが、そうじゃない場合が問題だ。

「けど？」

見上げる視線への答えを探すために、あらかじめインポートしておいた地図を立ち上げる。

最近の地図ってのは高性能だ。自分の現在地がわかるってのは何を差し置いても素晴らしいことだとカグラは思う。

進む先、シエルターの手前には、観覧ドームのような広い空間がある。大剣をブン回してもランチャーぶっ放しても、トイトイ呼び出しても支障がないほどの空間が。

「脱出したいけど、できない事情があるとか。例えば」

「カグラ、奥に何かいる！」

「——とかさあ」

こんにちは、ボス戦フラグ。

アルテラツゴウグ、という生物をご存じだろうか。

真っ白い竜である。巨大な図体から生えた首は2本ある。もう一

本あると良いよね。ギドラ的な意味で。

どこか荘厳な容貌のかの竜は、実は自然から生まれた生き物ではない。教団が実験を繰り返して生み出した人造物だ。

属性は驚きの光闇混合だと、知り合いの教団関係者に聞いた。マールブル色でなくわざわざ白にしたのは、星霊の神秘性を醸し出すためだとか何とか。

自然界に実に適さない洗濯物も顔負けな驚きの白さである。残念ながら柔軟材は使っていないため硬いので、その点では洗濯物に軍杯が上がるだろう。お前も柔軟材に漬け込んでやろうか。ふっくら可愛いマスコットになれるかもわからんよ。

性格が凶暴でなければな。

「うおおおおおおおおお！？」

背後で床が瓦礫に変化した。見事な錬金術だが、二度と元の姿に戻れないのが難点。自分は同様の特技を身に付けたいとは思わんで、全力で逃げ出す。

「カグラ、早くやつつけてよぉー！」

「無茶言っんじゃねえよ！隅っこでガタガタ震えてないでお前も手伝えつての、火力が足りなんだよッ！」

ただでさえ万全ではないのに、こんなもん一人で倒せるか。最盛期であっても一人で勝てるかどうかは疑問が残るが。

「教団所有の実験生物がこんなところで暴れてるなんて・・・最悪」

「ちよつと、一旦逃げた方が良くない？」

「あなたは逃げれば良いじゃない！この奥に閉じ込められてる人がいるのに逃げるなんて、私にはできないわ！」

立派な主張であるが、そっちの首に光は効果ないからテクニク切り替えた方が良いと思うよ。右が闇担当で左が光担当なんだって。胴体は不明な。調べようとしたアホが踏み潰されて危篤状態に陥っ

たから、それ以上挑みかかろうという猛者は出なかったらしい。

それからそつちで悲鳴上げて転げ回ってるエミリアはさつさと武器を構える。

「私は英雄イーサンの妹なんだから、これくらい、当たり前なんだから・・・！」

「兄さんは関係ないんじゃないの？ああもう、わかったわよ、あたしだって見捨てるのは嫌なんだからね！」

自分に言い聞かせるように強く呟くルミアに、何かしら感じるものがあつたらしい。淀んだ目を意志を宿して払拭、杖を手に、硬い動きでお天気少女が構えを取った。

少女二人に意識を向けた双頭竜のヘイトを取るため、苦手な射撃に切り替える。数発目の近くにぶち込むと、すぐに2対の鋭い眼差しがカグラを射抜いた。見た目の割に短気な奴である。

「ユート下がれ、尻尾来るぞ！」

「わかった！」

追撃しようとした小柄な体躯が、指示に合わせてバックステップ。滑らかな床から新たな瓦礫が製造される。

足場が掘り返されまくると戦いにくいので、できれば程々で終わらせた。吐き出された得体の知らないエネルギー体を僅差で避けながら短銃を捨てるように掻き消し、スロットを構築し直す。

ちなみにどうでもいいけど、こいつらのプレスって息なのかな。それともヨダレなのかな。ヨダレだとするとモチベーション爆上がりして回避率が超上昇するんだけど。

危うく避け損ねた瓦礫が、飛んできた氷の刃で弾かれる。

「エミリア、ファインプレイ！」

視線を向けると、やべえ、というような顔をした少女と目があつて、すぐに察した。誤爆かオイ。瓦礫なかったら直撃だったぞ今のコース。

カグラが顔を引きつらせている間に、ルミアが杖を振るいフォトンを解放する。クリスタルのように透き通った鋭利な塊が空を駆ける。圧倒的な冷気を伴うテクニクは、しかし竜の体表に申し訳なさそうにこびり付くだけに終わった。

肩をうつすらと青く染めた双頭竜が高らかに怒りをたけぶ。

「そんな、利かない・・・！」

「多少は利いてる。標的が再移動した」

愕然とした声を跳ね除けた。

利いていないわけがない。様々な戦士を網膜に焼き付けてきたカグラの目から見ても、ルミアのテクニクの腕は確かなものである。エミリアも同様だが、キャンプファイヤーの点火もできない自分からすると、羨むのもアホらしいほどだ。

かといって、氷が効き辛いというわけでもないだろう。あくまでも属性は光と闇。効果絶大ではないにしろ、普通に通用するはずで

「つまり外皮がやたらと硬いんだな」

同じく射出されたエミリアの爆炎も、外殻の尻の辺りを黒く煤けさせただけで消えた。

ユートの鎗が火花を散らして弾かれる。首の背中側。傷一つ付いていない。

なればと反撃に出た長い首の腹側に大剣を叩き付け——ようと
したのだが、反対側の首が突如しやしやり出てきて妨害された。おまけに腹にタックル食らって吹っ飛ばされる。

「ぐ——」

「カグラさん！」

背中を押す一陣の風が、壁に貼り付いたトマトみたいになる運命をねじ曲げてくれた。多分何かのテクニクを小威力で投げて寄せ越したんだろう。そういう応用力は貴重である。

「悪い、助かった！」

詰まった呼吸を逃がし、残る鈍い痛みを拡散させた。助骨が痛いような気はする。もしかして前の怪我が治りきってなかったせいだろうか。

それはともかく。

「あからさまに庇いに来たな。てことは有効なわけか」

「首？・・・そういえば、お腹側はウロコないかも」

そうと決まれば話は早い。

「ユート、ミラブラ光は？」

「持ってない」

「じゃあこれ使って、私と左特攻。合図で解放な。エミリア、ルミアは次の合図待ち。右側に最大威力で範囲絞って雷テク」

「雷？う、うん、わかった！」

「了解しました、信じます」

道中で拾ったミラージュブラスト端末をユートに投げ渡す。セツトしたのを見届ける前に再び襲い掛かって来た首に向かい、セイバ―を叩き込んだ。

ごく浅いが、やはり入る。

「行くぞ！」

「おう！」

体勢は低く、武器を消して速度を優先する。倣い逆側から首を狙うユートの手にも武器はない。あれは戦闘民族の本能の賜かな。実践から行動を学ぶってのは良い傾向だ。

業火を浴びせるべく開いた口に、刹那出現させた銃弾を食らわせた。ダメージ的には牽制程度の効果しかないが、とりあえず口から出るべきものが小さな悲鳴に変わるので有効。

首の付け根に辿り着いた少年の眼差しに頷き返す。展開される方陣。白く輝く幻獣^{ヒリカ}の姿。

カグラは振りかざされた爪を飛び込み前転で避けながら。

「コンル！」

かざした手の先で、青白い光が仄かに応える。同時に降り注ぐ光の粒子。ニョーマンのみが使用できる光のミラージュブラストは、他種の幻獣の能力を引き上げる。

冷気を纏い、指先が凍る感覚。急激に下がる温度に鈍くなりたがる反応を叱咤しながら方陣を制御する。力の集中をイメージ。次いで、集う光を斬り裂いて、刃が走る道筋を固定する。

目標は、竜の首1点！

「行つくぞおおおおお！」

ユートの咆哮と共に最大展開する光の陣形。傍らで一回り大きな陣を築き上げ――。

「光明ノ聖域！」

「氷結の疾風ッ！」

進む、圧倒的なフォトンエネルギーを解放した。

比較的柔らかな皮を裂き、肉を抉り、骨を砕く圧倒的な質量。背側の固いウロコを残し、文字通り首の皮一枚を繋げたまま、生体半分の命をざつくりと斬り裂いた。

折れた首は鳴かない。片割れの死、あるいは己の傷を嘆く左翼の竜が、大口を開けて炎を湛える。

カグラの真上で。

「カグラ、よける――」

「必要ないッ！」

ありがたいことだ。誘導する手間を自ら省いてくれるとは。お礼に某川の駄賃は払っておいてやる――安心して死ね。

引き絞った右手の先に光が収束する。地を砕くような踏み込みと共に身体を捻る。

最大限の力の振り絞り方をカグラは知っていた。それは、カグラを形成する全てのベクトルを一方へ向かわせる方法。未だ鈍い身体の有様を覆す、圧倒的な経験が神経を支配する。

ただ一点に収束する力は、それ以上の力による広域攻撃を凌駕する。始点から終点まで一切の寄り道をなくした刺突は、自分が放てる最大の貫通力だ。

腕の延長線上で竜の首に杭が穿たれた。槍は喉を貫き、骨で減速して、鎧で止まる。

槍は、手持ちの中ではあまり性能のよろしい部類ではない。それにしては予想より深い手応えだったが、しかしダメージはさほど高くないはずだった。骨を損傷させたとはいえ、怒り狂った竜の動きにぎこちなさはない。

虎は傷付いてからが本性である。さて、竜はいかがなもんだろうか。

結果は、残念ながら見るつもりはないが。

「放てええええええええええッ！」

叫びに応じて閃光が走った。展開したシールドに加わる余波に、全神経が苦痛を訴える。

光は雷と化して収束する。大部分が金属で造られた、竜の首に突き立つ杭に向けて。柄を溶かし、滴らせ、飛び散らすほどの高温が、衝撃が、槍を、ひいてはアルテラツゴウグに襲いかかる！

外皮が駄目なら内部だと、古来より相場が決まっている。まして、神経に直接雷を注がれて無事である生物がどれだけ存在するのだろうか。

声なき咆哮が灼け焦げた酸素を裂いて振動と化した。肌を震わせる断末魔に怯むこともなく、振る身に再度の雷撃。

追撃。

追って数撃。

更に降り注ぐ雷の嵐。

何を勘違いしていやがるんだこの虫野郎。まだ俺のターンは終わってないぜ！

「・・・自分で指示しといて何だけど、容赦ねえな・・・」

「もう死んでるのか？まだ動いてるぞ」

「ショック受けると、心臓止まってても筋肉の反応で跳ねるんだよ。あれ、わかってやってんのかな。ルミアは知ってそうなんだけど」

明らかなオーバーキルである。止めて、アルテラ略のライフはもうゼロよ。

過剰なトドメは討伐の基本だが、ここまで過剰だと心が痛い。

しかしてこの死者に鞭打つ行いは、白い体表がこんがりとキツネ色に焼き上がるまで続いたのだった。

初めての共同作業で通ずるものがあつたのか、あの悪夢の光景の後、二人は微妙な和解を果たした。何が微妙って。

「おまえ、なかなかやるじゃねえか」

「ふん、おまえもな」

みたいなやりとりだったのが凄い微妙だった。どこのライバルキヤラだよ。いや、ライバルなんだろうけど、何でそんなやりとりが男前なの。

とはいえ喧嘩別れしなかったのは良いことである。エミリアの機嫌に禍根を残すと、もれなくまたしてもカグラの部屋が追撃を受けるはめになるのだ。

そろそろ自室としての機能を果たさなくなってきたからな。これ以上の攻撃を受けると、他人の部屋にこっそり住まう妖精さんみたいな生活に身を落としかねない事態である。突撃するならタワシの生まれ変わりの部屋かな。元凶だし。廊下で寝ろ。

エミリアはまあまあ上機嫌、カグラは幸せになれそうとなれば、何ら問題はない。さて報告書でも書こうか、と考え始めて、ふと大切なことを思い出した。

思い出したと同時に通信機がけたたましく鳴き声を上げる。

『オツカエリー。お疲れさま、3人トモ』

「おう、ただいま。準備できてる？」

虚空に浮かぶ美人の顔が、ニコニコと普段以上の笑みを浮かべているのを答えとした。無事、手配していたものも届いたらしい。

きょんとした顔のエミリアの顔の前に投影機を移動させる。

『エミリア、お帰りなさい。疲れてると思うけど、すぐにコツチ来てネー』

「ただいま。・・・あの、こっちって？」

『シャツチヨサンとボスがお待ちヨー』

待ってるワ、と陽気な声を残して映像が途切れる。

心なしに顔を青くしたエミリアがこちらを見るのに、笑顔で首を振って退路を塞いだ。首を傾げているユートはどうせ付いてくるので放っておく。

無言できびすを返そうとした襟首を捕獲。連行は実に簡単だった。エミリア体重気にする必要ないじゃん。米俵のようにヒョイと肩に担いで

歩を進める。ほら、痛いから暴れるんじゃないやありません。ぶち割るぞ。

額を。

「ユート、先に行つといで」

「うん？わかった」

遠去かる背中を見送り、少し歩調を緩めた。

自力解放は諦めたらしいエミリアが、スンスンとわざとらしく鼻を嚙る。そういうのやたら上手い友人がいるからな、半端な泣き真似は利かないと思え。

「カグラさああ、ヒドくない？傷心のあたしを鬼の住処に放り込むとか、それでもパートナーなの？」

「奇遇だなあ、私も傷心だ。誰かさんの模様替えのせいだな」

ぎよつとした顔でこちらを向く幾多の視線に、ふと少女の短いスカート事情を思い出した。さりげなく腕の位置をずらす。

横目でエミリアを確かめると、どうやら気付いていないようである。セーフ。ちなみに事態としてはアウトだった。赤と白のシマシマ。どこぞの探されてる人みたいなカラーリングだね。あいつ、いい加減自分の持ち物紐で括つとけよ。

「エミリア、怒られるようなことした自覚あんの？」

「したじゃん・・・ばつちり・・・」

「・・・まあ、そう思ってたんなら私は何も言わんけど」

「言つてよ！フォローしてよ！」

何度も言うようで悪いが、めんどくさいからイヤだ。ここで自分がフォローすると立つ角があるのだ。万事丸く収めるために、今は我慢するのだぞ、エミリア。

そんなこんなで目的地に辿り着いたわけだが、エミリアの微震動っぷりはどうしたことだろう。写真に撮ったらこの子だけ盛大にボツケボケであろうほど人として軸がブレている。肉体的な意味で。

まあ、エミリアがブレてようがブレてなかるうが知ったこっちゃ

ない。放り投げるように地面に降ろし、ほれ早く歩けと背中を押す。睨み上げる視線はカグラに何のダメージも与えないのだとなぜわからない。

「ぐぬぬ、この恨みはらさでおくべきか・・・」

「何でも良いから諦めろ」

肩上から手を伸ばしてセンサーに触れる。

あ、という焦りの声は、鼓膜が破れようかというほどの破裂音に阻害されて消えた。

「エツミリアー、誕生日、おめでとネー！」

「おめでとっ、エミリア」

「ごちそういっぱいだぞ！エミリア、おめでとっ！」

ちくしょう、盾がエミリアじゃ身長差のせいで緩和されなかった。開幕クラッカー自重しろ。

残る耳鳴りに顔をしかめるカグラとはうって変わって、室内の人々はクラッカーをこちらに向けたまま、満面の笑みをたたえている

—— 呆然と佇むエミリアを置いて。

「・・・なにこれ」

「見ての通りだ」

再度背中に手のひらを押し付けると、今度は誘われるようにフラフラと前進した。さっきから自動ドアに挟まれまいと足でセンサーを牽制し続けているので、そろそろブザーが鳴りそうなのだ。

華やかに飾り付けられたテーブルの前まで届け、とりあえずカグラはエミリアから少し離れる。代わりに小さな少女を囲むクルーたち。中央で渦巻く混乱が心地良いなあ。

あの子が気付いていないのが心底不思議なんだが、今回エミリアがやったのは決して命令違反ではない。命令を終わらせた後、追加で自身の判断から事態の收拾に向かったというだけである。保護者

的立場から言えば頭が痛い、褒められこそすれ、結果としては怒られるいわれなどない。

ガーディアンズ直々に礼が入ったというクラウチの言葉に、面映ゆそうに笑うエミリア。実に微笑ましい。

そしていつ気付くかな。その質量たつぷりな髭の下に輝く貴金属に。

「カグラ、もう良いかい」

「はいよー」

さて、保護対象を送り届けたは良いが、自分にはもう少し後片付けという名の仕事待ち受けている。

少女の笑みを記憶野に刻み付けて、カグラはリィナの呼び声に身を翻した。

番外：不満っていうか

通路を足早に進みながら周囲を見回す。色々探したのに、どうもお目当てが見付からない。挨拶を向けてくれる知り合いに手を振り返し、エミリアはうむむと小さく唸りを上げた。

機嫌は悪くない。むしろ良い。

なんてったって、と思いを馳せると、だらしなく頬が緩むのを自覚した。慌てて顔を引き締めた——つもりだったんだけど、どうも上手くなかったらしい。通行人に微笑ましそうに見送られて赤面する。

ちりり、と小さな音が耳元を飾った。涼やかな金属音が心を軽くする。これ以上耐えるのは無理だと判断したので止めた。ふへ、と口から漏れた不気味な声に我ながらドン引きする。

クラウチに、ずっと怒られるばかりだったまさかのクラウチに、貰ったのだ。まさかの誕生日プレゼントを！

すっごく可愛い、羽のイヤリング。ピンク色に発光するフォトン仕込みの品である。もう気に入って気に入って、毎日毎日耳元に輝かせてる。

ついでにあのオッサン、何だかんだで自分の買ったプレゼントも着用してたのだ。シャツの襟から覗く銀色にきらめくネックレスは、自分で言うのも何だけど、色黒のオッサンによく似合ってた。

暴走は怒られなかったし、プレゼントは貰えるし、プレゼントは貰って貰えたし、みんなに祝って貰ったし。自分の幸せはきつと、この時のためにずっと取ってあったんだと心底思う。

ただ、問題なのは。

「肝心なときに、何っでいないのかなあ、カグラってば……！」

あんまり嬉しくて、満面の笑みで振り向いた先には空気が空しく佇んでいるだけだった、あのときの恥ずかしさといったらない。てつきりカグラがニコニコ笑いながら立ってると思ってたのだ。

部屋はどこ探してもいなくて、ちよつと寂しかった。別にクラウドやウルスラだけじゃ満足しないって話じゃなく、今一番近い人に祝って貰いたいっていうのは人として当然だと思う。

「相棒、なんだからさあ・・・」

それとも、やっぱり相棒なんて思ってるのはエミリアだけなんだろうか。

暗い考えに偏りそうになって、慌てて首を振った。あたしは幸せ、あたしは幸せ！と危ない宗教のようにぶつぶつ唱える。

話によると、ほつぺたがこぼれ落ちるほど美味しかったケーキはカグラの手配だったらしい。支払いはクラウドだけど。でも用意に参加してくれてたってことは、どうでもいいってわけじゃない——と良いな。

ほらまた悪い語尾が付く。

「ううー・・・ゼーんぶカグラが悪いんだから・・・」

やっぱり一言文句言わなきゃ気が済まない！ということど、エミリアはひたすら施設内をぐるぐるしている。

部屋にはユートがゴロゴロしてただけだった。カフェではクラウドが潰れてたし、事務室ではウルスラとチエルシーが仕事の話をしてたから慌てて逃げ出てきた。あの二人の話に巻き込まれると、いつの間にか着せ替え人形と化す自分がいるのだ。船はなかったけど、使用者はカグラじゃなかったから関係ないし。

首を捻りながら曲がった角の先でやっと望む姿を見付けたのは、探し始めて1時間が経過した頃だった。手元のデータを見ながら、

チューインガムよろしく苦虫を噛んでいる。

仕事中だとしたら声掛けない方が良さんだろうけど、でも1時間も探してたんだよね。

躊躇いにふらふらと右往左往する不審者に、ふとカグラの目線がこちらを向いた。

「あれ、エミリアどしたの。こんなところで」

「何それ！お互いさまでしょ！」

自室とは正反対に位置する居住区域に、普通は用なんて全くないじゃない。

「こいつが今回の仕事のデータ持ってるってんで、取りに来たんだよ——ああ、ありがと、これ貰ってくわ。用済んだらデリートしときゃ良いよね」

じゃあまた、と別れを告げながらエミリアの背中をそつと押す。

感じの良い事務員さんは見たことがあったから、同じように挨拶を置いてきた。

区画を移動し見慣れた通路へ。見慣れた人間が声を掛けるのに適当に対応するカグラは、端末に読み込ませたデータに落とした目を離さない。

同じデータをウィルスチェッカーのように見回り、ペンを手にポケットを数秒漁る。紙を探していたらしい。結局見付からなかったみたいで、腕の内側に黒い線を走らせた。

実に原始的なメモを残していくカグラは、総じて言えば。

「あのさ」

「んー」

生返事と一緒に動いた視線は、やっぱり端末の上だった。

「忙しい？」

「——っん？」

きょんとした視線がようやくエミリアに向かう。ぱちぱちと瞬きをして小首を傾げた。

少し悩んだ後に返ってきたのは、肯定。

「依頼ってわけじゃないから必須じゃないんだけど、まあ、仕事の前準備というか。調べといた方が良いかかと」

何だかあやふやだった。中身については何も漏らさない。

カグラって意外と、聞かれないことは答えない人だ。余分な茶化しは多いから口数多いのは確かなんだけど、自分の情報とか、そういうのは不用意に出さない。傭兵ってみんなそうなんだろうか。

「それって、手伝える？」

「今ところは特に」

途端に慚然としたエミリアに、カグラは苦い笑いをこぼした。眼下の金色の細い髪を無遠慮にかき回す。ちよつと、鳥が住めるようになる！

「事態が進展するようなら手伝って貰う。でも実は手伝って貰う事態に発展しないのが最良。私の勘違いならもつと良い」

よくわからないけど、とにかく今は何にもできないみたいだった。

仕事に関係あるんなら、自分の誕生日どころじゃなくても仕方ないと思う。ないがしろにされるのは寂しいけど、うん、仕方ない。可愛い罵声はぐつと堪えて我慢の子してこそその大人である。自分に言い聞かせて、無心に歩を進める。

いつもならカグラの部屋の前を通るついでに寄って行くんだけど、今日はさすがに止めて、大人しく自室に戻ろう。我慢の子にはなれども、心の沈下は妨げられないのだ。

じゃあねー、と我ながら覇気のない声で別れを告げ——ようとしたエミリアに。

「あ、ちよつと待った。すぐ戻る」

カグラは一声置いて、さっさと部屋に入っていつてしまった。

ガタガタと高らかに響く家具の悲鳴。ガラスの割れるような音もした。おい teme エまた人の部屋勝手にリフォームしやがったな、という悲鳴じみた叫びが耳に届いた気もする。これはきつと幻聴かな。自分みたいな良い子が怒られるような理不尽、この世界にあるわけないし。

数分して、くたびれた面持ちで戸を開けたカグラから、エミリアはそつと目を背けた。

リフォームは、しました。だって心がちょっと荒れてたし。仕方ないよね。ちよつとしたストレス解消くらいしたっていいじゃんね。「・・・まあ、今回は特別に広い心で許してやろう。次はないと思え、若造」

やだ、何その剣呑な眼差し。あたしは優しそうに笑ってるカグラが好きだな。

「プレゼント代わりに脳天に拳でもやろうか？」
「ごめんなさい。」

「――て。へ？」
反射的に頭を両腕でガードして、言葉を理解したと同時に視線だけ覗かせる。

呆れ顔でエミリアを見るカグラの右手には、小さな袋がささやかな佇まいで座していた。

エミリアの手のひらに収まるくらいに小さな、変わった模様の巾着袋。可愛いお花が散りばめられた赤い布からは、何となく落ち着いた香りがする。

「プレゼント？」

「プレゼント」

そろそろと右手を伸ばして袋を指先で拾う。

なお、この間決して左手は頭から退かさない。自分は学んだのだ。

カグラは人の隙を逃さないハンターだと。

「あんな、エミリア。隙狙おうと思ったら、隙のない部分探すのが難しいくらい隙だらけだからな、お前」

なんということだろう。まさか自分の精一杯が紙防御だとか。逆にカグラの貫通力が凄まじいってことにはならないかな。

「ならない」

そっか。それは誠に遺憾です。

「えっと、開けていい？」

「どうぞ」

小さな肯きに、早速紐を解く。リボン結びって上手く抜けないとコマ結びに匹敵する固さに進化するときあるよね。

壁に寄っ掛かって経緯を見守るカグラに、うっかり刃物とか借りそうになりながら中身に到達した。

ころりと袋からこぼれ出る、小さな中身。

「何これ、可愛い！」

手のひらを目の前まで上げて、まじまじと観察する。

木彫りのキツネがお座りしてる。まん丸い赤い玉に片前足をちゃんと置いた姿は、微々たる大きさに反して凄く精巧だ。よく見ると玉は一定の色じゃなくて、ゆらゆらと揺らめいているように見えた。

「かわいいーい・・・なに、これ？」

「お守り。故郷の一部じゃキツネは守り神なんだよ」

カグラの故郷ってどこだったけ。聞いたことあったかな。

「加工しようかと思ってたんだけど、良いの思い浮かばなくて結局袋に入れるだけになっちゃった。イヤリングがそれで、ネックレスが木製つてのも何だしね。やだった？」

「ううん、これで良い！すっごい嬉しい！カグラ、ありがとうッ！」

ネックレスで着けてるのも捨てがたいけど、自分の挙動を考える

と傷付けたりしちゃいそうで怖い。そんなのもつたいない。

そんなに喜んで貰えりや光荣だ、と笑うカグラに、心が感動を伝え震える。この嬉しさをどう伝えたらいいんだろう。言葉の伝達じや難しいと思う。カグラの鼓膜に届くまでに、空中に音波に込めた感謝の意の多くがこぼれ落ちるのは考えるまでもないのだ。
となればやっぱり、行動だよね！

「お礼に、お部屋、もつと素敵にしたげるねッ！」

満面の笑みを刻んで感謝行動の予定を告げたエミリアに、一体何の不備があつたっていうんだろう。

脳細胞の20%が破砕される勢いで揺らされた頭部の痛みをカグラへの呪いに変換しながら、知恵熱が出そうなくらい、エミリアは真剣に考え込んだ。

5 - 1 足跡を追う、

部屋の端末から依頼の一覧を眺めながら、誰がどう見ようと嫌そうな顔をしていると断ずる表情を顔面に貼り付ける。さまよわせた左手がテレビのリモコンに辿り着き、スイッチを押した。

途端に画面を締める、女性の姿。

『はぁーい。グラールチャンネル5ニュース、ニュースキャスタ
ーの、ハルです！』

紫の豊かなツインテール、可愛らしいヘソチラ、細すぎない庇護欲をそそる二の腕。チェックのミニスカから健康的に伸びる白い太股。ロングブーツは絶対領域を発生させる嫌らしい装備だ。確実に男心を打ち抜くべく狙っている。

実に心を癒す姿と声に表情を弛緩させた。プラスマイナスで無表情になる。

『グラール各地で発生している謎の集団失踪。その搜索依頼が後
を絶ちません』

言葉を拾い、再び一覧に目を向ける。他の依頼を押し退けて居並ぶ、無数の搜索依頼。

気紛れに一つを開いてみれば、突然失踪したうちの息子を捜してくれ、とのこと。ちらちらと他にも目を通すと、搜索対象者は10代から50代までと幅広い。

ニュース曰く、失踪者には記憶がなく、原因を究明しようにも証言がないため進展はなし。ただ。

『先日の文化保護地区の襲撃において失踪者を統率する人物が目撃

されており、重要参考人としてその足取りを調査中です』

失踪者。記憶がない。何て言ったかな、あのオッサン。文化保護地区の襲撃つてのは、改めて考えるまでもなく、この間のユートの集落焼き討ち事件である。

つまり、統率者とは、あの痛々しい厨二病のことだろう。厨二病つてのは重度の精神疾患なのだが、果たして精神薄弱として免罪されたりするんだろうか。閑話休題。

うむ、また面倒な事態になりそうだ。

「オラー、カグラ！お前、収集掛かってんだからさっさと来いッ！」

肺から空気を追い出して机に突っ伏したカグラに、謂われのない怒鳴り声が届いた。緩慢に背後に視線を流す。

そこには肩を怒らせて仁王立つ、モジャモジャした暑苦しいギヤランドウの姿。室内の体感温度が3度ほど上がった気がするので、後ろ向け後ろで即座に帰れ。

「うるせえなあ。発声器官をちゃんと進化させきってから人語で収集掛け直せ。『おいカグラ、今すぐ来い！』なんて指図に必要な要素の半分以上が見当たらない原人語に従えるほどヒューマン止めてねんだよ」

端末を終了させる。

「・・・なあ、前から聞きたかったんだが、お前の暴言ってどこから生成されてんだ？」

「神とかその辺の得体の知れない、いるかどうかも分かんないモンから天恵が降ってきて、そのまま口から出ていくような違うような」

ちらりとクラウドの視線が動画に引き寄せられたが、構わずテレビの電源も落とす。

「まずは無駄に回る脳味噌の中の電波受信機を止める。駄目なら口を閉じる」

「アンテナは自動受信体勢な上、私、腹話術とか凄いで得意だよ」

「——お前のスイッチはどこだ。俺が直々に切ってやる。二度と起動しないようにだ」

「クラウチのアンテナは全身の毛という毛なんだよね。万が一毒電波を受信すると危ないから、ガムテープ剥がし殺してやろう」

じり、と足を引きずるようにして距離を詰めるクラウチを迎撃するべく、椅子との設置面を僅かに離す。最優先出現武器をナックルに切り替えた。

数秒の睨み合い。

不毛な視線のバトルの末、勝利を納めたのは当然カグラだった。視線を感じなくなったから逸れたんだと思う。多分。基本的にクラウチの視線の動きは半分以上が勘なんだ。表情も分かりにくいから、いつか安全装置切ったヒゲ剃り持って突撃してやりたい。

「いや、実はだな」

気を取り直したように話題を切り出す。ベッドに遠慮なく腰掛けて向き合ったヒゲに合わせ、椅子を移動させた。

「さっきのニュースは全部見たか」

「見た。失踪者がどうのって奴でしょ。ついでに、うちに失踪者搜索依頼が大量に舞い込んでるのも確認した。数件は受注済みで、現在クエスト中だったのも確認した——ちょっと、毛が落ちると困るから、ベッド座るんなら微動だにしないで貰える？」

「寝転がってやろうかこのアマ・・・あー、で、だな」

大変言い辛そうに視線を足下に落としたクラウチを無言で促す。生憎、価値として時に勝るカグラの貴重な時間は、ヒゲを眺めるような無駄に費やすほど有り余ってはいないのだ。

剣呑な視線に耐えられず、渋々切り出される話題。一言で簡潔に

纏めると、失踪者搜索依頼に出かけたリトルウィング社員が、更に失踪したとのことだ。

何それ。

「何そのミイラ取りがミイラ。まーた信用問題の危機か。体制見直したら？」

「くっそ、反論できねえ・・・！」

先日的事件を鑑みれば、失踪者が犯罪に巻き込まれる可能性は高い。軍事会社の社員が犯罪荷担とか、最悪倒産の危機である。記憶、自我の有無は、結果に全く関与しないのだ。

「消息を絶った場所は、当然わかってるんだよな」

「そこまで無能じゃねえよ。モトウブの雪山だ。エルバルス雪山」雪山と聞いてカグラの顔が歪むのに、慌ててクラウドが後を告ぐ。「すぐに救援を送りたいんだが・・・下手な奴じゃ二次災害の可能性は捨て切れねえ」

正論である。まあ、ミイラになったミイラ取りを搜索に行ってたミイラになったってんじゃ単なる負の連鎖。それはカグラも望むところではない。

そうならなっただ、搜索対象が倍加してめんどくさいだけだし。

「良いよ、どうせ専門分野だ」

「悪いな」

本当に悪いと思ってるらしい。

軽くではあるが神妙に頭を下げたクラウドの旋毛を何とはなしに見て、そういう場合でもないかなと準備の為に動き出す。一応こっだけ毛が溢れてても、切り替えし場所ってあるんだな。

「ところでよ」

「何、追加情報？」

振り返ると、無邪気な目をしたクラウドが首を振った。

「何だこの頭おかしい部屋。お前、趣味おかしいんじゃないか」
流れるように振った腕の先から巨大な鈍器が出現。寸分の狂いなくクラウチのこめかみを殴打して、虚空に溶けて消えた。ベッドに重い肉が沈む。スプリングの抗議に応えるべく、毛の生えた肉塊を蹴落とした。

お前が言っな。お前だけは言っな。

さて、雪山である。覚悟はしてたけど、もの凄い直球に雪山。どこを見ても雪がないところがないっという。

例えるなら二ホンにおける真冬のホツカイドウエリア。凄いよ。

映像でしか見たことないけど、家屋が倒壊するよ。

「さむい」

「いたい」

身を寄せ合って吹雪に耐えるカグラとエミリアに、ユートの不思議そうな目が向けられる。こら、エミリア、マントに入ってこようとするな。前を開けるな！

「そんなに寒いかな？」

お前みたいな原人には分かるまいよ。気温の機微ってのはな。

ついには外套を剥ぎ取るうとしてきたエミリアの顔を雪に埋めて、しっかりと前を掻き合わせる。寒いのがわかって薄着で来る方が悪いのだ。心は痛まない。

どうせ戦闘に入ったらてるてる坊主状態ではいられないのは分かっているが、暖を取れるときに取っておいて何が悪い。暑い方が嫌いだが、だからって寒いのが好きなわけじゃないのだ。人間だもの。

つぶらな瞳でこちらを見ていたユートが、ふと首を巡らせた。

「だれか来るぞ」

こういうとき、野生の生き物が一人いると便利である。雪の上は足音がしないので生物の接近が分かり難い。更に吹雪とか、カグラのアンテナなどは神経研ぎ澄ませてギリギリ感知できる程度の性能になり果てざるを得ない。

倣って振り返ると、見覚えのあるシルエットが、見通しの悪い視界に入り込む。

「あれ、ルミア。先日ぶり。後処理ご苦労様でした」

決して、肩パットの尖り具合と特徴的な髪留めから判断したわけでは。あるけど。

「カグラさん、ですか。こちらこそ、先日はご協力ありがとうございました。……こんな場所で一体何を騒いでらっしゃるんですか？」

騒ぎたくて騒いでるわけじゃないけど。

エミリアの形の良い後ろ頭を踏み付けていた足を退かして——ブーツは一時的に収納してある。靴下一枚はクソ寒いのに優しさを忘れない自分を褒めてあげたい——装備を再装着しながら首を傾げる。

「そういうルミアこそ」

「見回りです」

妙に力のこもった声。違和を覚えるが、突っ込むほどの理由は浮かばなかった。とりあえずスルーで。

「ここは危険な地域です。用がないのなら、早く退去して下さいますか」

「あんった！」

白い粉を撒き散らして少女が酸素と再会する。うーん、美白。早く顔拭かないと、霜焼けできるよ。首から下に関してはシールドラ

インが労働してるから問題ないだろうけど。

元気に起きあがったエミリアは、ズボズボと雪に足跡を付けながらライバルへと詰め寄った。足が短いので、いちいち埋まってどうにも歩き辛そうである。

「毎度毎度、突然現れてはイチャモン付けて！アタシたちにはね、依頼っていう、れっきとした用事があんの！」

依頼受けた連中と、依頼内容の人間の搜索が今回の任務だ。

エミリアの言い分は正しくはないけど間違っではない。自分とこの不始末付けに来たんだよって大きな理由が抜けてるだけで。

「・・・依頼ですか？」

こんな場所で、という心の声がダダ漏れな声。疑惑も露わに眉を顰めるのは止めてくれないかな。煽り耐性0の子がここにいるから。

案の定更にいきり立ち、状態異常耐性0の子供がバーサク状態で声を張り上げた。

「最近流行の搜索依頼よ！」

「誰のです？」

「ウチの社員――」

あ、という顔でこちらを振り向くエミリア。ちょっと気付くのが遅かったな。

幸いにも相手はガーディアンズだ。しかも優等生委員長タイプのルミアは、人の悪口をばらまくような人間ではなかつとほぼ断言できる。リトルウィングの名前が地に落ちるような振る舞いはいはない。

恐る恐る馬鹿が視線を戻す先で、委員長は眼差しを雪原に投げて某かを吟味していた。

口を開いたのは、エミリアが緊張感に負けて痺れを切らす10秒後のことだった。

「・・・わかりました。では、あなたたちがエルバルス雪山を進むことを許可します」

「なにをえらそうにー」

学習してんのかしてないのかわからん奴だな。小声だろうとこの距離なら聞こえるから黙ってる。

「ただし」

案の定、髪から覗く白貝は聞き逃さなかった。氷の視線をくれながら、罪人に判決を続ける。

「ガーディアンズとして、私も同行します」

即座に反論に右手を掲げたエミリアを、再び雪と接吻させた。雪崩を心配する叫び声は、深々と積もる白銀に吸い込まれて消える。

鬼の首を取ったかのように仁王立つルミアをしばらく観察して、ふとした考えが脳裏をよぎった。受け入れるにはあまりにも早かったと思う。むしろ都合だともいうような反応。

「・・・はーん」

「な、何ですか？」

失踪者の搜索が、民間企業にのみ依頼されてるわけじゃない。むしろ、人助けの名門たるガーディアンズこそ集中しているはずだ。つまり、ガーディアンズも同じってわけだ。

「いやー、べつつにい」

「・・・くつ・・・」

勝利者が敗者に転落する瞬間は気持ちがいい。気付かれたことに気付いたルミアが、顔を歪めて歯を悔い締めた。せめてもの武士の情け。エミリアには告げ口しないでおいてあげるよ。多分すぐバレるだろうけどね。

「カグラ、話おわったか？」

なお、この間にユートが何をしていたかの詳細は羅列すまい。例えるなら、子犬は雪が大好きだよねってことだ。背後の雪原が光を

乱反射しまくっていることで例えの正確さの証明終わり。

上気したバラ色の頬。少し乱れた呼気を整えながら、ユートは山の奥を目で示す。いや、息切れ起こすほど遊び回るなよ、お前。

「この先から、いやな感じがするぞ」

拳げ句、恒例のこの先嫌な感じ注意報発令である。事実は事実なんだし言わなきゃ良いってわけじゃないけど、口に出されると何か嫌だな。

了解、と一言返して白い獣道を進み始める。未だ憚然としたままそつぽを向き合う少女二人と、意気揚々と続く少年。雪に取られる歩行に不安が残ることを事実として確認して。

前に向き直ると、大きな雪玉が転がってきていた。

「総員退避ー！」

「いいいい言われなくてもするわよーッ！」

嫌な感じってこれのことかな。これのことだと良いよね。

5 - 1 足跡を追う、（後書き）

茶色いモリゾーで遊びすぎたせいでちょっと短いです。
代わりに、割り食って次はちよつと長めになるかと思っています。

5 - 2 ただただ長い迷宮は、

さて。

「おつかしいねー」

「いや、おつかしいねー、で済まされても困るんですけど・・・」

「困られても、どうしようもないし」

「そうだけどさあ」

「どうしてSEEDがいるんだ？」

ということである。

雪山を足早に踏破する間、襲い掛かって来る敵の中に、多数のSEEDが混ざっていた。考えるまでもなく異常極まりない。

何せSEEDは3年前の争いにおいて、全て駆逐されているはずだったのだ。単純に生き残りがいたんじゃないかとか、そういう問題じゃない。

SEED。グラール太陽系に侵略を目的として飛来したその謎の生命体は、宇宙区間を自由に飛行し、惑星表面やコロニーなどに落着。土壌や原生生物を侵食し、宿主を変化させる。その存在に正確な分類方法はない。宇宙から襲来した悪意。その曖昧で具体性の欠片もない表現こそが、SEEDという存在の異常性を表している。

SEEDはある日突然世界に現れ、種族で大きく割れていた世界の意志を一つにした、ある意味での功労者だった。激闘の末、元凶を絶った後、それらは封印という手段により完全に姿を消した。はずだった。

「倒した後に死体が消えるなんて、どういことなのかしら」

「何ものこらないな・・・死んだあとには、いつも気配が残るのに・・・」

「いや、気配が残るっていうか、死体が残るんだからね、本来は」
どれだけ目を凝らしても、塵一つ残らない消失っぷりだった。
これが手品なら、ブラボーと高らかに唱えるところだ。しかしこ
の場の現実においてはマジシャンなんぞ存在しないのである。

背後を振り返っても、SEEDが荒らした雪は均されてはいない。
それは確かに現実において戦闘が存在したという証だった。

まあ、考えても仕方ない。

「というわけで、現在のちょっとした問題は、ここで一見行き止
まりだったことだが」

「ちょっとした問題かなあ」

洞穴に入ったら壁しかなかった。そこそこ広い洞穴の奥は、しつ
とりと濡れた壁面が鎮座している。

何となく触ったら手が凍り腐るかと思ったので、エミリアの首筋
で暖めておいた。もうあんな冷たいのに触りたくない。

別にワガママってわけじゃない。冷たいと手が悴んで、動かなくな
るだろう。動かなくなると戦闘能力が落ちるだろう。それはやっ
ぱりいけないことだよなという話。

あと純粹に冷たいのは嫌いだ。熱いのも好ましくない。いや、ワ
ガママってわけじゃないんだよ。本当だよ。人として当然の心理な
だけで。

「道を間違っただんでしょか」

「んー・・・」

不審気にカグラを見るルミアに返答をせず、キョロキョロと周囲
を見渡す。

「あの？」

「人がさ」

とりあえず奥の壁がただの岩だということは確認していたので、

背が付くギリギリまで身を寄せた。決して背は付けない。濡れると冷たいし、もし濡れなくても冷たいのだ。

「通った形跡はあったし、そう古い跡じゃなかったの……足下はわかんないけど、つまりわかんなくしてあるってことで……」
呟く言葉は、答えではなく自分に対する確認だった。ようは独り言である。

目を細めて凝らしても、どうも上手くいかない。隅から隅までペタペタ触っていけば解決するんだろうが、念を押す。凍える壁を触るのは嫌だ。

「迷いのある感じでもなくて——エミリア、ちょっとこっち来い」

「何よ？」

呼び寄せた少女をくると回す。薄い両肩を掴み背中から固定。

訝しげに見上げる視線を正面に向かわせ、数秒の待機。

あっけなく結果が出た。

「あれ、あそこの壁、ちょっとおかしくない？」

「でかした！」

一撫でで細い金髪を鳥の巣に変え、示された部位に駆け寄る。背後で上がった怒声は、急に聴力が弱くなったのか内容が把握できなかったので、無視した。

苔を擦った跡が不自然に消失している。

腰からナイフを引き抜き、境目に腹を当てた。苔を削るようにスライドさせると、消失点に到達した途端、刃が壁に埋まり込んだ。

「壁がやわらかいのか？」

「いんや。そもそも壁がないんだよ」

精度の高いホログラフを壁面に投影し、巧妙に通路を隠していたというわけである。

答えながら空間向こうで緩やかにナイフを左右に振って、何ら異

常がないことを確認。念のためグラブを装着し、ゆつくりと腕を差し入れてもやはり問題なし。ヒョイと頭を突き入れる。

巧妙に隠された先は、少し様子の変わった氷壁の通路だった。明らかに人の手が入った跡がある。そしてその先には再度の雪華舞い散る外界。行きたくない。

「ど、どうしてわかったの!？」

「色彩パターンのズレが妙に論理的じゃん。まあ、これだけ情報密度の高いホログラフだと、電波の途絶が起きてもおかしくないけど」

エミリアは小学生の知識を再確認するみたいに言わないで、自分の認識力の高位次元さを自覚しようね。

この場合、驚いているルミアが正常。ふうん、と頷いているユートは、理解していないようで正しく理解していないが故の聞き流しだ。個性色々で何よりである。

とにかく、立ち往生していても寒さが身に凍みるだけのことなので、渋るエミリアの尻を蹴飛ばしながら先を急ぐことにする。

やかましい、寒いのが己だけだと思うな。ルミアの静かさを見る。あれは多分寒いって言ったら余計寒く感じると悟り切ってしまった仏の静謐だ。見習え。

「カグラ、あそこにも洞窟があるぞ」

「んー、位置的にはあれっばいね。ナイス視力」

岩肌が露出する坑道は、今度は人の手が入った事実を隠そうともしない潔さで掘り進まれていた。

敷かれたレールは幾手にも別れ、アリのねぐらのように入り組んでいる。適度に柵が置かれているから良いものの、そうでなければ永久にさまようところだった。主に方向音痴たる私のせいだ。

「このフォトン供給のロジックパターン・・・インヘルト社の研究施設にあったのと同じだ」

「エミリアって、もしかしてそういうのいちいち全部解析した上に覚えてんの？」

感心するより、単純にめんどくさい子である。途端に殴り掛かってきたエミリアをいなしつつ先へ進む。

坑道は、途中、妨害なのか偶然なのかは判断に付きかねるが、マシナリーの突撃を食らった以外はごく順調な行程だった。

そして着いた先は研究所。この辺りは巻いて行こうと思う。もう人為的な誘拐事件だったんだねという証拠をこれ以上積み掛けられるのにも飽きたし。隠しておきたいんなら、投げやりにならずに最後まできっちり隠しとけてんだ。

研究所で足の生えた箱含むガードマシナリーに襲撃を食らうこと十数回。二足歩行型マシナリーのビード・グルーデに銃口を向けられること数回。人型。箱と違って人類のロマンが凝縮されたフォルムには心が踊るが、それを生身で破壊するのもまた一興だよ。とはいえ仕事中だと妨害はあんまり嬉しくないの、できればボーナステージみたいに放置されてる無抵抗な奴をボコボコにしたい。

閑話休題。

つまり言いたいことはただ一つだ。

長い。

「飽きた！」

「もう帰ろうかぁー」

「・・・言っておきますけど、帰りも同じルートを辿って帰ることになるんですからね」

冗談だよ。睨まないでよ。

しかし険が薄いことから、気持ちとは分かって貰えているらしい。

行程が凄いい長い。意気揚々とマシンリー破壊に向かっているのって元氣少年ユートくらい。カグラたちのネガティブ感情を吸収でもして回復してんのかってくらい元氣。

「とはいえ、正直氣が滅入るのも確かですよね・・・失踪者の反応も全てここで途切れているし」

肺に在住する全ての空気を強制撤去して、げんなりとルミアが泣き言を漏らした。駄目だよルミア。ユートがまたより一層元氣になるから。

手元の端末を操作する少女に、リトルウィングの賑やか担当が首を傾げる。端末が、一体何の反応を拾っているのかということだ。

「・・・ああー、もしかしてえー」

残念。折角黙っててあげたのに、自ら事情をばらしてしまった。いくらしっかりしているように見えても、しょせんは子供である。エミリアの声にきよんとする様が微笑ましい。

気付かれたことに気付いて、ルミアの顔が青くなり、続いて目視にして39度の高熱を耳朵まで湛える。

「あんとんガーディアンズとも失踪してんだあ！」

誇らしげに放たれたエミリアの致命の一撃。

続く騒ぎは、まあ想像の通りだとだけ表現しておこう。

施設から再度洞窟へ。かつての坑道は、また寒い。

施設が暖かったとはいい難いが、少なくとも前から後ろへ遠慮なく通り抜ける、空気の読めない冷風だけは存在しなかった。てっ

きり施設の奥地でカタが付くのかと予想していただけに、この冷気は心まで凍てつかせる。帰りたい。

「カグラ」

本当にユートレーダーは優秀である。猪突猛進な性癖とお花畑な脳さえなければ万能だが、欠点が致命的で除去できそうにないのが露骨に残念。

注意を示す一声に導かれ、そこかしこの岩陰から人影が躍り出た。腕の立ちそうな人間が並ぶ方向からを忌避し、少女二人を背後に押しやる短い間に、周囲をぐるりと囲まれる。

明らかな敵意を湛える瞳に、カグラは躊躇なく武器を構えた。

「止まれ、殺すぞ！」

威圧を掛けると、斧を手に踏み込もうとしていた大柄な男が、怯えを纏い静止する。隣の女はヒイとか細い音を発して3歩下がる。失礼な。いきなり取り囲む野蛮人に引かれるほどじゃないよ。

「ひ、こ、ころさないで！」

威嚇だよ。殺さないよ。

「クソッ、SEEDの野郎共、一体どれだけいるんだ!？」

誰がSEEDだ。殺すぞ。

「ひょつとして、幻覚でも見てるのかな・・・？」

「そうかもねえ」

団体さんの服装には、基本的に統一性はない。ただ、10人ほどいる中の2人だけ、高らかに存在を主張する肩パットを装着していた。ガーディアンズの社員である。

「あれ、搜索対象者？」

「ええ、間違いないです。」

指さす方へ確信を込めて頷くルミア。

いつちゃった目をした肩パットは両手に短銃を構えている。更に

もう一人のいつちゃった目をした肩パットは、腰溜めに置いた出力機にフォトンを増らせ、細い鞭を形作った。

視線をいつちゃってない方の肩パットである隣の少女に戻す。油断なく奴らを牽制する透き通った目を見つめて、一拍の後、口を開く。

「うつかり殺しちゃっても、まあ、大丈夫だよね」

「何がどうなると大丈夫だと思いますか……！武器のフォトン出力を、スタンモードにして戦いましょう！」

「持ってない」

「……え？」

吼えたルミアの表情が止まった。構わずに続ける。

「フォトンのみの構成武器、持ってない。何をどうやっても金属部の当たり判定で撲殺になるよ」

証拠とばかりにストックを半開きにすると、固定された視線が信じられないものを見たかのように震えた。いや、視線だけではない。壮絶な寒気に突然襲われたように全身を震わせる。

「な、なぜですか！あれだけの武器を切り替えて戦っているのなら、一つくらいはあるでしょう！？」

ついでに怒鳴る声も震えているが、視線の震えだけが静止して、ぴつたりとカグラの目を見据えた。真剣さが怖いので、できるだけ自然に見えるよう、視界を敵で埋める作業に移行する。

「いや、金筋が見える無骨なのってかっこいいじゃん。同じ性能なら、愛用武器が見た目重視になるのは仕方があるまい？」

実は少々の性能差であれば見た目を重視する派のカグラであるが、今は身の安全の為に黙っておこうと思う。

「あああああああ、もう！さすがエミリアのパートナーだわッ！」

「ちょっと、聞き捨てならない侮辱！人としての尊厳を損なう言動、撤回を要求する！」

「カアアアグウウウウラアアアアアア！」
全然参加してなかったエミリアまで何故だか悪鬼と化し始めた。

ええい、つまりは手加減すりや良いんだろう。任せとけ。

自分には徒手空拳という素晴らしい技術がある。首筋に手刀ぶち込む方式取れば、90%くらいの確率で気絶に追い込めて安全だ。残り10%は入り所が悪くてお亡くなりになるかもという可能性なんだけど。

見るは十全とばかりに飛び出したカグラを押さえられる者などこの空間にはいなかった。

行くぞー！という勇ましい掛け声に、ユートが威勢良く応え、エミリアが良いのかなあと呟き、ルミアは頭を抱える。頭抱えてて捕獲に乗り出さないということは手法を容認したと受け取るが、よろしいよな。

となれば、次々と手刀打ち込んで気絶させて確保。こんなこともあるつかと大量にストックしておいたワイヤーで亀甲縛りに転がしておく。

勿論女性には優しくあるべきと常々主張している紳士の自分であるから、股縄を掛けるのは、股間に余分な質量をブラ下げている人間だけに済ませておいた。代わりに胸部は容赦しないが。

行方不明者の人数を鑑みるに、ノコノコ現れたバカの他にもまだいるはずだ。恐らく同じくそこの岩陰とかに潜んでるんだろう。

相手は大体が軍人やら傭兵。一匹逃すと他が逃げる可能性があるから、黒い悪魔退治みたいに虱潰しに撲滅するべきである。

ようし、油断せず行こう！

岩陰を覗き込んで手刀を繰り出す、ある意味楽しい状況が一変したのは、手持ちのワイヤーの底が見えたくらいのことだった。今まで追撃者に背を向けて逃げ出していた馬鹿共が、逆走を開始して果敢に向かってきたのである。

隣をすり抜けようとする愚か者の首をアックスボンバーで捉えながら坑道の最深部へ辿り着いたカグラたちを迎えたのは、何も無い空間を凝視する失踪者。いや、今更なんだけど、見つかったんだから失踪者に元、という頭語を付けるべきだろうか。どうでもいいけど。

虚空に向けて恐怖を滲ませた彼らは、じりりと砂を靴に食ませて後退さる。

「カグラ、あれ、何だ？」

「私に聞かれても」

空間が歪む。光学迷彩を解くように、視界に質量が生まれていく。

空中に現れる、エミリアの身の丈ほどもあるつかという鉄塊じみた刃。何本もの角をモヒカン配列で生やす、サイのような生物が大地を踏み締め、揺らす。青白い光が嘗めた傍から全貌を現していた。

「うつわー……」

放心したエミリアの暢気な声の気持ちはよくわかる。やばい、でっかい。

サイの胴から、光は上昇した。中空の刃からも光は延びて、丸太のような腕を再現。瞬く間に燐光は交差し、更に上部を構築する。

モヒカン角のサイと結合する、同じくモヒカン角を生やした黒い人型。

総合してSEED。勘弁して下さい。

「あれは・・・SEED・アーガイン!?」

「すごい、大きいな!」

「あの、今の、何にもないところから現れた——なーんてわけ、ないよ、ね? ハハ・・・」

「ハハハこやつめハハハ。現実見ろ」

「ううう・・・」

はしゃぐ少年の脳天に拳骨を落として鎮静化。現実に向き直る。

身長にして目算カグラ3人分。体積にして30カグラ。質量は知らんが、轢かれたらハンバーグのタネを撒き散らしたみたいな惨状になるだろう程度であることは疑いようがない。

ちなみに走る剣筋に直撃されたらどうなるだろう。すっぱり2等分されるなら幸せそうだ。多分、刃物が巨大すぎて人間に対してはむしろ鈍器。斬るより引きちぎる派閥じゃないかと推測するがどうだろう。剣に腸引はらわたつ掛けれたまま振り回される自分をすっかり想像して落ち込んだ。

蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う失踪者だった人たちは見逃すことにした。

目の前の脅威に比べたら、数人程度の失踪はどうでも良いです。何事も自分が無事だという前提が大事である。

「光属性は生憎、持ってきてないんだけどなあ・・・」

「本当偏ってますよね、カグラさん」

だって、光属性ってキラキラキラするエフェクトが眩しいんだもの。魔法少女みたいで恥ずかしいし。思い掛けず変身したらど

うする。

SEEDである以上闇であることは間違いない。そして寒いので氷武器とか構えたくもない。あと炎って何だか光の遺属っぽいよね、という至極論理的な理由により、炎を纏うナツクルを装填。本来自身の纏う武器の属性はフォトンバリアにより自身には感知しないんだが、何となく暖かくなった気がしないでもない。途端にやる気が漲った。

「足止めよろしく！」

「さ、作戦会議とかーッ！」

「できれば崩してー」

戦法は単純である。

三人は下半身担当。カグラは攪乱後、身体によじ登つての上半身担当。人型を取っているからといって人の脳に当たる部分で思考しているとも限らないが、逃走者へ向かう姿を見るに視覚器官は少なくとも頭部にあるので、まずはそれを壊そうと思う。いや、作戦つてほど作戦でもないな、これ。

駆け出す脇を走る幾筋もの光の奔流を頼もしく思いながら――
時々カグラの四肢を掠っていくのですぐに不安しか抱かなくなったが――ケンタウロスもどきの剣を交い潜る。

巨大さは鈍重さとイコールで結ばれることが多いが、それは厳密には正しくない。鈍重であるのは、すなわち純粋な筋力の不足。体積比から筋力が不足することはありがちなので、鈍重である者が多いというだけの話である。

踏まえて見る、あの上腕二等筋。閃く剣筋の軌道上から身を反らした。衝撃で髪の毛の幾筋かが本体に別れを告げて風と共に去りぬ。ロマンスはない。酷い強腕である。衝撃波を生む剣圧ってどういふことなの。SEEDのくせに生意気だ。

ついでのように襲い掛かった立派な前足を炎の拳で弾く。横に逸れた肉をユートの槍が決り、太い咆哮を生み出した。

ギョ口とこちらを睨むブサイクな目に、憎悪にも似た汚い光。何故こつちを睨む。傷付けたのは間違いなくユートであるはずだが。

ふいに大気が揺れた。巨大なフォトンの揺らぎが酸素をかき回すと、水中で波に揺られているような感覚が訪れる。傭兵たちの間では、それを死神の準備運動と言ったり言わなかったりするのだが、要は危険の兆候である。

フォトンの揺らぎとはつまり、強大な力の行使の前触れであるが故に。

「カグラさん、炎行きます！」

声と迫る殺意に即座に反応。目の前に生まれかけた透明な結晶から離脱すべく、身を低くして岩肌を踏み抜き、前方に跳躍する。

頭上を掠めた何かにぶつかる熱気。湿気を撒き散らして消えたことから察するに、結晶は氷だったらしい。しかも高性能ホーミング弾らしく、溶かし漏らしが方向を変えて飛んできやがる。鋭利な先端を避け、平面を殴り付けて減勢、鈍角を蹴り付け粉碎する。

破片の煌めきが儚く消えるのを見届ける前に、達人の勢いで迫る衝撃を察して再度の跳躍。防弾コートの裾を持って行かれたのに歯を軋ませた。畜生、覆いを一枚失ったら尻が寒いだろうが。

腹立ちのまま、床に突き刺さった剣の腹に片足を掛けた。驚いたように切っ先を大地から引き抜き、上方に跳ね上げる。動きは鋭くとも、頭は鈍重なようで何よりだ。土くれと共に高く舞い上がった身体を見上げる複眼と視線が交差する。

ニタリと笑ったのは、丸太の腕を振り上げた敵か、無防備に宙を舞うカグラか。

「エミリア、ユート、足下！」

「わかった！」

「カグラ勝手すぎるーッ！」

各々の了承行動は、反応速度の違いが見事に上手い連携となった。

ユートの槍の柄が鋭く膝裏を払い、華麗なる膝かつくんを披露する。驚愕しつつも崩れた左前脚に力を込め直すアーガインだが、続けてエミリアの杖から放たれた光の一条が右前脚を貫通。意識の薄い箇所から重心を崩されて、目標を逸れて振り下ろす凶器の勢いのまま、低く体勢を崩して大地を削った。

ナックルを収納し、ストックから余りのワイヤーを取り出す。カウボーイの縄のように丸く括られた先端が向かう先には巨大な頭蓋輪投げは得意である。何故ならば景品が貰える勝負事だからだ――

――この場合の景品は、自分の命の保証であるが。

頭を通り、首を捉えた。握った鋼線の逆端をストックに引きずり込むと、質量の関係上、カグラの肢体は当然引つ張られる。風切り音に顔を顰めながら、頭蓋との衝突の寸前で収納をキャンセル、頭頂部に足を下ろす。

ワイヤーを放棄し、ストックから武器を呼び付ける。硬質な皮膚を蹴り付けるように飛び降りた。

俯く複眼にチエシヤ猫の笑みを与え。

「ようこそ、サンドバッグ」

呼吸と共に一閃した腕の先端、光を鈍く反射する赤い刃が濁った体液をぶち撒けた。

さようなら戦いに必須の視野確保。そしてこんにちは、周囲の確認もできずになぶり殺される運命。

硬いブーツの裏が、カグラの全体重を一身に受けて着地。ビリビリと痺れる両足は本来なら死神への挨拶状に他ならないが、余裕を持って立ち上がる。

「カグラ、えげつない・・・」

「あの笑顔は悪役にしか見えませんよ、カグラさん」

何とでも言うが良い。勝利の為に手段を選んでなぞ、いられるわけがないのが傭兵の世界である。

「ようし、行けユート！」

ワン！と良い子のお返事も高らかに駆け出すユートの背から悠々と追撃。

SEEDに悲鳴を上げていた連中が端っこでガタガタ震えているのをどうしてやろうかと考えながら、ドン引く女子二人に構わずサンドバックをボロ布と砂に分離する作業に入っただった。

5 - 2 ただただ長い迷宮は、（後書き）

実際、あのトチ狂った皆さんはどうやって回収してっただろう。後方から回収部隊でも付いて来てただらうか。不思議ですね。

5 - 3 最後の一つの尾を残し。(前書き)

白髪の扱い決定回。

5 - 3 最後の一つの尾を残し。

やっぱり消えるんだよなあ、こいつら。

出現と同じく虚空に跡形もなく溶けていく巨体を半眼で見送る。

正直、倒した実感が湧かなくて力が抜けるから肉くらい残して欲しいと思う。折角ケンタウロスを土台と人型に分ける作業が順調だったというのに水を差されたのは非常に腹立たしい。

あんまり腹立たしかったので、戦いの最中に邪魔だったから気絶させた失踪者の中から見知ったリトルウィング社員を探し、踏みこじっておくことにする。

「止めてよー。妙な趣味に目覚めちゃったらどうすんの」

「うちには立派な女王様がいるじゃない」

「チクって良い？」

「絶対だめ」

「あなたたちって、いつもそういうふうなんですか」

「うーん、まあ」

「おおむね」

薄情を体言したようなリトルウィング社員と違い、ガーディアンズの新人さんは健気である。一般人と分かる人から仰向けに直して怪我の有無を確認する甲斐甲斐しさは正に天使。見習いなよエミリア。

「そういうのって、人に言う前に自分が率先するものだと思うよ」
私は人格が完成してるから、行動パターンをこれ以上追加する気は毛頭ありません。

返事の代わりにプイと顔を背けた——先で、何やら少年が険しい顔をして黙り込んでいることに気付く。

ちなみにユートレーダーが反応しているときには、すぐに気付い

て確認しないと暴走するので注意が必要だ。メンテナンスをこの上なく頻繁に要求する制御脳の弱さは、メカニックに相談したら直ったりしないモンだろうか。

「どうしたユート」

と、聞く間もなかった。

「大地神さまのにおいがする！」

この暴走、リーダーの反応から何秒後だったんだろう。二トロもかくやの暴発すぎて首根っこの捕獲に失敗した。

掴んだ冷たい空気を即座に解放。掴み損ねた広い襟首を射殺す勢いで睨み付けながら状況を分析する。

「ユート、ちよつと、待て！お座り！」

「お前が待て！」

釣られて暴走しそうになった傍らの爆発体を押さえた。声掛けだけなら推奨するが、お前まで出馬してどうする。

大地神さまがどうのということは、間違はなくあのゲームの主人公になりそになったような中二病がいるはずだ。先日エミリアの――

――ミカの命を奪おうとした輩の前に、殺害対象を置くのはあまりに無防備である。

ぐるりと周囲を見回すが、ここにはぐったりと倒れた人々の姿があるのみ。SEEDが再発生する可能性は捨てきれないものの。

「エミリアしばらくここで待機な。ルミア、ここ頼める？」

「できればこの子も連れて行って欲しいものですけど」

言葉と共に即座にぶすくれる少女は放置。これは提案ではなく命令だ。ルミア以外行動の決定権限はカグラが握っているため、違反したらヒゲから天罰が下ると思え。

「・・・わかったわよ」

逸らした視線はほんとに分かってるのか疑わしい。しかしユートをこのままにしておくこともできないので、心底信用ならないが、

納得したものと自分を騙すことにして駆け出した。心底信用ならな
いが。

広い洞穴の先はまたも一面の雪原だった。降り注ぐ六花、吹き荒
ぶ風に体温を奪われないよう身体を縮込める余裕がないのが途轍も
なく口惜しい。

半透明の視界を注意深く探り足を止めた——矢先。

「うわああああッ！」

「おわあ!？」

弾丸の勢いで吹っ飛んできた肉の塊に巻き込まれ、危うく倒れる
かと思った。とっさに踏ん張った足が、深く白い大地に埋まる。衝
突物を受け止めた両腕と懐が痛い。

飛んでくるなら飛んでくると言えよ！お前が壁にぶつかろうと崖
から落ちようと、とにかく避けるから！

「・・・フン、また貴様たちか。アレはおらんようだが・・・ど
うあっても、私の邪魔をしたらしいな」

「こっちのセリフだっつのモヤシ」

反射的に返した言葉に、あからさまにモヤシこと中二病が顔を引
きつらせる。

思いも寄らない暴言を向けられたとでも言うような顔。さては貴
様、小汚い言語に触れた経験が未熟な坊ちゃんだな。しかも意味が
わからんというほどの極度さではなく、うっかり反応して傷付いち
やう程度の。悪意には比較的敏感な。

ふん、と奴が以前見せたように、最大級に小憎たらしい素振り
で鼻を鳴らす。

「なーにが、また貴様たちか、だ。こっちが見飽きたつてのパン
ク野郎。意外性の欠片もない犯人つてのが一番腹立つんだよ。そう
高くもない背で上から見下したようなツラしやがって。厚底ブーツ
はあれか？少しでも威厳が見せたくて履いてんの？そのバツサバサ

のコートは襟巻きトカゲの襟巻きみたく、威嚇のつもりなの？ん？」

「き、貴様……」

言い返す語彙もないらしい。ふはは、悔しかろう。

ふふんとわざとらしい笑みを返すカグラの懷で、ユートが頭を振って体勢を立て直した。

「おまえ、大地神さまかえせ！」

即座に気を取り直した男が、余裕めいた表情を取り戻す。

そんなのしたところで、先の失態がなくなるわけではないのにな。

「レッドタブレットのことか？」

ひらりと手にした下敷きを前後に振った。

「これは元々我々のものだ。消え往く存在ごときがこれを持つなど……おこがましいにも程がある」

ユートの視線が鋭くなるのに、再暴走の気配を感じて身構える。

止めるよりは便乗した方が勝率が高そうなので、ストックの整理をしつつ。

「消え往く存在、ねえ。前も聞いたな」

「何？」

言いながら、武器の優先順序を入れ替える。

アイテムを武器ストックに連動させて同時展開をプログラム。ちなみに知る人ぞ知る裏技だが、アイテムにアイテムをいくつか連結し存在範囲を誤認させることで、複数のアイテムを同時起動させることが可能である。その後の読み込みにやたら時間かかるようになる上、しばらくエラーが頻発するのは考え物なのだが、単純に便利だ。

「その、消え往く存在つてのは——たましい精神的な意味で？」

こちらの情報量を見誤っていたらしい男が目を瞠った。その隙を逃すカグラではない。

爆発寸前まで情報を留めに留めたストックを解放。大剣と呼ぶには無骨な鉄塊が中空に姿を現す。

「魔法剣、エーテルちゃぶ台返しッ！」

こちらを向いた刃の腹を突き出した両手でタップした次の瞬間、そこには空気抵抗をもとめせずに、刃の腹で空気を弾きながら平行移動する元氣な鉄塊の姿が！

驚きに刹那の静止。飛来する鉄の塊を、我に返ったモヤシは寸でのところで叩き落とした。

しかしそこで終わる攻撃など、カグラが仕掛けるはずがない。

インパクトの瞬間弾ける閃光。次いで起こる中規模爆発。目が眩んだ先に、大剣の陰に潜めて投擲したいくつものカードが襲来する。男の顔に初めて走る焦燥は、判断力を鈍らせた。馬鹿正直に手にした凶器を閃かせるのは愚鈍極まりない。

カグラがたった今仕掛けた行為を知っていてなお、弾くなど。

「ぐ・・・馬鹿なッ！」

次々と連鎖する閃光と小爆発。鼓膜を揺らし景色を歪ませるそれらに目を細めながら、カグラは白い大地を無惨に散らす。

手に纏うのは1対の刃。疾走するこちらに気付いた男に向かった右の刺突がぶれる。怯まず左を一閃するが、同じく人外の反射神経の前に空を切った。

逆手に握り直したセイバーを再び明後日の方向へ反らし、男が鋭く呼吸を吐く。同時に腕に走る僅かな痛みと痺れ。硬質な音を立ててカグラの手から放れたセイバーが宙を舞い。

「貰った――」

「やかましい！」

光の筋を残す速度で空気を裂いたナイフは、見事、男の腕を抉り抜く！

ストックから取り出すばかりが武器ではないのだ。フォトンを纏わぬただの刃であるうと、速度とタイミングで皮膚を裂く程度は可

能である。

「き、さまああああああッ！」

吼える化け物から距離を取る。鼻先を掠めた一撃にこの冷氣の中でさえ冷や汗が吹き出た。

しかしさまあ見る。前回、前々回とやられっ放しであつたが、今度こそ一矢報いてやることのできた。兎が狩られるばかりだと思つな、お貴族のお坊っちゃんよ！

「先ほどの爆発は一体何をした・・・！エーテル・・・ちやぶ台、だと・・・！？」

くくく、混乱してる混乱してる。

ニホンのサブカルチャーズならすぐわかるのになあ。知ってる？エーテルちやぶ台返し。夢のロボット競演に出てくる某人、移動に秀でてて使いやすいかつたんだ。最近の若者は知らないかな。し、知っているか。最近の若者は白黒ゲームボーイですら知らない。

これぞ、必殺技名は性質を表すという固定観念を逆手に取り、どうでも良い情報を与えて混乱させる、頭の良い堅物ほど囚われやすい秘奥義である。

ぶつちやけただ武器に閃光弾と火薬と起爆装置乗っけただけの合同技なんだが、媒体がアナログすぎて逆に推察が難しいらしい。難点は必殺技叫ぶのが恥ずかしいことな。

「ところでユートは何を転がってるの？」

「びつくりしたんだ！」

そりゃ悪かつた、と罪悪を込めずに軽く謝罪した。閃光だの爆音だの程度でそんなビク付くなよ。野生動物でもあるまいし——アツ、そうか。野生動物だったんだった。ごめんごめん。

カグラの言葉が男の隙たる動揺を招いたのは、決して偶然ではなかった。確信を持って紡いだ。その結果である。

こいつはミ力を知っている。【ミ力】を認識しているかは別とし

て、エミリア以外の【何か】がエミリアに宿っていることを、少々の驚きで終わらせた。つまりはその現象を肯定できる常識の持ち主だということだ。今、このタイミングでレッドタブレットを求めている上にその内面。八割あたりを付けていた事実であるが、最早旧文明人だと見て間違いないだろう。

そして奴は、ミカが旧文明人である以上、ミカがカグラたちに事情を話すことを考えない。カグラたちがミカを受け入れることも同様である。あくまでも旧文明人は現代人と相入れない存在だと思い込んでいる。

だから、カグラが旧文明人の目的を知っているとは思わない。

「何をしたかなんて白状すると思っただけならあまーい脳味噌をお持ちだな。白味噌？私、あんまあの甘いのが好きじゃないんだよね」

今度はこちらの挑発に乗ることもなく、瞳に警戒を被せたままに刃を鳴らした。ポタリと落ちた生命の色が、大地の白を赤く染める。紅白おめでたいね。

「貴様、名は？」

「小早川秀明」

少年があれ？という顔をした。キリリと表情を引き締めて引き戻したダブルセイバーのグリップを握り直す。

「小早川秀明・・・消え行く存在にしては上等な者のようだ。覚えておこう」

ユートが首を傾げる。信じる方がどうかしているので罪悪感はない。周りの奴らがカグラカグラって連呼してただろ。人の話を聞かん坊ちゃんだな。

身を反転させる男を止める気はなかったので、左手の武器をかき消してユートの襟首を掴み直した。

片腕を負傷させたアドバンテージは決してチャンスではない。男の油断をなくした事実は、勝率を大きく傾かせる。それをわかって

いて傷付けたのは、単にこの場を収めるためだった。

長い道中に、SEEDとの争い、更には欠員。油断の有無に関わらず、不利はこちらであつたのだ。あくまで現時点での攻防は、一旦退かせるための手段に鬱憤を乗せただけ。退いてくれるならこちらの思惑通りである。

よつて、カグラは黙つて立ち去る背中を見届ける——つもりであつたのだが。

「その物言い・・・やはりあなたも旧文明の残滓なのですね」

素晴らしいバッドタイミングで洞窟から姿を現した少女の姿に空を仰ぎたくなつた。致命的な隙を生み出すからしないけど。

六花を髪に纏わせながら眉を顰める落ち着いた物言いの少女の身は、言わずもがなエミリアではない。ちよつと。何出て来ちゃつてんのミカちゃん。

「フン、出てきたな、愚かな裏切り者め」

ほら気を取り直しちゃつた。

偉そうに腕を組んで足を止めた男に舌打ち。降り注ぐ冷氣に吸着された音は、残念ながら積もる雪原の一部となり果てて消えた。

ちなみに舌打ちはミカにも届くことはなかったらしい。不遜な態度に細い眉を釣り上げて、ミカは言い含めるように口を開く。

「裏切り者などと称される覚えはありません。私は、一度たりとてその計画に賛同してはいないので」

カグラの横を通り抜けて前へ進もうとする小さな肢体を、さすがに空気をブチ壊さない程度のさりげなさで押し止めた。

物言いたげに見上げる視線はまるっと無視。ミカに実力があるのは百も承知だが、この男に敵うほどでないのは前もつて把握しているのだ。子兔を化け物の前に差し出す趣味はないし、そもそも何より、勝機があるにせよエミリアの身体に無茶はさせたくない。

大人な彼女は、アイコンタクトでカグラの気持ちを察してくれた

らしい。一步下がり、カグラの斜め後ろに位置取った。

「今この時代、この世界があるのは、ここに生きる人々の努力の結晶。誰もそれを奪う権利はありません」

「フン、何を世迷い事を。元々この時代に築かれし平和は、旧文明の遺産によつてもたらされたものではないか。我らこそが万物の創造主。必要なら奪い、不要なら捨てるまでだ！」

レリクスの恩恵に預かる身として、そりやお前らの文化が役立つてゐる事実は否定しない。しないが、それとこれとは別だ。前在文化見て育つなんて当たり前だろうが。あるもの使つて何が悪い。

それと、子は親の物論理はとてとても嫌いである。子供は守られるものであり、大人は子供を守り、自我の芽生えを促す義務がある。親はあくまで主体となつて子を育てる存在なのであつて、子が健やかに育つよう、子を守る社会を作る義務は全ての大人にあると思つてゐる。子は親の物ではなく、新たな大人となるべく育てられる雛である。連綿と紡がれる理を受け継ぐ存在である。いわば、人という存在を世界に維持するための至宝である。

その子供を、奪い、捨てることを肯定し推奨し実行するという。

「ならば私は、力づくでもあなたを止める！」

敵だ敵だと思つてはいたが、今この瞬間、男はカグラにとって完全なる害悪だと見なされた。

肯定するだけならば個人の思想の自由であるが、推奨するなら嫌悪する。まして実行するといふのなら。

「……どうしたんだ？」

セイバーをストックへ。杖を構えるミカの隣で、カグラは明らかに殺意を伴つて全ての武器に意識の手を掛けた。襟首を解放された少年の疑問に耳を傾けることはせず、全ての五感を男へと向ける。

「……………」

余計な言葉は発さない。自分の声は、誰よりも自分の鼓膜に響くのだ。五感を揺らす雑音は、一つでも少ない方が良い。

少しでもミカに近付いてみる。エミリア現代人の底力、一切の遠慮なく味わい尽くさせてやる。

3対の鋭い眼光にか、刹那眉を跳ねさせた男は、しかし鼻を鳴らしたのみで当初の予定の通り踵を返した。

「そう急かずともまた会うことになるだろう。楽しみは取っておくのが良い。せいぜい腕を磨いておくのだな——小早川秀明よ」
一見格好良さげな態度で行き先不明瞭な崖下へと飛び降りる。見送った背はすぐさま消えて、この漲った殺意をどこへ向ければ良いんだらうと途方に暮れた。

ていうか、何してたんだらうあいつ。こんな寒い場所で、ぼつちで。浚った人間を道中ぼとぼと落としてきて。

「・・・え、コバヤカワって、誰？」

「わかんない」

眠りから覚めたように目を瞬かせるエミリア。反対にミカは眠つたらしい。疲れちゃったみたい、という少女の言葉に、心労かなとあたりを付けて頷いた。

まあ兎に角、自分がヒートアップする事態に陥つたのは予想外だったものの、危機は回避できたわけだ。後は足手纏しつこづじやいたちを回収してオシマイ、と——。

「あれ、ユート何凹んでんの？」

身を翻したところで、危うくうずくまる少年を蹴り飛ばしそうになったてたらを踏む。膝の進行方向がジャスト顔面コースだった。うっかり鼻を砕いたりするとちょっとしたトラウマになる恐れがあるから、唐突にそういう体勢取ってるの止めなさいよ。

エミリアの無邪気な問い掛けに、うー、という獣の唸り声。ライオンの子がむずがるような声音に頭を掻いて、首根っこを掴み上げる。

「唸ったって仕方ないだろ。年齢の割には強いとはいえ、お前結局経験不足なんだよ」

「・・・わかってるけど、くやしい」

「あんなの勝てる方がおかしいんだって！」

「カグラはちゃんと当てたぞ」

「そうなの？」

ずるずると引き擦られるユートから上がってきた赤い目に、一応、と憚然として頷く。

「こつちも経験が違うつつつってんだろ。当てたつても不意打ちだしな。正面切ったら結果が見えてる」

「だってさ」

再び少年を向く兎の目。当然だが憂いは晴れない。

心なしか萎れた黒髪を、小さな手がわしわしと撫でた。何かその撫で方覚えがあるな、と小首を傾げつつ洞穴へ。

「カグラが駄目だったんだからさあ、そんな落ち込まないの」

「しかし、旧文明人の計画を止めるってことは、あいつに勝つのは必要条件だろうなあ」

下敷きを割ってやれば良い話かもしれないけど、カーシュ族と全面戦争する勇気はないしな。

「・・・あのさ、カグラって、慰める気があるわけじゃないの？」

「あんまないな。ところでユート、そろそろ自分の足で立たないと、雪のクッション途切れるぞ」

背中を擦るような低空で運ばれているからには、直接地は辛いんじゃないなろうか、という大人の優しさである。物運びという余分な労働をしたくないとかの自分本位な言葉ではなく。

だがしかし、見習いカーシユの脳の残念さを舐めていたようだ。のろのろと動き出した少年は、引き擦られながらカグラの腕を掴み、二の腕辺りにしがみ付いた。なるほど、それなら擦るのは踵だけーって、ふざけんな。そこまで身を起こすんなら潔く歩け！

「はやく・・・死にふれないと・・・。お兄のように強くならないと・・・あいつに、勝てない」

こいつ、ここまでしてなおシリアスに持ち込もうとするのか。侮り難し辺境民族。

いつそ感心すら抱いたので、どうにか剥がそうと奮闘していた左手に諦めを伝達させた。右腕は引き続きコアラの抱き枕になってなさい。それは現在自分の身体から切り離された物体だ。

「うーん、まあ、あたしもいつまでもあんたにオンブにだっこじや格好悪いし、がんばらないとね」

完全にベッコベコになったユートの様子里に反省するところがあつたらしい。励まし役のエミリアまで肩を落とすのを視界に入れて、自然な動作でエミリアの視界から左腕を隠す。この手を掴ませない。僕の魂ごと掴まれてしまう気がするから。

ちなみに今回はエミリアのおかげで助かってるんだけどな。

「あなたの実力だって」

飴か鞭かの選択肢でマウスカーソルをさまよわせているカグラが決定ボタンを押す前に、雨音のような小気味の良い声が響いた。

「そう、悲観するほどでもないんじゃない？」

「あんた」

ルミアが眉尻を持ち上げた表情で腕を組んでいる。

小柄な少女の立ち姿はまるで百合の花のように凜とした様子であるが、しかし自分の目は花の背後に釘付けにされた。まるで戦場の医療所のように整然と、意識不明の人間どもが大地に並べられてい

る。

その数およそ25人。ルミア、これ、一人で並べたの？面倒見が良いとか几帳面だとかより、何だか妙なこだわりを感じるんだけど。

保護者の内心の混乱を置いて、栗色の髪を靡かせながらエミリアの前に立つ少女。困惑の表情を見せる白い面に、白魚の指を突き付けた。

「もっと自信を持ちなさい。あの精巧なホログラフを見破っておいて、自信がないと言われると、一緒にいたこっちがショックなのよ！」

言わざるを得ない。ツンデレ乙！と。

ぽかんと間の抜けた童顔を前に、秀丽な顔を真つ赤にしたルミアは思い切り顔を背けて早足に距離を置く。戦死者の群をてきばきと介抱する動きが妙に口ボくさい。

「何をボーツとしてるのツ。少し褒められたからって浮付いてないで、あなたも手伝いなさい！」

「だ、誰が浮付いてるってのよ！ちよっと手際が良いからってつけ上がらないでよねー！」

青春である。

ついにお互いデレ期に入ったかー、と感慨深く見守るカグラの腕が、小刻みの振動でマッサージされた。見れば、無粋に輝くランプがテカテカと存在を主張している。

通信信号をとりあえず無視して端末を展開。おや？通信ログの様子か。

「ようやく通じやがったかこのバカ！定期報告！定期報告！何度言ったら脳に浸透しやがるツ！」

「止めるよなあ、強制通信。不正アクセスすると端末寿命縮むだろっが」

そついや通信障害電波がどうかエミリアが口にしていたような気がする。通信状況なんぞ見てもいなかった。定期報告とか、一人旅メインだったカグラが慣れるまでは気長に待つべきだと思う。

脳に流れたそうした思考はどうやら舌を伝って空気に触れたように、鼓膜が破れそんなほどの騒音を食らった。リミットゲージが振り切れる寸前、刹那の見切りで強制終了。

音が消えたかのような静寂を取り戻した中で、カグラは清々しく笑い、高らかに声を上げた。

「さて、キャンプファイヤーでもやるかー」

「帰ろうよ」

だって、帰ったらクラウチうるさいじゃん。

状況整理と記憶整理

良い天気である。外を眺めると視界一面に広がる無数の星々。妨げる無粋な雲など一つたりとてない。

まあ、宇宙空間だから天気とかないの当然なんだけど。星雲という意味での雲なら存在するが。

「カグラ、見付けたあー！」

「げ、エミリア！」

人気のない通路でやる気なく資料に目を通していたカグラを発見したのは、案の定エミリア——ではなくユートレーダーだった。ためえ、余計なモン連れて来て、何を満足そうな顔で仁王立ちしてやがる。いつ快気しやがった。もっと凹んでる。

ユートはエミリアと隔離しておくべきだったと今更悔やむがもう遅い。10人は座れる常設の長椅子に、膨れツラで腰を下ろす台風から距離を取ろうにも、逆側をネズミ花火に陣取られている。

駆け出して逃走するという手段もなくはないものの、その後が面倒だしなあ。人間、諦念は大事である。大人しく両腕を押さえられることにする。

「着鑑早々、なあーに逃げてんのよ」

「小言が好きな人間がいるはずあるまい。まして大言なら尚更いらん」

「代わりにあたしが説教食らったってのー！子供に押し付けて逃げるとか、少しはバツ悪く思いなさいよアンタ！」

「大人なエミリアなら、きっと上手く収めてくれると思って」

「えっ」

「当然嘘だけど」

「コロスッ！」

何だ、突然殺意の波動に目覚めたりして。廊下つてのは声が響くんだから、大人しくしなさい。

素早く口を塞いで拘束する。具体的には、左に座るエミリアの口を右手で塞ぎ、左手は肩へ。その過程で振り上げた短い腕の関節を絡め取って背中側に回し、左半身を固定。右半身は身を寄せることで自由を奪う。足？この子の短い足で何ができると言うのかね。踏み付けられても、鉄板補強ブーツは痛くも痒くもないよ。

「んーッ、んんーッ！」

不自由な鳴き声を披露するリトルウィングのマスコットは置いていて。

「で、クラウチ何だって？」

「よくわからない」

髪が入る隙間すらなくこれであるから、人としての思考回路を野原に置いてきたとしか思えないんだ。いや、置いてきたって表現だと、元々あったものと前提してることになるな。間違いだ。ごめんな。

息を吸って言葉を紡ぐという労力の全てに対し、斬鉄の一刀を決められた。何か言おうかと思っただが、相変わらず止めた。これ以上労力を無駄に消費はすまい。なんせ無駄であるから。

替わりの溜息と共に、仕方なしに小脇に抱えたエミリアを解放する。その小さな口から濁流が姿を現す前に。

「で、クラウチ何だって？」

「それがさー！聞いてよ！」

水に向けた途端、ナマハゲが狍犬にクラスチェンジした。星を称えた光属性の瞳に映る自分が嫌そうな顔をする。さもありません。どちらかと言えば自分は、他人の不幸を蜜とする闇属性であるからだ。「おっさんってば、あたしの言うこと信じてくれたんだよ！」

至近距離から解放された意味の分からん弾丸に眉を寄せる。属性違いってのは、時にバベルの塔の崩壊ほどの大事を引き起こすらしい。言語が違うとは、まさかの事態である。

順序を追え、順序を。ツーと言ってカーが理解できる事象は、魂を通わせた片割れとだけ繰り出せる奇跡だ。心底他人のカグラとエミリアで起こせるわけがあるまい。

「だからね――」

おい、ユート、人の装着端末弄くり回してんじゃねえよ。お前物凄い機械弱そうだから、一瞬の隙を突いて破壊しそうで怖いんだよ。あとそっちに曲がるように人の関節はできていないから、それ以上腕を引っ張らないように。

「人に話させといて即座に余所事しだすってのは、ケンカ売ってんの!？」

「エミリアが簡潔に物事を伝えられるようになればちゃんと聞きますよ。ほら、学習しろ」

「ぐぬぬ」

数秒歯を食い縛って内容を簡潔に構築し直そうとしたようだが、どうやら時間は無駄だったようだ。晴れやかな表情を浮かべ身を乗り出す。

「オッサンがね、ミカのこととか、亜空間研究の危険性とか、信じてくれたんだよッ!」

構築し直せてないよ、脳が残念なアホの子。

「何その再暴投。エミリア、ボールはちゃんと掴んでから投げるもんだよ。あとミットはここ」

両耳を指さしながら座り直させるも、あまり効果が見られない。でねでね、という弾んだ声は、どうも体重を水素やらヘリウム並に軽くしているようである。どうやっても大人しく腰掛ける気がない。

事実確認に視線をくれた先で、ユートは眉間に皺を寄せて記憶を辿る。

「たしか、検討しとくつていつてたぞ」

グレーじゃねえか。

「疑わしきは罰するの！考えとくは決定なのッ！」

中立を認めないとは何という暴君。お前みたいな奴が冤罪を巻き起こして世間に迷惑かけるんだぞ。

ついには椅子から離れてルラルラと踊り始めたエミリアから、他人の距離まで尻を動かした。

同じく付いてきたユートの前にホログラムを展開する。丸くした目で流れる文字を追い、すぐに諦めたのか下がり眉毛でカグラを見た。自分で頑張る精神が著しく偏っている少年に幸あれ。

「いいかー、お前にもわかるように説明してやるから集中して聞け」

「・・・うん」

「理解できたらプリン奢ってやる」

「カグラ、はやく説明してくれ！」

著しく偏っている少年は滅びる。途端に死んだ魚の目が聖人の輝きを灯し先を急かす。

脳の起動のため後頭部に一撃くれてから、最近チャックの緩くなってきた口を開いた。

「今回の失踪者たちには、ユートのときと同じく、失踪中の記憶はなかったそうだ。つまり、失踪騒ぎについて進展はない。あの白髪の行動の意味についてはわからないままで一端置いておく」

「うん」

ホログラムを切り替える。亜空間研究についてのニュースがうつらと流れるのを見守り、案の定理解していないユートに解説を紡

ぐ。

「亜空間については分かってるか？簡単に言えば、この世界と別の世界を繋ぐための研究だ。目的は、世界の資源不足解消のためだな」

頷く瞳に理解の色。滞りなく説明を続ける。

「しかし実際は、ミカと同じような存在である旧文明人——私たちの祖先みたいなモンだが、精神だけになったそいつらが肉体を得るための手段だった。亜空間の一部に存在する旧文明人が、私たちの魂を追いやって身体を乗っ取る方法で生き返ろうとしてる。亜空間実験は、その初期段階として、待機してる旧文明人たちをこっちに呼ぶために行ってるわけだ」

視線が泳ぎ出したので、言葉の羅列速度を僅かに緩めた。

ところでいつの間にか傍らに戻っていたエミリアも同じく拝聴してるのはどういうことだ。多分、状況からしてクラウチたちも同じこと言ってたはずだぞ。だからエミリアの妄言紛いを検討するって判断に至ったんだと思うんだが、違うのか。

嬉しすぎて聞いてた話がぶっ飛んだってんなら残念すぎて仕方がない。

「こないだまでは、その亜空間研究に、世間一同ノリノリだった。人類の未来を託すつつって巨大企業が拳ってお金出してただけど、ここに来て状況が一変した」

再度、資料の切り替え。映し出されたのは年代別の原生生物調査表である。

「ユート、こここのところの原生生物、今までと行動が違うと思わないか？」

「うーん・・・ラッピーたちが襲ってくるっていうのは、ちょっとおかしいと思ってた。いつもはおとなしいのに」

「そういえば、ラッピーって基本的に敵対するようなコじゃない

よね。図鑑で見た」

顔を見合う二人に安心した。それなりに観察眼つてのはあるらしい。言われなきや疑問を発しない辺りを矯正する必要があるが、基があるとなしとは大違いである。

「亜空間発生実験の影響で、原生生物が凶暴化するってことが分かった。そのせいで、今まで出資してきたスポンサーが軒並み離れちゃったわけだ。リトルウィングの親会社である、スカイクラッド社も例外じゃない。実質、今動いてるのはインヘルト社だけだな」

ユートが首を捻る。考えなしのくせに、以外となぜなにくんだから困る。

「でも、なんで凶暴化したんだ？」

「余所の空間の空気が合わなかったんじゃない？」

「カグラ適當すぎる」

今生に現れて最初の発言が「適當って素晴らしい言葉だよね」だった自分に、適當さを非難されてもな。嘘だけど。

「ちなみに問題はそれだけじゃなくてだな。今回の理不尽現象も亜空間のせいだったのが判明した」

「りふじんげんしょう？」

「理不尽っていうと・・・」

思考するエミリアを数秒放置。ユートは言うまでもなく、大人しくカグラの言葉を待つ体勢を崩していない。少しは考える努力をだな・・・いや、無茶な願いだとは理解しているが。

顎に手を掛けて思案していた少女は、やがて弾かれたように顔を上げた。

はい、エミリアくん、答えて。

「何も無い空間からSEEDが発生したの、すっごい理不尽だった！」

別に理不尽だった点を考えると云ったつもりはないんだが、まあ

いい。正解である。

「具体的に確認されたのは、亜空間が生み出された際に、周囲にいる人間の思考が具現化するつつう現象だ。今回のケースでは、先のSEED事変の恐怖が表面化したせいで、SEEDが具現化されることになったみたいだな」

噂が本当になるとこそのゲーム、もっかいやりたいなあ。惑星移動の間にお世話になるんだよね、サブカルチャーって。

深刻な悩みを抱えた先輩に「レッツポジティブシンキン！」って発言したら、ひたすらハマハマって唱えられたんだぜ。酷い先輩だと思うだろう。可愛い後輩が即死耐性持ちだと察せられないなんて

「じゃ、やつぱりあの施設、亜空間研究のためだったんだ」

そこは間違いないだろう。エミリアの面倒くさ過ぎるパターン分析は当たっていたわけだ。

単純に凄いいんだけど、他の人間を納得させるのに、どうしてエミリアがそういうことできるのかをまず説明しなきゃならん点が果てしなくネックである。この子実は凄い頭良くて！なんつつて信じるなど、生まれたての赤子にも無理な相談だ。

「なんかすつごい失礼なこと考えてない？」

「で、各社が亜空間研究は危険なんじゃねえかってんで異論を唱え始めて、手を引いたのが現在だ」

「ねえ」

「以上、サルでもわかる現状説明、終わり」

「ちよつと」

半眼でカグラを見据える血生臭い少女から視線を外し、ユートが理解したかどうかを確認——しようとして止めた。言うまでもないからだ。途中から発言がなかったのを気に留めなかった自分も悪かったのだと思う。

どう考えても、一番悪いのは健やかな睡眠タイムに突入してる隣のバカだけだ。

説明は最初から、相棒を自称するエミリアの脳の足りない部分を補うためだったのだと自分に暗示を掛ける。この子が把握してないと、命の危険性があるからだ。決してユートの学習能力に期待したわけではない。つたらない。

小柄な肢体が視界の端でゆらりと揺れる。同時に肩に掛かった1ミリグラムの負荷を刹那の判断で振り落とし、骨とリノリウムが対面する小気味の良い音が鼓膜を震わせた。画用紙を引き裂くような悲鳴は耳を癒す良いBGMだなあ。

おや、どうしたの、ユート。そんな恨めしそうな顔で頭を押さえて。

「・・・でも、あの黒い服の男の情報ないのって厳しいよね」
そうだなあ。何か一つでも情報があればなあ――。

「――て、あああああああああッ！」

「な、なにッ？」

「敵襲かッ！」

「ちっげーよバカ！いや、人のこと言えないんだけど、ああー、畜生、何でこんなん忘れてたんだ！？」

ベンチを蹴り付けるように立ち上がり、リノリウム床を削るように走り出す。

情報と言えば、これ以上ない情報が入ってるじゃないか。

あの男の目的は亜空間に繋げることなのである。あの施設は亜空間研究のためだったのである。亜空間研究に乗り気なのは今現在インヘルト社のみであり、また、他はスポンサーであって建設物を作るには至っていない。よって、あの男があんな研究施設の奥地に入

れる事実、イコール、インヘルト社の人間ということになるだろう。
そして。

「思い出した！あの顔見覚えあると思ってたが、今、完全に思い出した・・・ッ！！」

死んだと同時に記憶細胞でも紛失してたんだろうか。お帰り脳細胞。いなくなってた事実に気付かんかったわ。

ちよつとー！とがなる少女の声を振り切って、カグラは一目散に廊下を突っ切った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7971n/>

Only one end is the best.

2011年12月28日21時54分発行